



|              |   |
|--------------|---|
| Title        | Communication-Design 7 全文   |
| Author(s)    |   |
| Citation     | Communication-Design. 2012, 7   |
| Version Type | VoR   |
| URL          | <a href="https://hdl.handle.net/11094/22244">https://hdl.handle.net/11094/22244</a> |
| rights       |   |
| Note         |   |

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 目次

### 【実践報告】

|   |         |
|---|---------|
| 米国科学振興協会（AAAS）から学ぶ                          | WEB 1   |
| 飯島玲生（大阪大学大学院生命機能研究科博士後期課程）                  |         |
| 2011年度ワークショップ入門講座                           | WEB 19  |
| 森栗茂一（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）           |         |
| 平川秀幸（大阪大学CSCD）                              |         |
| 西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部）                          |         |
| 非構成型演劇ワークショップの可能性について                       | WEB 33  |
| 蓮行（大阪大学CSCD）                                |         |
| 笑う舞鶴－「シリーズとつとつ」実践報告－                        | WEB 39  |
| 西川 勝（大阪大学CSCD）                              |         |
| 豊平 豪（一般社団法人 torindo / まいづるRBスタッフ）           |         |
| 森真理子（一般社団法人 torindo代表理事 / まいづるRBアート・ディレクター） |         |
| 砂連尾 理（ダンサー・振付家）                             |         |
| 淡路由紀子（特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」 / 施設長）         |         |
|   |         |
| 【研究ノート】                                     |         |
| 「現場力」ノオト（2012年・秋）                           | WEB 85  |
| 西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部）                          |         |
| 大村佳代子（大阪大学大学院医学系研究科博士後期課程）                  |         |
| 中原京子（大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程）                  |         |
| 河合 翔（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）                  |         |
| 野島那津子（大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程）                 |         |
| 山森裕毅（大阪大学CSCD、招へい研究員）                       |         |
| 本間直樹（大阪大学CSCD／大阪大学大学院文学研究科）                 |         |
| 岡野彩子（大阪大学CSCD、招へい研究員）                       |         |
| 宮本友介（大阪大学CSCD／大阪大学大学院人間科学研究科）               |         |
| 安田伸行（介護職）                                   |         |
| 上條美代子（看護師）                                  |         |
| 西川 勝（大阪大学CSCD）                              |         |
| 投稿規程  | WEB 104 |

本誌掲載の論文・実践報告・研究ノートオリジナルテキストおよび関連する動画等は、大阪大学機関リポジトリ（OUKA）に掲載されている。

# 米国科学振興協会（AAAS）から学ぶ

飯島玲生（大阪大学大学院生命機能研究科・博士後期課程）

## Learning from “American Association for the Advancement of Science (AAAS)”

IJIMA Leo (Graduate School of Frontier Bioscience, Osaka University)

米国科学振興協会（AAAS）は米国の科学技術を推進する上で重要な役割を担っており、日本の科学技術体制を考える上で有用な示唆を与えてくれる。AAASは多彩な事業を展開しているが、このことがAAASの事業を理解することを難しくさせている。その多岐にわたる事業内容を知る方法として、AAASの年次総会に参加し、調査をすることが有効であり、実際にこれまでも様々な報告がされてきた。しかしながら、大規模に開催されるAAAS年次総会の全てのプログラムを比較してAAASの活動内容を特徴づけることはこれまでされていなかった。そこで、AAAS年次総会に参加し、全体のプログラムを分析することで米国の科学技術史におけるAAASの社会的な役割について考察を行った。本稿では、長年AAASが築き上げてきた分野横断的な議論の場の重要性を紹介するとともに、日本の科学技術体制に対する3つの示唆、「政策提言」、「政策分析」、「分野横断的な議論」を提案する。

### キーワード

米国科学振興協会、AAAS、サイエンスコミュニケーション、科学技術政策、分野横断的な議論

American Association for the Advancement of Science, AAAS, science communication, science policy, cross-sectional discussion

## 1. 序論

本稿では、米国科学振興協会（American Association for the Advancement of Science、略称AAAS（トリプル・エイ・エス））の年次総会を調査し、米国の科学技術体制におけるAAASの社会的な役割を考察するとともに、日本の科学技術体制に対して提案を行う。本稿で取り上げるAAASは「すべての人々のために全世界の科学とイノベーションを促進すること」というミッションを掲げて活動するNPO（非営利組織）である<sup>1)</sup>。実際に、理科教育や科学コミュニケーションから科学技術政策、研究者のためのキャリア問題まで、非常に幅広い活動を行っている。また、科学雑誌「Science」誌を毎週発行しており、会員数は全世界に1000万人を超えている。米国のNPOの定義は、日本における財団法人、社団法人、大学なども含むので、日本におけるNPO法人と同義ではない（文部科学省科学技術政策研究所 [2001]）。しかし、非政府組織であるこの巨大な組織が米国の科学技術推進体制に対し

て、大きな影響力を持っていることは特筆すべき事実である。

これまで、日本における科学技術の今後の展開に有用となるような示唆を得るために、科学技術を巡る主要国の政策動向について様々な調査研究がなされてきた（文部科学省科学技術政策研究所 [2009]）。その中でも大学や研究機関における科学研究を市場経済に浸透させ、産業的な発展を成し遂げた米国については、科学研究の歴史的な背景を踏まえて、詳細に調べられている（上山 [2010]）。現在のような強力な科学技術体制を形成する上で重要な役割を担っていたのが、AAASのような科学者コミュニティの存在であった。また、今後の日本の科学技術体制の改善を検討する上で、現在においてもAAASの活動は非常に注目されている（榎木 [2007 : 49-55]）。その多岐にわたる事業内容を知る方法として、AAASの年次総会に参加し、調査をすることが有効であり、実際にこれまでも詳細な報告がされてきた（難波 [2007 : 63-69]）。年次総会は、一般の市民や科学者にも開かれた場である一方で、AAASの事業に関わる様々な人や組織が集まる場である。よって、年次総会のプログラムの企画内容や企画趣旨を理解することはAAASの事業全体を理解することにつながる。しかしながら、年次総会の参加者数は8000人以上、セッション数は200程度と大規模であるため、全てのプログラムを比較して、AAASの活動内容を特徴づけることはこれまでされてこなかった。また、AAASの活動内容の社会的な役割に注目して、米国の科学技術体制の考察を行い、そこから日本の科学技術体制への提言をするような研究は極めて少ない。

そこで、筆者は2011年2月に米国ワシントンD.C.で開催された年次総会に参加し、AAASの活動内容の調査を行い、AAASの社会的な役割を考察するとともに、日本の科学技術体制に対しての提言を本稿にまとめた。第2章ではAAASが設立された経緯とAAAS年次総会の全体の様子について述べ、第3章ではAAAS年次総会のプログラムを具体的に紹介する。第4章ではAAASの多彩な事業を紹介し、AAASの社会的な意義や役割について考察した後、第5章ではAAASの活動から日本が学ぶべき3つの機能、「政策提言」、「政策分析」「分野横断的な議論の場」を提案する。

## 2. AAASの概要

### 2.1 設立の時代背景

AAASは、科学技術と社会全般にわたる領域にまたがって広範な活動を展開しているが、設立はおおよそ160年前の1848年にまで遡る。AAASが発足した当時は、科学者がようやく市民権を得始めた時期である。AAASの設立の背景には、科学啓蒙を掲げる一方で、科学技術を推進し貢献することと引き換えに職業としての科学者の社会的地位を向上させる狙い

があった(綾部 [2007: 56-62])。

第二次世界大戦以前は、大半の大学や研究機関の研究費は、連邦政府ではなく、民間の企業や財団の寄付によるものであった(Richard H. Shyrock [1947])。しかし、1941年のペニシリンの大量生産による医療への大きな寄与、原子爆弾をはじめ様々な武器開発の成功を受けて、第二次世界大戦後に米国の国家政策の中で科学技術が重要課題として取り上げられるようになった(広井・印南 [1996: 5])。国立衛生研究所(NIH)と並び、20世紀後半の米国の科学を支えてきた国立科学基金(NSF)の設立のもととなった調査書「科学-果てしなきフロンティア(Science - The Endless Frontier)」(1945年7月)では第二次世界大戦後においてすでに、基礎研究の重点化、科学技術予算執行に関する研究者コミュニティの意向の尊重、の重要性が指摘されている。当時、連邦政府に対して強い影響力を持っていたのが、経済力を含めて社会的に強い影響力を持つ利益団体・民間ロビイストである。彼ら利益団体や民間ロビイスト、議会、行政機関の間で、連邦政府による科学研究振興の必要性や、科学研究方針における科学者の自律性の尊重についての政治的なコンセンサスが得られたために、国立科学基金(NSF)や国立衛生研究所(NIH)の予算執行の権限が強化され、現在のような科学者コミュニティの意向が尊重される米国の科学技術体制が作られた(天野[2006]、井村[2005])。こうした流れを受けて、科学者コミュニティであるAAASは科学研究の啓蒙活動だけでなく、科学技術政策関連の活動に力を入れるようになった。

## 2.2 年次総会

2011年で177回目となった2011AAAS年次総会(2011 AAAS Annual Meeting)は、2月17日から21日の5日間にわたって、米国ワシントンDCの中心部に位置するワシントンコンベンションセンターと2つのホテル(ルネッサンス・ワシントンDC・ダウNTOWNホテル、グランド・ハイアット・ワシントン)を会場として開催された。AAASの年次総会の特徴的な点は、科学研究者や大学院生のみならず、行政官や科学ジャーナリスト、研究機関の広報担当、親子連れなど、学問分野や立場の異なる人々が参加していたことである。そして、それぞれの参加者層にあわせた多彩なプログラムが組まれている。AAASの会長であるアリス・ハング(Alice S. Huang)氏や米国大統領科学補佐官のジョン・ホルドレン(John P. Holdren)氏による基調講演、時事的話題に関する講演、多種多様なシンポジウム、ポスターセッションのほか、大学院生や研究員などの若手研究者を対象にしたキャリアワークショップ、産業的視点の議論の場であるビジネスミーティング、障害を持つ研究者のためのセミナー、子供向けの体験型展示、第一線で活躍する研究者と米国の高校生の昼食会など、日本の学協会では想像できないような多種多様なプログラムが用意されていた。また、AAASの各セッション担当者や加盟学協会の会議もこの期間中に行われている。

現在の年次総会のプログラムを概観すると、様々なバックグラウンドを持つ8000人以上の

参加者が集まる AAAS の年次総会が、いかに他の学協会と異なっているかを実感させられる。150 件のシンポジウム、25 件のワークショップ、10 件以上のレセプションなど、わずか 5 日間の間にきわめて多彩なプログラムが繰り広げられた。第 3 章では、それぞれのプログラムの様子を具体的に紹介していく。

## 3. AAAS 年次総会の特徴的なプログラム

### 3.1 シンポジウム

AAAS 年次総会の多彩なプログラムの中でも学際性や多様性を特徴づけているのが 150 件にも及ぶシンポジウムである（中村 [2007: 70-76]）。シンポジウムは表 1 のように、12 のテーマに分かれている。テーマは「気候変動（Climate Change）」や「新興分野の科学技術（Emerging Science & Technology）」、「国際協力（Global Collaboration）」と分野横断的なテーマが設定されている。シンポジウムの国際性について検討するために、150 件のシンポジウムのオーガナイザーと、各セッションのプレゼンターターの所属を国別に比較した（表 2）。すると、オーガナイザー 150 名のうち、86% の 129 名の所属は米国であった。2 番目に多い所属先は英国であったが、その割合は全体の 4.67% の 7 名であり、ほとんどのオーガナイザーの所属が米国であることがわかる。同様の傾向がプレゼンターターの所属先の国についても見られた。所属先の国は合計 29 カ国であり多岐にわたるものの、合計 619 人のプレゼンターターのうち、76.25% の 472 名の所属は米国であった。2 番目に多い英国の全体の割合が 3.88%、3 番目に多いカナダも 2.42% と低く、ほとんどのスピーカーの所属先が米国であった。このことから、AAAS 年次総会のシンポジウムは学際的であり、分野横断的ではあるが、ほとんどのセッションの構成員の所属先は米国であり、基本的には米国社会を背景にして問題設定された議題が話題の中心であることが示唆された。

次に、1 つのシンポジウム毎のスピーカーの所属国の違いを比較してみると、設定されたテーマごとに国際性が異なっていた。表 1 は、各シンポジウムのスピーカーの所属国の多様性を評価するために、シンポジウムのテーマ毎に国際性の多様性指標（以下、国際多様性指標）の平均と分散を算出したものである。国際多様性指標は、各セッションの構成員（オーガナイザー、共同オーガナイザー、モデレーター、ディスカッサー、プレゼンターター）の 2 人ずつの組み合わせ全てについて、所属先の国が同じである場合は 0、異なる場合には 1 をとっていき、各セッションの総計を全組み合わせ数で割ったものである。1 に近いほどスピーカーの所属国がばらばらで国際的なセッションであることを示し、0 に近いほどスピーカーの所属国が同一であり国際性がないセッションであることを示す。国際多様性指標の平均値を見ると、最小値は 0.050、最大値は 0.493 であった。また、国際多様性指標の分散も最

小値は0.173、最大値は0.403であり、シンポジウムのテーマによって、平均も分散も大きくばらついていた。

さらに細かくテーマ毎の特性をみるために、国際多様性指標の分布を比較した(図1)。これにより、シンポジウムのテーマを特徴づけることができる。例えば、「教育 (Education)」、「生物学・衛生学 (Human Biology and Health)」はセッションに関わる所属機関の国同士、すなわち米国同士である場合が圧倒的に多い。実際のシンポジウムの内容も、米国国内の科学教育や大学研究を扱ったものや、米国を中心とする国内の医薬・医療産業に関するものである。一方、「国際協力 (Global Collaboration)」や「社会と政治 (Science and Society)」のセッションでは様々な国の所属機関から構成されている。扱うテーマも複数の国による合同シンポジウムや、地球規模の科学技術政策などがあり、国際性のあるシンポジウムが組まれている。このようにして、登壇者の国際多様性指標を比較することで、150件にも及ぶシンポジウムの特徴を分析することができた。

最後に筆者が参加したシンポジウムの内容について具体的に紹介する。様々なシンポジウムに参加したが、通常の学協会と異なると感じた点は前述したように自然科学や社会科学といった領域を超えて、様々な学問分野の視点がシンポジウムのテーマに組み込まれていることである。例えば、筆者が参加した「未来の大学 (The University of the Future)」では、科学、工学、技術、開発の状況が変化していく社会において、いかに大学が変容していくか、というテーマで議論が展開されていた。内容としては、劇的に衰退している経済の中でいかに州立大学が自立していくか、大学間の連携などの組織の問題などを取り上げていた。また欧州からの出展もいくつか見られた。欧州科学財団 (ESF) 主催の「考えることを考える：『知る』をどう知りうるか (Thinking About Thinking : How Do We Know What We Know?)」では、脳神経科学者や発達心理学者などにより学際的なテーマが取り上げられていた。自分自身の精神能力を評価して予測するという「メタ認知」能力が、ヒト以外の動物でも示されたという実験を紹介しながら、非専門家である一般の参加者も交えて、関連する分野の研究者と議論を行っていた。また、日本の科学技術振興機構 (JST) も「東アジアにおける環境問題の提案：政策と実践 (Reaching Out to People in East Asia on Green Issues : Policies and Practices)」というセッションを主催しており、宇宙飛行士の毛利衛氏がスピーカーとして日本で取り組んでいる環境問題に関する発表を行っていた。



【表1】 シンポジウムの国際多様性指標の記述統計

| セッション名                        | 数   | 平均    | 分散    |
|-------------------------------|-----|-------|-------|
| Education                     | 12  | 0.050 | 0.173 |
| Human Biology and Health      | 15  | 0.102 | 0.216 |
| Land and Oceans               | 12  | 0.247 | 0.335 |
| Sustainability                | 10  | 0.285 | 0.231 |
| Emerging Science & Technology | 15  | 0.293 | 0.304 |
| Science and Society           | 15  | 0.293 | 0.319 |
| Energy                        | 11  | 0.342 | 0.369 |
| The Science Endeavor          | 12  | 0.350 | 0.353 |
| Brain and Behavior            | 14  | 0.362 | 0.365 |
| Climate Change                | 11  | 0.377 | 0.359 |
| Security                      | 9   | 0.484 | 0.403 |
| Global Collaboration          | 14  | 0.493 | 0.375 |
| 合計                            | 150 | 0.301 | 0.335 |

シンポジウムのテーマごとの、国際多様性指標の平均と分散。1に近いほど、そのテーマのオーガナイザーやスピーカーの国がばらばらであることを示す。

【表2】 シンポジウムの国際多様性指標の記述統計

| オーガナイザーの所属国    |     |        | プレゼンターターの所属国   |     |        |
|----------------|-----|--------|----------------|-----|--------|
| 国名             | 数   | 割合 (%) | 国名             | 数   | 割合 (%) |
| United States  | 129 | 86.00  | United States  | 472 | 76.25  |
| United Kingdom | 7   | 4.67   | United Kingdom | 24  | 3.88   |
| Italy          | 3   | 2.00   | Canada         | 15  | 2.42   |
| Canada         | 2   | 1.33   | Germany        | 10  | 1.62   |
| Japan          | 2   | 1.33   | Italy          | 9   | 1.45   |
| Germany        | 2   | 1.33   | Sweden         | 9   | 1.45   |
| Australia      | 1   | 0.67   | France         | 8   | 1.29   |
| France         | 1   | 0.67   | Japan          | 8   | 1.29   |
| Ireland        | 1   | 0.67   | Australia      | 7   | 1.13   |
| Korea          | 1   | 0.67   | Switzerland    | 7   | 1.13   |
| Switzerland    | 1   | 0.67   | Austria        | 6   | 0.97   |
|                |     |        | Belgium        | 6   | 0.97   |
|                |     |        | Korea          | 5   | 0.81   |
|                |     |        | Netherlands    | 5   | 0.81   |
|                |     |        | China          | 4   | 0.65   |
|                |     |        | India          | 3   | 0.48   |

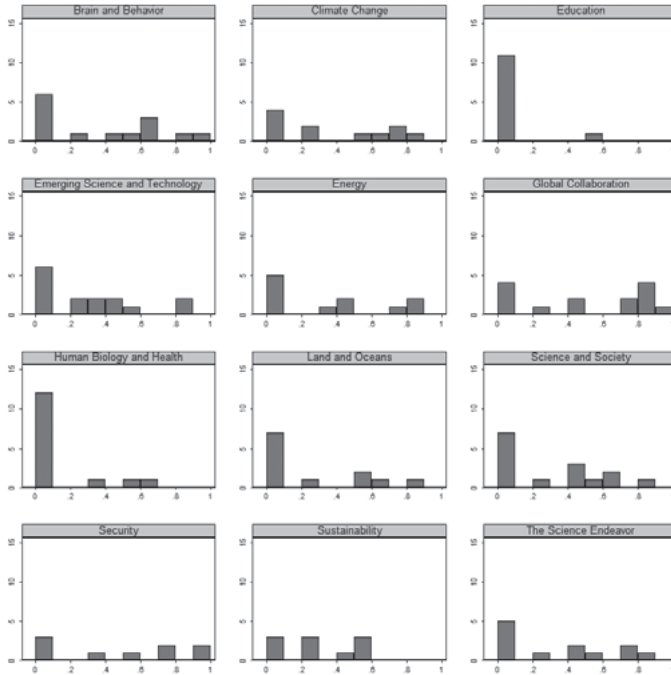
|    |     |     |                      |     |      |
|----|-----|-----|----------------------|-----|------|
|    |     |     | Norway               | 3   | 0.48 |
|    |     |     | Denmark              | 2   | 0.32 |
|    |     |     | Hungary              | 2   | 0.32 |
|    |     |     | Kenya                | 2   | 0.32 |
|    |     |     | Malaysia             | 2   | 0.32 |
|    |     |     | Spain                | 2   | 0.32 |
|    |     |     | United Arab Emirates | 2   | 0.32 |
|    |     |     | Bangladesh           | 1   | 0.16 |
|    |     |     | Finland              | 1   | 0.16 |
|    |     |     | Scotland             | 1   | 0.16 |
|    |     |     | Slovenia             | 1   | 0.16 |
|    |     |     | Taiwan               | 1   | 0.16 |
|    |     |     | Venezuela            | 1   | 0.16 |
| 合計 | 150 | 100 | 合計                   | 619 | 100  |

シンポジウムの全てのオーガナイザーと全てのプレゼンターの所属を国別にカウントした時の人数と割合を示した。

### 3.2 ワークショップ

AAAS年次総会では、科学者の様々なキャリアパスを促進するワークショップが用意されている。例えば、AAASが実施している科学技術政策フェロプログラムに関するワークショップがそれに当たる。AAASは科学技術政策フェロプログラムによって、1973年以降、2000人以上の研究者や技術者を連邦政府の15以上の政府機関と30以上の議会に送り込んできた<sup>2)</sup>。今回のワークショップでは科学技術政策フェロの申請や選考過程の説明、フェロシップ修了生の話がなされた。本ワークショップが開催された日の夜には大学院生とフェロプログラム修了生との懇親会なども用意され、AAAS年次総会内では科学技術政策フェロシップに興味のある学生や博士研究員に対しての交流の機会が用意されていた。また他のワークショップではAAASの科学技術政策フェロ以外の米国科学アカデミーミザンフェロシッププログラム、ユネスコレアル (UNESCO-L'ORÉAL) フェロシッププログラム、アレクサンダー・フォン・フンボルト財団 (Die Alexander von Humboldt-Stiftung) のフェロシップなど世界中のフェロシッププログラムについて紹介されていた。

フェロシップ以外の様々な奨学制度、海外交換プログラムを紹介するワークショップも多数用意されていた。例えば、「フルブライト・奨学制度 (Fulbright Scholar Program)」である。フルブライト奨学制度は毎年125カ国以上に対して、1200以上の奨学生を派遣している。その他にもコミュニケーションスキルを養うワークショップもあった。「インタラク



【図1】シンポジウムの国際多様性指標の分布

各テーマに含まれるセッションの国際多様性指標の分布。横軸は国際多様性指標、縦軸は頻度。ほとんど米国人で構成されているセッションの多いテーマもあれば、国際的なセッションを多く持つテーマもある。

タイプ発表：アウトリーチプランの構築（Face-to-Face with Public Audiences：Building Your Own Outreach Plan）」では数名の大学院生がそれぞれ考えたアウトリーチ活動のプランを発表し、会場とともにその内容について意見交換をするという形式であった。また、サイエンスライティングに関するワークショップもいくつか用意されていた。「サイエンスライティングを向上させるための3つのコツ（Three Ways To Improve Your Scientific Writing Today）」では講師のヴィクトリア・マクガバン（Victoria McGovern）氏がわかりやすい英語表現を参加者と一緒に音読しながら、ユーモアたっぷりの講義を行っていた。こうしたワークショップには学部生から大学院生、博士研究員まで、様々な分野の学生が参加していた。

### 3.3 展示場

AAASの展示場では各国の大学・研究機関が「情報発信」や「ネットワーキング」のために出展を行っている。例えば、日本からは科学技術振興機構（JST）主催で「Japan

Pavilion」を出展した。ここには京都大学、理化学研究所などの大学・研究機関だけでなく、JR東海や日立製作所などの日本の企業も共同で出展した。本出展の目的は、「日本政府の新成長戦略で戦略分野として掲げられた『グリーン・イノベーション』『ライフ・イノベーション』関連の研究や技術を軸に展示を行い、日本の科学技術のプレゼンスを強くアピールすること」（広報担当者）である。「Japan Pavilion」の各出展者は、パネル設置、ビデオ放映、ホームページ紹介などを行い、それぞれの理念や事業に関する情報発信を行った。「Japan Pavilion」への来場者数はAAAS年次総会中の3日間で各国の政府機関関係者、科学者などを合わせて全参加者約8000名程度の中で、1591名にも及んだ。

各国の情報発信の場だけではなく、展示会場には各国の大学・研究機関が研究者のリクルーティング活動を行える場も用意されている。実際に、筆者も研究職の斡旋の場を訪問すると、韓国の研究機関を紹介された。展示場での研究者のキャリア支援の場はAAASの部局である「AAAS Human Resources」という部局が支援している。

その他にも、展示場にはAAASの多彩な各事業部のブースが並んでいる。AAASが提供しているオンラインニュースサービス「EurekAlert」<sup>3)</sup>、米国の教育システムの再構築に焦点を当てて、モデル作りや人脈作りをはじめ、政策提案を行っている「AAAS Education and Human Resources」などである。また、1986年に始まり、全ての米国人の科学リテラシーを向上させるためにAAASが構想した「AAAS Project 2061」も紹介されていた。展示団体は多様であり、米国だけでなく、世界各国の組織が出展をしていた。例えば、欧州の研究活動の連携や調整を通して、ヨーロッパの科学技術を推進することをミッションとしている欧州委員会（European Commission）が挙げられる。同組織は展示場への出展とともに、実際にワークショップにおいても欧州での資金提供に関するセッションも行い、情報発信をしていた。

### 3.4 その他のプログラム

上記のように紹介した以外にも様々な参加者層に対応したプログラムが組まれている。例えば、筆者が参加した「科学イベントの国際会議（International Public Science Events Conference）」は科学イベントの在り方について議論を行う会議であり、世界各国の科学関連機関の広報担当が活動内容を紹介し合っていた。科学広報の予算の縮小の問題や一般市民への普及の難しさなど、各国で共通に抱える問題なども多く、関係者がフロアも含めて活発に議論していた。このように各国の機関が一堂に会して議論するような場は通常の学協会ではあまり見られないだろう。

また、科学者や政府機関の従事者以外の一般参加者が楽しめるようなプログラムも用意されている。AAAS年次総会の17日から21日までのうち、19日、20日は「ファミリーサイエンスデー (Family Science day)」のイベントが開催されていた。2011年の年次総会の一般参

加の場合の費用は400 \$であったが、この土日では多くの一般向けのセッションが無料で開放され、エンターテインメント性のある企画が多く組まれている。例えば、有名なサイエンスコメディアンのニール・デグラースタイソン (Neil deGrasse Tyson) 氏のセッションでは50人規模の会場があふれるほどの人数が集まっていて、SF作品の批評や風刺的なイラストを用いて、科学に関係する笑い話を披露していた。また展示場においても各国の研究機関や企業が、数多くの一般参加者を対象に体験型の展示を実施していた。こうしたイベントでは子供からお年寄りまで幅広い世代が参加していた。学協会の学会ではこれほどまでに、幅広い層の人たちが一堂に集まるということはまずないだろう。

## 4. 社会に参画する科学者コミュニティ - AAAS -

これまで見てきたように、AAAS年次総会ではAAASの事業に関わる多彩なセッションがみられた。その多彩な事業内容は、「科学者、技術者、市民のコミュニケーションの促進 (Enhance communication among scientists, engineers, and the public)」、「科学とその利用の整合性の促進と保護 (Promote and defend the integrity of science and its use)」、「科学技術関連企業への協力の強化 (Strengthen support for the science and technology enterprise)」、「科学に関わる社会問題に関する提言 (Provide a voice for science on societal issues)」、「公共政策における科学の責任ある利用の推進 (Promote the responsible use of science in public policy)」、「科学技術人材の強化と多様化 (Strengthen and diversify the science and technology workforce)」、「すべての人の科学技術教育の育成 (Foster education in science and technology for everyone)」、「一般市民の科学技術への参画促進 (Increase public engagement with science and technology)」、「科学の国際的な連携の促進 (Advance international cooperation in science)」に関することであり<sup>4)</sup>、科学に関わるほぼ全ての事項に関して取り組んでいるとあってよいだろう。本章ではこれらの事業を3つに分けて、説明を行う。

まず1つ目は「メディア (出版・情報発信)」に関する事業である。その代表例として挙げられるのが、AAASが発行している「Science」誌である。「Science」誌は世界で最も権威がある学術雑誌の1つであり、週刊で約13万部印刷されている。掲載される分野は科学全般に渡っており、全世界から論文の投稿を受け付けているが、掲載基準は厳しく、投稿論文の10%以下しか掲載されない。世界中の科学者が「Science」誌への掲載を望むことから、発行元であるAAASの価値や権威を創る役割も担っている。また、「Science」誌だけでなく、他にも多数の出版物を発行するとともに、情報発信も行っている。例えば、その1つは、1996年から開始した「EurekaAlert」というオンライン・ニュースサイトであり、プ

レリリースも含め、大学、医療機関、政府機関、企業やさまざまな研究機関のニュースをメディアに配信するだけでなく、一般向けにも無料で情報を公開している。

2つ目は、科学技術政策に関する事業である。AAASでは毎年、「AAAS報告書：研究開発 (AAAS Report : Research and Development)」(AAAS 2011) という予算分析の報告書を作成し、米国の研究開発予算の分析を行っている。特筆すべきは、この報告書の作成には、多様な分野の学協会が関わっており、自然科学系の科学者だけでなく、社会科学系の科学者の協力を得て、AAASが作り上げていることである。こうした分析結果は議会の科学技術研究費の予算請求でも活発に利用される。またその他にも、例えばAAASが毎年主催する科学技術政策年次フォーラムも議論の場として、活用されている。2010年は大統領科学補佐官のジョン・ホルドレン (John Holdren) 氏なども招き、2011年度予算請求や政策提案をしている (長野 [2010 : 22-28])。政策においても一つ欠かせないAAASの事業は科学技術政策フェローを実施していることだ。前述したように、1973年以降、2000人以上の研究者や技術者を連邦政府や議会に送り込んできた。このフェロープログラムの創設によって、議会と科学者との間のコミュニケーションが促進されたといえるであろう。議会には科学技術の素養をもったスタッフが増加する一方で、彼らはそこで得たノウハウを大学や企業、研究所に持ち帰り、同僚たちの声をワシントンに届けるための手助けをするようになったからであり、またこうした専門家たちと一緒に仕事をした経験をもった議会のスタッフや議員も増加し、科学的・技術的な判断を公共政策的な課題を考える際に利用するようになったとされている (綾部 [2007 : 56-62]、Telson and Albert [1988])。

3つ目は科学教育に関する事業である。代表的な科学教育の取り組みが「Project 2061」<sup>5)</sup>である。米国では1980年代、当時の科学教育の危機に対処すべく、科学教育改革についての多くの提言がなされるようになり、その中で、すべての米国人のための科学リテラシーの育成の必要性が叫ばれるようになった。米国科学振興協会は、このような流れの中で、1985年に科学教育改革プロジェクト「Project 2061」を始めた。「Project 2061」という名称は、プロジェクトが始まった1985年に地球に接近し、2061年に再び地球に接近するハレー彗星に由来している。米国の全国民の科学リテラシーの問題を1つの科学者コミュニティが77年間に渡って、実施するという事実に米国の社会構造の特殊性が感じられる。この壮大なプロジェクトは目的別に3段階の行動計画で構成されている。第1段階では、科学リテラシーで重視すべき知識、技能、態度を詳細にまとめ、第2段階では教育者や科学者のチームが学区や州において、第1段階でまとめた科学リテラシーに関する教育項目をいくつかの新しいカリキュラム・モデルに転換する。そして、第3段階では教育改革に積極的な多くのグループが、第1段階と第2段階の成果を活用し、米国全体の科学リテラシーの向上を図るために10年以上に及ぶ広範な相互協力活動を科学教育に関係した学協会、教育組織、団体などとともに展開していく (AAAS [1999])。このように長期に渡り、かつ様々な協力、連携が必

要不可欠なプロジェクトをAAASが担っていることが驚くべきことである。

ここまでで、現在のAAASの事業を3つに分けて説明したが、AAASの社会的な役割として、AAASが社会にある問題を議論する場を作り上げてきたということを加筆しておく。AAASが取り上げた会議や討論会がその問題を考えるコミュニティ形成につながり、ボトムアップ的な提案につながった例は数多くある。例えば1970年代に、AAASは「科学におけるチャンス委員会 (Committee on Opportunities in Science)」を設置し、女性や黒人、障害者など、科学者コミュニティにおけるマイノリティの活躍を支援し促進するための取り組みを始めた。こうした取り組みが例えば、ゲイ・レズビアン全米機構 (NOGLSTP)<sup>6)</sup> などの新しいコミュニティを生んでいった。本大会でも障害を持つ科学者などのマイノリティのためのシンポジウムが組まれていたが、これは、AAASのこれまでの取り組みによるものである。AAASは長年にわたって、科学が関わる問題を取り上げ、議論の場を持ち続けてきたのである。

## 5. AAAS から学ぶ

### 5.1 米国における科学者コミュニティの影響力

米国の科学技術推進体制において、科学者コミュニティは大きな影響力を持っている。その影響力の大きさは、全米科学財団 (NSF) や国立衛生研究所 (NIH) の国家予算の配分において科学者コミュニティが強い権限を持っていることからわかる。NSFは米国の科学技術予算の20%である68.7億ドル (2010年度) (NSF [2010]) を保持しており、NSFの施策や方針の決定は大統領から任命された24名の科学者からなる委員会 (NSB; National Science Board) が担っている。また、NIHは医学研究予算として約310億ドル (2010年度) (NIH [2010]) もの予算を持つ。この予算は科学者であるNIH所長が大統領と協議した上で決まり、予算配分の権限はNIHの各研究所のスタッフが持つようになっている。科学者コミュニティの持つ影響力の大きさは、大統領科学補佐官制度にも反映されている。日本の総合科学技術会議の場合は首相に助言をする主体が複数人おり、総理大臣を議長とする合議体として、間接的に科学技術予算が決められるが<sup>7)</sup>、米国の場合は大統領科学補佐官個人が科学技術政策に関する予算案作成に直接的に関わっている。

しかしながら、科学者コミュニティの影響力は政府機関のシステムの中でのみ反映されているだけでない。AAASのような非政府機関も科学技術推進体制に対して大きな影響力を持っている。AAASが影響力を発揮しているのは、AAASが単なるロビー活動を行っているのではなく、米国の科学技術推進に貢献する機能を揃えているからだ。その機能とは例えば、政策提言、政策分析、出版・メディア、教育事業、科学技術人材の政府機関への派遣

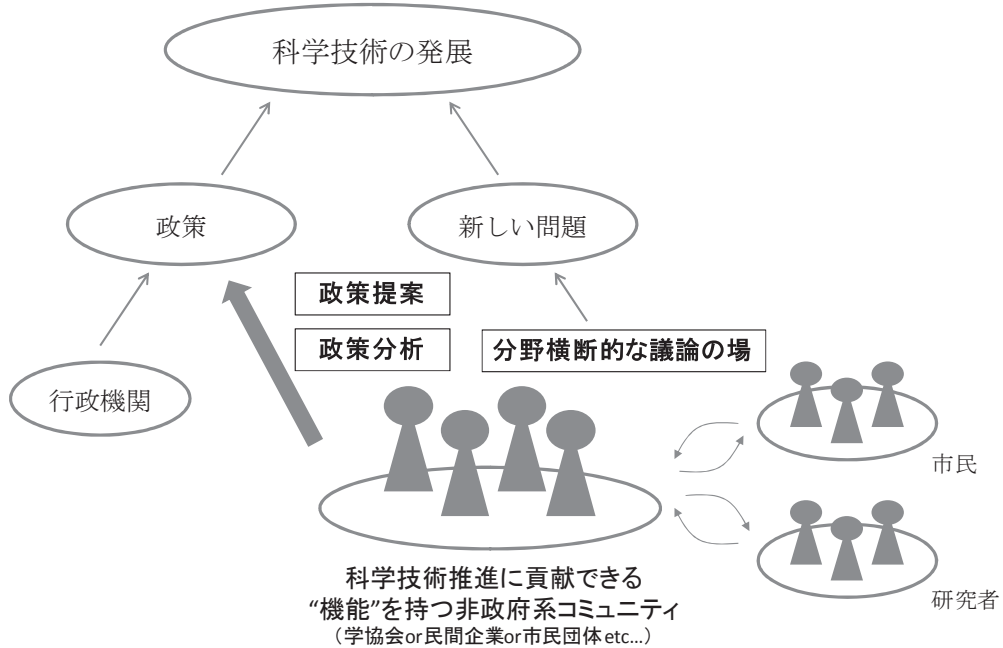
であり、科学関連の様々な場面において有用に働いている。また、AAASはそうした機能を提供するだけではない。常に分野横断的な問題を議論できる場を形成することで、現代社会が直面している課題を捉えてきた。そうした分野横断的な議論の場から、「Project 2061」のようなプロジェクトや「科学におけるチャンス委員会」などのコミュニティが生まれてきたことはこれまで記述してきた通りである。米国社会において有用な機能を持つことで、年次総会のような求心力を持つ分野横断的な議論の場をつくり、そこから新しい問題提案や新しいコミュニティを作っていくことで、科学技術を推進させていく組織、それがAAASである。

## 5.2 日本の科学技術体制への提案

本稿では最後に日本の科学技術を推進していく理想的な体制として、図2のようなモデルを提案する。このモデルにおいて強調したいことは、有用な“機能”を持つ非政府系コミュニティの存在の重要性である。これまで見てきたようにAAASは歴史的な経緯から、科学者コミュニティが科学技術の発展に貢献してきた。しかし、日本にAAASのような“機能”を導入する際には科学者コミュニティである必然性はないだろう。図2のモデルにおける科学技術に貢献する非政府系コミュニティは、学協会のような科学者コミュニティに限らず、民間企業、市民団体でもよいと考えている。何よりも重要なことは、その非政府系のコミュニティが科学技術に貢献できる“機能”を有すことである。以下では非政府系コミュニティが持つべき有用な“機能”3点について、事例を出しながら説明を行う。

1つ目は“政策立案”という機能である。現状では、行政機関や国会議員が主導して行う審議会によってほとんどの政策立案がなされ、民間の意見はヒアリングやパブリックコメントを通じて、政策に反映されている。こうした仕組みが有用に働いている面もあるが、非政府系コミュニティはさらに主体的かつ積極的に提案を行うべきである。非政府系コミュニティによる政策立案が可能となり、それらによる提案が活発に行われるような仕組みを作る必要があるだろう。米国では、政策マーケットが大きく、政策立案を専門とする多くのコンサルタントが、行政機関や国会議員との関係を作りながら、様々な政策の実施に関わっている。この政策マーケットの大きさが米国の政策の多様性を作り、政策の専門性を高めている。日本においては、民間からの提案が政策として反映された数少ない例として「事業仕分け」が挙げられる。「事業仕分け」は民間のシンクタンクである「構想日本」<sup>8)</sup>が2002年から、地方自治体を対象として、各事業の重要性を判定し予算の無駄を明らかにするために実施したものである。2009年には行政刷新会議が国家予算に対して、「事業仕分け」を行い、日本国民の大きな関心を集めた。民間からの政策マーケットへの参入が少ない現状では、より積極的に政策立案に多様な人を巻き込むことで、より洗練された政策を政府が選択できるようになるのではないかと考えている。





【図2】日本の科学技術推進のための理想的な体制

本稿で提案する科学技術推進のための理想的な体制。図のような非政府系コミュニティが「政策提言」、「政策分析」「分野横断的な議論の場」のいずれかの機能を持つことになれば、日本の科学技術に貢献できると考えている。

2つ目は“政策分析”という機能である。この機能が働いた最近の事例として、「男女共同参画学協会連絡会」<sup>9)</sup>の取り組みが挙げられる。この会は、政策分析や政策提言を行う横断的な科学者コミュニティとして、理工学協会が中心になり2002年に発足した。第3期科学技術基本計画の制定の際には、学協会間で連携協力を行いながら、大規模アンケートのデータに基づいた提言を実施している。こうした動きが反映され、第3期科学技術基本計画では男女共同参画に関する項目が大幅に増え、実際に学内保育所の設置や研究支援員の派遣などの実施により両立支援のための予算編成や、全国に女性研究者採用促進（ポジティブアクション）のための予算が編成されるようになった。この事例からわかるように、客観的な視点に立って政策動向に注目し、分析することが、新しい提案や制度改革につながる可能性は大いにあるといえるだろう。

3つ目は“分野横断的な議論の場の提供”という機能である。AAASのように、社会の中の科学に関する諸問題を捉えて議論をし、なおかつそこからコミュニティ形成ができる分野横断的な場をすぐに作るのは難しい。しかし、日本でも新しいコミュニティ形成や新しい提案や提言を生むような場の構築は求められており、実際にも取り組まれている。独立行政法

人科学技術振興機構が2006年から毎年主催している「サイエンスアゴラ」<sup>10)</sup>は、AAASの年次総会やヨーロッパで開催されるESOF<sup>11)</sup>をモデルにしている。目的は科学と社会とのあり方に関して自由に議論を喚起する場をつくることである。そのために、シンポジウム、講演会、トークショー、サイエンスカフェ、ワークショップ、ブース展示、ポスター展示など、100を超える多様なセッションを実施している。サイエンスアゴラ2010の出展者の所属先は、任意団体（NPO含む）、企業、大学・研究機関など合計146団体にも及んだ（科学技術振興機構 [2011]）。サイエンスアゴラ2006では科学者が少なく、学際領域を扱うセッションも少なかった（長神 [2007: 77-87]）が、サイエンスアゴラ2010では、「政治・行政との対話」という目玉企画を設定するなど、少しずつ科学と社会の問題を議論する分野横断的な場の形成を進めている。このような場から生まれてくるコミュニティやその提案は、科学技術の推進に対して有用に働くだらう。

以上、紹介したいいずれかの“機能”を有する非政府系コミュニティが形成されることで日本の科学技術が推進されると考えている。AAASを始めとする科学者コミュニティは160年以上に渡って、連動しあい、強力な科学技術推進体制を構築してきた。歴史的な経緯の差異があるために、米国の仕組みをそのまま導入することは難しいが、米国社会の中でAAASが展開してきた様々な事業やその歴史から学ぶことが必要であろう。本稿が提案したモデルはその一例であるが、我が国には科学技術をさらに推進していくための新しい「日本モデル」の模索が求められている。

## 謝辞

今回の調査のためのご支援を頂いた榎木英介氏（サイエンス・サポート・アソシエーション代表）、中村征樹氏（大阪大学全学教育推進機構）、大隈貞嗣氏（三重大学）、小暮昌史氏（株式会社チェンジ）に心より感謝申し上げます。牧慎一郎氏（文部科学省科学技術政策研究所企画課長、2011年2月時点）には諸外国の科学技術体制に関して、御教授頂きました。現地での調査方法においては、難波美帆氏（早稲田大学）にご助言を頂きました。

本稿、執筆にあたって、中村征樹氏には貴重なご意見を頂きました。ここに感謝申し上げます。

## 注

- |                              |   |
|------------------------------|---|
| 1 AAASのホームページ                | <a href="http://www.aaas.org/">http://www.aaas.org/</a>                     |
| 2 AAASのFellowshipに関するホームページ  | <a href="http://fellowships.aaas.org/">http://fellowships.aaas.org/</a>     |
| 3 AAASのEurekAlert!のホームページ    | <a href="http://www.eurekaalert.org/">http://www.eurekaalert.org/</a>       |
| 4 AAASに関するホームページ             | <a href="http://www.aaas.org/aboutaaas/">http://www.aaas.org/aboutaaas/</a> |
| 5 AAASの「Project 2061」のホームページ | <a href="http://www.project2061.org/">http://www.project2061.org/</a>       |

- 6 ゲイ・レズビアン全米機構 (NOGLSTP) <http://www.noglstp.org/>
- 7 科学者コミュニティを代表する日本学術会議の会長は、総合科学技術会議の議員の一人であり、総合科学技術会議では経済界の代表や関係する省庁の担当大臣などとの合議により、科学技術政策の方針が決められる。総合科学技術会議では他の科学者も「有識者議員」として参加しているが科学技術政策の予算決定に関して、研究者の関与が間接的である。
- 8 構想日本に関するホームページ <http://www.kosonippon.org/>
- 9 男女共同参画学協会連絡会 <http://annex.jsap.or.jp/renrakukai/>
- 10 サイエンスアゴラのホームページ <http://www.scienceagora.org/>
- 11 ESOFのホームページ <http://www.esof.eu/>

## ●文献

AAAS (2011) *AAAS Report XXXV: Research and Development FY 2011*, AAAS.

AAAS (1990) *SCIENCE FOR ALL AMERICANS*, Oxford University Press.

天野拓 (2006) 『現代アメリカの医療政策と専門家集団』慶應義塾大学出版会。

綾部広則 (2007) 「アメリカ科学振興協会ともう一つの科学コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』2: 56-62。

上山隆大 (2010) 『アカデミック・キャピタリズムを超えて アメリカの大学と科学研究の現在』エヌティティ出版。

男女共同参画学協会連絡会 (2005) 『第3期科学技術基本計画に関する要望－男女共同参画社会実現のために－』男女共同参画学協会連絡会。

榎木英介 (2007) 「なぜ我々はAAASに注目するのか」『科学技術コミュニケーション』2: 49-55。

広井良典、印南一路 (1996) 『アメリカにおける医学・生命科学研究開発政策と日本の課題 報告書－「高齢化日本」の新たな科学技術政策』財団法人医療経済研究機構。

井村裕夫 (2005) 『21世紀を支える科学と教育』日本経済新聞社。

文部科学省科学技術政策研究所 (2001) 『調査資料78 技術とNPOの関係についての調査』文部科学省科学技術政策研究所。

文部科学省科学技術政策研究所 (2009) 『科学技術を巡る主要国等の政策動向分析』文部科学省科学技術政策研究所。

長神風二 (2007) 「ヨーロッパにおける科学のネットワーク：ESOF2006参加報告」『科学技術コミュニケーション』2: 77-87。

長野裕子 (2010) 『AAAS科学技術政策年次フォーラム (2010) 報告』科学技術動向2010 6: 22-28。

中村征樹 (2007) 「社会に関与する科学者コミュニティ：AAAS年次大会参加報告」『科学

技術コミュニケーション』2:70-76。

難波美帆(2007)「日本に、科学者が社会に対して公的責任を果たすことを目的としたコミュニティを作るために：AAASから学ぶ」『科学技術コミュニケーション』2:63-69。

NIH (2011) *President's Proposed 2012 NIH Budget*, National Institutes of Health.

NSF (2010) *FY 2011 BUDGET REQUEST TO CONGRESS*, National Science Foundation.

独立行政法人科学技術振興機構 (2011) 『サイエンスアゴラ2010 開催報告書』独立行政法人科学技術振興機構。

Richard H. Shyrock (1947) *American Medical Research*, New York : Commonwealth Fund.



## 2011年度ワークショップ入門講座

森栗茂一（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）

平川秀幸（大阪大学CSCD）

西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部）

### A report on community workshop seminar

Shigekazu Morikuri (Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Hideyuki Hirakawa (CSCD, Osaka University)

Yumi Nishimura (Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University)

学生向けワークショップ入門講座は、秋の連休を利用して中之島センターで行った。神戸まちづくりワークショップ研究会のゲストとしての支援を得て、理論、聞き方（ちゃんと聞く）、ファシリテーショングラフィックス、神戸でのまちづくりワークショップ経緯、中之島阪大跡地における模擬公園ワークショップ、KJ法・旗揚げゲーム・ワールドカフェなどの解説と体験、およびそのふりかえりを行った。

かなり密度が濃く、3日の集中講義には無理があったが、学生は集中していた。とはいえ、これだけでワークショップが解かったわけではなく、さらなるスキルアップが必要なことを学生は理解した。また、まちづくり系のワークショップであるため、まちづくりに特化した部分が多く、課題が残った。さらには、社会人受講を想定し中之島センターで行ったが、広報不足で少数の社会人聴講に終わってしまった。

ワークショップは、専門職の大学院生には必要な知識・技能であり好評であった。関心も高い。今後は、より深く、多様なワークショップ科目を、大学院生、社会人に提供することが課題となろう。

#### キーワード

ワークショップ、まちづくり、ファシリテーション

workshop, community, facilitation

CSCDワークショップ研究会は、神戸WS研究会と事前協議を重ね、以下のような流れで、講座を組み立てた。受講者は、4月には30人が履修登録しており、当初目的の社会人公募を控えた。結果的には、学生の受講が減り、社会人向けの受講がそれほど増えず、16名受講となった。

今後は、履修学生の事前フォロー・絞込みと、社会人向け広報を積極的に行う必要があると考える。3日間の概要は、以下のとおりである。

## 1. ワークショップ入門講座の流れ

CSCDワークショップ研究会は、神戸WS研究会と事前協議を重ね、以下のような流れで、

講座を組み立てた。受講者は、4月には30人が履修登録しており、当初目的の社会人公募を控えた。結果的には、学生の受講が減り、社会人向けの受講がそれほど増えず、16名受講となった。

今後は、履修学生の事前フォロー・絞込みと、社会人向け広報を積極的に行う必要があると考える。3日間の概要は、以下のとおりである。

表1 日程とプログラム

|                 |   |
|-----------------|---|
| 9月17日（土） 10-18時 | ワークショップ（以下、WSと略す場合もある）概論<br>シートによる自己紹介法（チームビルディング）<br>ちゃんと聞く<br>ファシリテーショングラフィックス実践<br>ふりかえり |
| 9月18日（日） 10-18時 | 神戸とまちづくりWSの歴史、上沢二丁目公園WS<br>中之島空地の現況地図と現場点検、面積計算<br>模擬「中之島公園WS」<br>ふりかえり                     |
| 9月19日（月） 10-18時 | ワールドカフェ実践<br>まちづくりにおけるWS<br>旗揚げゲーム実践<br>KJ法解説と実践<br>シートによるふりかえり                             |

## 2. ワークショップ概論

西修の「ワークショップ概論」（テキスト）によれば、ワークショップとは、

- ・グループワークをベースにした、
- ・参加・体験・創造型の手法で、
- ・学習、交流、課題解決や合意形成などを行う「場」、

と定義され、

- ・参加 = 受身ではなく主体的に関わる
- ・体験 = 「頭」だけでなく「体」や「心」も
- ・グループ = 相互作用

の3キーワードにより成り立っているという。

ワークショップには多様なものがあり、西は中野民雄『ワークショップ』を参考に、図1のように整理している。

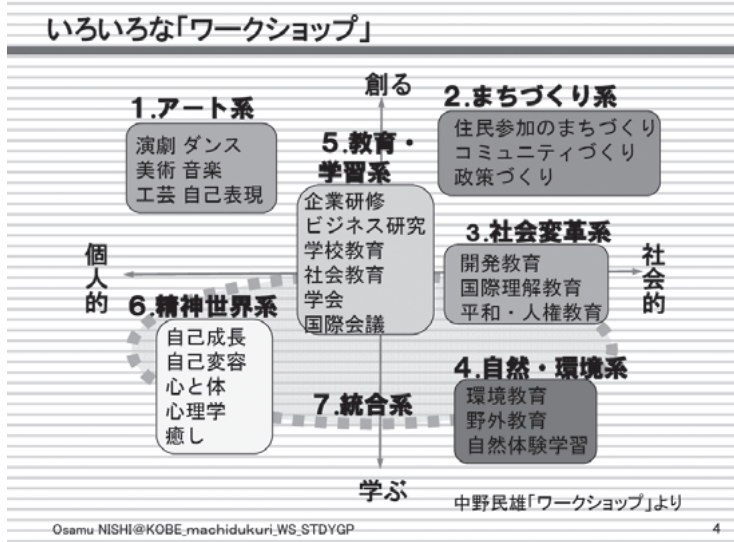


図1 多様なワークショップの種類

「神戸まちづくりワークショップ研究会2003」の分類によれば、ワークショップは交流・合意形成のツールであり、

- ・ものづくり（デザイン）系
- ・課題解決・計画づくり系
- ・交流系
- ・発見系
- ・研修・啓発系

に分類される。石塚雅明『参加の「場」をデザインする』は、まちづくりワークショップを「さまざまな立場、意見の人が参加し、何らかの共同作業を通じて、まちづくりの課題や方向性について、公平かつ創造的な議論をおこなう場」と定義している。

ワークショップの特徴として、中野を引用して西は以下を指摘した。

- ・ワークショップに、初めから決まった答えなどない
- ・ワークショップに先生はいない
- ・ワークショップでは「お客さん」でいることはできない
- ・ワークショップでは頭が動き、心も身体も動く
- ・その結果、ワークショップでは交流と笑いがある
- ・ワークショップは、Win-win solution である



# 3.

## ちゃんと聞く…シートによる自己紹介法とグループづくり法（チームビルディング）



写真1 自己紹介

|          |           |
|----------|-----------|
| 名前       | 学部・専攻     |
| 呼んで欲しい名前 | 今日、期待すること |

図2 東末提案自己紹介シート

17日午後からは、東末の指導により、自己紹介を使った「ちゃんと（正確に、真っ当に）聞く」演習が始まった。まず、A3白紙を四つ折にして、図2のように自己紹介を書いて、全体で誕生日順ループで発言した。個々の発言の後には、拍手をした。一通り終わったところで、「お国自慢」「家族のあれこれ」を、大型ポストイットにサインペンで書いて、個別パートナーを探して語る。



写真2 お国自慢を話し合ってみましょう



写真3 聞いた感想をカードに書いて渡す

この過程で、東末の注意が入る。東末プレゼン「ちゃんと聞く（聴く）を体験しましょう」によれば、ファシリテーターの役割として、

- ・きく 安心して発言できる場づくり 聞くではなく、聴く
- ・みる 参加者一人ひとりの様子や関係性 変化は見逃さない
- ・ひきだす 質問で可能性を広げる、絞り込んで深める
- ・せいりする 発言をつなぐ、かみ合わせてまとめる

が指摘されている。

その手法として以下3点を東末は指摘した。

その1)「相手がお話しがしやすい」「私が話を聞きやすい」環境づくり

- ・相手との距離 = 最低声が届きあわないと理解できない。
- ・相手と向き合う角度、目線 = そんなにじっと見られても…。
- ・浮気はしないで！ = あなたにがんばって話そうと思っているのに、目線が違うところに！

「どうすれば相手がお話ししやすいか」は、人によってずいぶん違う。決め付けず、相手と確かめ合ってつくるしかありません。

その2) お話しをうまくつないでいくポイント

- ・単純なレスポンスを送る = 「フンフン」「はいはい」「うん」といったうなずき
- ・理解メッセージを送る = 「あなたは○○（の様な気持ち）なのね。」「なるほど、○○だったですね。」

その3) お話しを明確にするヒント

- ・オープンリード・オープンクエスチョン = YES/NOで答えられないような質問・話が深まったり、広がったりする質問・具体的な状況や今の気持ちを確かめるような質問でも、自分の興味本位で話を振り回さないよう注意。
- ・言葉にはなっていないが、じんわり伝わってきている相手の気持ちを伝えてみる  
相手の話に深く共鳴を覚えたときにはその気持ちを支持する。

最後に、参考として、カウンセラーが大切にしている態度を東末は紹介している。

- ・肯定的な態度で臨む。(無条件の肯定的配慮)
- ・正しく聞く。
- ・不足・不明確なところを明確にする質問をする。(明確化)
- ・肯定的に受け止める。(受容)
- ・きちんと聞いている、理解しているという態度を示す。

(メモを取る、うなずく、理解メッセージを送る)

現場ではその人のお話を本当に聞きたいかどうか(自己一致・純粋性)が問われている。

一方、都市計画を専門とする西は、「ちゃんと聞く」をまちづくりの現場におき、まちづくりワークショップの役割を、

- ・ちゃんと聞いて
- ・ちゃんと話して
- ・相互理解を深める

「場」をつくることだとしている。

では、通常のまちづくりの現場では、なぜ議論が難しいのか？西は以下のように指摘している。

- ・話す人が決まっている＝一部の人しか発言しない／できない
- ・何のための話し合いかわからない
- ・深まらない
- ・かみ合わない
- ・個人的な感情でものごとを決める人がいる
- ・結論があいまい＝人によって結論がいろいろ

まちづくりの現場では、「ちゃんと（正確に、真つ当に）聞く」ことができていないから、ちゃんとした相互理解ができず、誤解のまま計画が頓挫したり、無理解のまま計画がすすんだりするのだ。

## 4. ファシリテーショングラフィックス

そこで、次に、中立的な立場から議論を促進するファシリテーションの演習が、東末らによって行われた。西は、ファシリテート *facilitate* を、「促進する、容易にする、円滑にする、助長する、スムーズに運ばせる」と定義し、*facilitation* を「集団による知的相互作用を促進する働き」と定義している。〈FAJ（日本ファシリテーション協会）による〉

ファシリテートをすすめるファシリテーターは、会議やワークショップの進行役であり、常に中立な立場で

- ・プロセスを管理し、
- ・参加者のチームワークを引き出して、
- ・チームの成果が最大となるよう支援する者

と定義している。ファシリテーターは、場をつくり・引き出し・深め・まとめる専門家といえる。

西は、ファシリテーショングラフィックス＝「要約」とは、キーワードを探す作業だという。しかし、要約する言葉を探しだす作業は、実際には「捨てる」作業であり、捨てている

ことを自覚して要約せねばならない。要約の結果は、写真4のように、フォーマットにまとめあげていく。

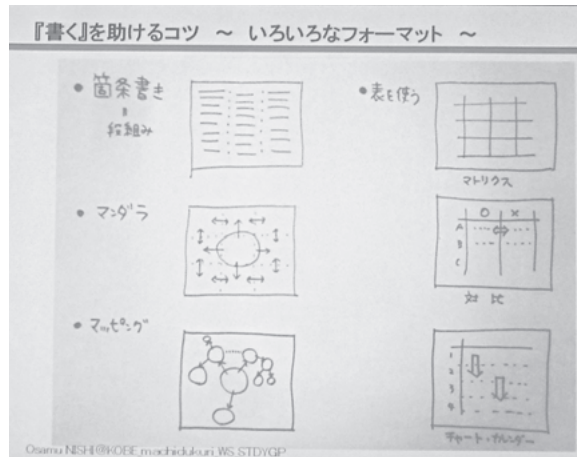


写真4 「書く」を助けるいろいろなフォーマット

まちづくりの作業にこのファシリテーショングラフィックスを適用すれば、

- ・小さく「分けて育て」大きく「開いて収穫する」ことができ、  
⇒少人数のグループが基本＝「話しやすい」「聴きやすい」単位  
⇒全体で共有しコンセンサスをつくる
- ・見える化することができ、  
⇒議論の「空中戦」から「地上戦」へ
- ・ギャップを埋めることができる  
⇒プログラム・ツールの活用

ということになる。

## 5. 神戸とまちづくりWS、上沢二丁目公園WS

18日は、辻により、日本におけるまちづくりWSの流れ、神戸におけるまちづくりWS、なかでも平成6年の上沢二丁目公園WSの具体が動画で紹介された。

こうしたなか、神戸におけるまちづくりWSの展開のなか、阪神・淡路大震災を契機に急速にWSが普及し、その事例を研究し、まとめることを目的に、行政職員やまちづくりコンサルタント、ボランティアコーディネーターなどにより、神戸WS研究会が平成14年4月

に設立された。毎月の定例会、「神戸マンション管理組合交流会」「野良猫の問題を考えるWS」「王子動物園活性化WS」など、WSの企画運営も手がけている。平成16年には、事例集「WSの本」を発行している。

なぜまちづくりWSなのかと言えば、「参加型（Web型）社会の到来であり、1人1人が主体的にかかわり相互に連絡する組織に会社もNPOも変わろうとしている、水平な関係の中での合意形成が求められるからだ。だから、「内容」の平面的合意だけではなく、全員が発言し、採用されなかった意見も皆に共有され、「共感」と「納得」を生むWSが必要とされたからだ」と説明された。

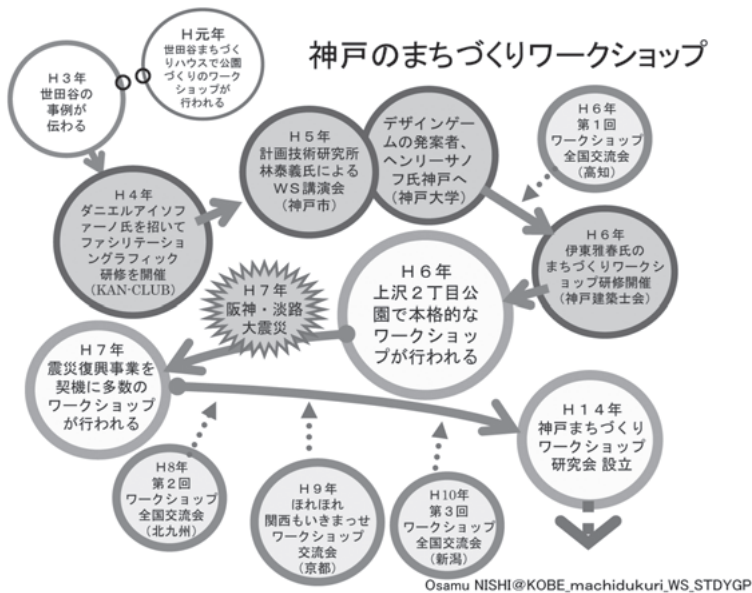


図3 神戸のまちづくりワークショップの流れ

WSによる参加のデザインは、事前準備が80%である。それは、

- ・事前のプロセスデザイン
- ・参加形態（自由参加か関係者のみか、おもわぬ人の参加効果）
- ・プログラム（手順の作りこみ、必要品のチェック、役割分担）

によって成り立っている。残り20%は、当日の臨機応変の動きが重要である。

WSのアウトプットは、旗揚げゲームなどにより、「残念意見」も含めた多様な意見に気づき、「叩き台づくりゲーム」などで、具体的に考えることが重要となる。

# 6. 中之島医学部跡地模擬公園 WS

18日午後は、中之島センター周辺の空地を実地検分し、辻の用意した実測地図を広げて意見を出し合い、ポストイットに書き上げてまとめ、具体的な公園計画の叩き台を書きあげる公園ワークショップ（模擬）を実施した。

その成果を、写真5～8に示す。



写真5 中之島公園ワークショップ叩き台1

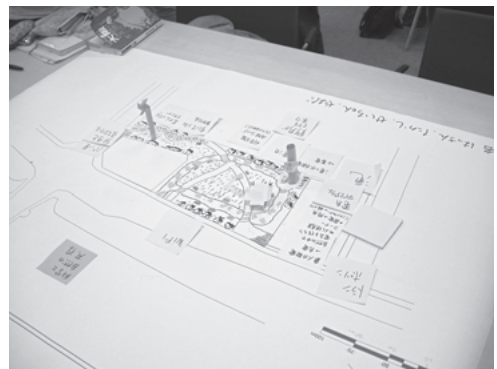


写真6 中之島公園ワークショップ叩き台2

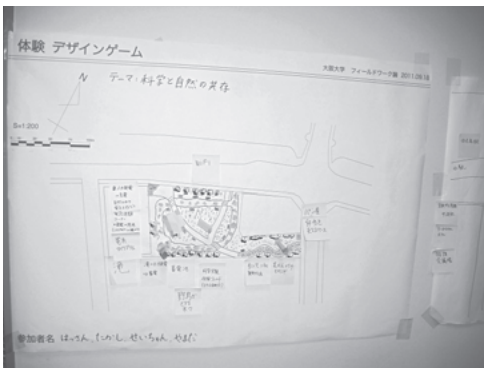


写真7 中之島公園ワークショップ叩き台3



写真8 中之島公園ワークショップ叩き台4

## 7. 多様な手法の体験

19日は、KJ法、旗揚げゲーム、ワールドカフェの解説と体験を、松原永季がすすめた。

### 7.1 KJ法

野外調査のデータをカード化してグループ化するKJ法は、本来はデータからの発想法であるが、

- ・誰でもが発言できる
- ・話しが苦手な人の意思表示ができる
- ・出した意見が文字として残る
- ・意見の関係性が視覚化できる
- ・集約的な作業ができる

という特色から、多様な参加者によるグループワークで援用されることが多い。

### 7.2 旗揚げゲーム

旗揚げゲームは、

- ・多数の参加者の意見を同時に確認できる
- ・非常に多くの参加者に対応できる
- ・少数意見を全体場で確認できる

という点で、よく使われる手法である。

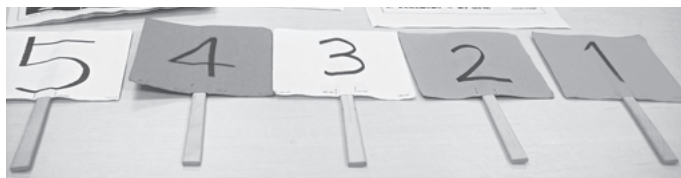


写真9 旗揚げゲームの道具

### 7.3 ワールドカフェ

多くの新しいアイデアや、社会的なイノベーションは、カフェやサロン、教会、リビングルームなどでのインフォーマルな会話を通じて生まれ広がっていった。堅い会議の場よりも、喫茶店でお茶でも飲みながらくつろいで気楽におしゃべりする時の方が、本音も出やす

いし、良いアイデアも出る。そこで、ワールドカフェという手法が出てきた。

ワールドカフェは、

(1) はじめの宿（テーブル）での話し合い

↓ ホスト（宿主）を残して移動

(2) 新しい宿（テーブル）で話し合い（ホストのこれまでの話の説明）

↓ ふたたび移動

(3) もとの宿（テーブル）で話し合い（みやげ話）

↓

(4) 全体での話し合い

という流れになる。

ワールドカフェのエチケットとして、

- ・一つ一つの発言を大切に扱う
- ・ともに耳をすかせてよく聴く
- ・自分の考えや経験をその場で役立てる
- ・場にあられるもの、「えっ！」を大切にする
- ・アイデアをつないでいく
- ・落書き（いたずら書き）をどんどんする

を指摘し、ワールドカフェの実践体験をした。

## 8. ふりかえり

各日、最後に「ふりかえり」を17日18日は記名でポストイットに書き、19日は既定シートに書いて定着化を図っている。

その成果を以下の表2、3、4、にまとめる。（「▼」は疑問など。「・」で個人ごとに整理した）

参加者のふりかえりを総括すると、多様な発言と、発言できた喜び、まとめる喜びが体感できてきたことがわかる。ファシリテーションの理解もすすんでいる。ただ、実践、体験の時間が少なく、日程的にも内容的にもハードな入門講座であったことがわかる。WSについては、収束させよう、一定の成果に結び付けようとする学生にとっては、若干、とまどいが出たまま終わったような感もあったようである。

概して、WSを「技術」と理解したとき、本入門講座は、知識としては入門者に一定の納得を得ることができた。しかし、それ以上に、WSを表現・とりまとめの「技能」としたとき、WSをすすめる人格・ひとがら等の必要性を求められるのではないかと、入門者は過剰



に感じてしまい、限界を感じているようである。この3日間の集中入門講座では、知識と体験を与えることはできたが、経験訓練による技能向上の可能性を体感するまでには至っていないことがわかる。

来年度は、時間的に余裕のある、満足度の高い講座スケジュールを考える必要があろう。

表2 ワークショップとは、話し方聞き方、ファシリテーショングラフィックスのふりかえり

|  |
|--|
| <p>2011年9月17日（ワークショップとは、話し方聞き方、ファシリテーショングラフィックス）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・多くの発見がありすぎてまとまりません。</li> <li>今日のように、皆が参加者で、意見を交換できたことが、非常に楽しく嬉しいことでした。とくに、小さなグループにわかれて智恵を出し合うことは、サークルでの役立つように思います。 (基礎工S、Y.T.♂)</li> <li>・ホワイトボードの書き方を意識することははじめて。その重要性が今日はよくわかった。</li> <li>▼ワークショップによって本当に合意形成ができるのだろうか？ (人科M、E.O.♀)</li> <li>▼ファシリテートにおける「議論誘導」「合意形成」の必要性和やり方がピンときませんでした。そもそも、ワークショップでは、複数のバラバラな意見をまとめることのみが目的でないのかもしれませんが。モヤモヤ (基礎工M、T.Y.♂)</li> <li>▼ワークショップをどの場面で活用するのか？ファシリテーター養成を、どうやってすすめようか？不安定 (人科M、NS♂)</li> <li>▼ファシリテーターがどの程度まで自身の意見を述べるべきか？ワークショップ参加者それぞれの自己主張の強弱はどうあうべきか？ 感覚による判断が大きいと感じた。 (工学M、Y.Y.♂)</li> <li>・達成感がある。会話もエンターメントも共感。 ▼出しゃばったかな？ちょっと納得が？ (工学M、KS♂)</li> <li>・2人→4人というグループワークを経験し、自分をどこまで出せるのか、出せたのか⇒70-80%は表現できたか</li> <li>今の気分……若干疲れた、でも満足 (人科M、ME♀)</li> <li>・グループワークで、一つの結論に至るまでの話し合いができて良かった。重要点をポストイットに書いて、ホワイトボードに貼るのは、良いと思った。 (社会人、KH♂)</li> <li>・受身で講義を聞くつもりで参加しましたが、主体的に参加する形で驚きでしたが、貴重な体験でした。 (社会人、A.Y.♀)</li> <li>・話し合いは、今後もいろんなところで行っていきと思いますが、今日学んだことを活かしたら、どれだけスムーズな話し合いになるのか、楽しみな気がします。ですが、うまく行くことばかりでもないと思うので、たくさん学んで実践していきたいと思いました。わくわく…。 (文学S、S.N.♀)</li> <li>・話さないでいた方が良いこともある、という事を (学んだ)。疲れ。 (工学S、T.Y.♂)</li> <li>・最終的に個性だろう…と思いつつ、道具としての知識や技術は、あるにこしたことはないです。ソワソワ (経済S、A.N.♀)</li> <li>・“今日の発見”ファシリテーターとしての役割は、“主張”ではなく、“理解”に重点がおかれている。</li> <li>▼とともに、とても難しい事だと感じた。 (理学S、H.S.♂)</li> <li>・ケースバイケースなことが多いので、判断力が重要か？ それは、慣れなのか？ (文学M、Y.T.♂)</li> <li>・普段は体験できないことに触れる機会が得られて良かった。自分の気付けなかった一面にも気づくことができた。今後、発言力を改善したい。ファシリテーションは難しいが面白く感じた。気分、スッキリ。 (法学M、S.T.♀)</li> <li>・恣意的なリーダーにならないファシリテーターが理想です (経済S、Y.K.♀)</li> </ul> |
|--|

表3 ワークショップの系譜、公園ワークショップ実践のふりかえり

## 2011年9月18日（ワークショップの系譜、公園ワークショップ実践）

- ・ いろいろなアイデアが出てなるほどなあと思った。アイデアをレイアウトに落とすのが難しかった。(社会人、K.H 男)
- ・ 今まで考えたことの無い視点で、公園と中之島について考えられた。人それぞれに「こだわり」があり、一見バラバラに思えることでも、つなぎ合わせると良いものができると感じた。(文学M、Y.S. 女)
- ・ ワークショップは結果よりプロセスが大事ということが面白いと思いました。(基礎工M、T.Y 男)
- ・ 最初はまとまった案になっていなかったが、終了間際になって一気に案がまとまったことに驚いた。(工学M、Y.Y 男)
- ・ 意外とあたり前にある物（ごみ箱等）が重要だったこと。いつのまにか、公園づくりに入り込んでいた。まちを見ることって大事だ。(工学S、T.Y. 男)
- ・ 思ったより細かく（土地の広さ、法的制限）計画を立てていったこと。より現実味がわいた。デザインゲームを作っていく手順で行き詰まる時があり、その後（班の人間）関係が近づいた。(人科M、E.O. 女)
- ・ 自分が役に立てそうなことを探すのに必死で、時間が経つのを忘れてしまった。昨日より積極的になれた気がするので、この調子で頑張りたい。 ▼議論をもっと深めれば良かった。(法学M、S.T 女)
- ・ 大枠をつかむことは難しい。何かしら足りないのだが…。立体的な構成論を学んだ。(工学M、K.S 男)
- ・ 出来上がった公園は、誰もが予想していないものになったが、誰もが満足しているのではないか。このことが面白いと感じました。(文学S、S.N. 女)
- ・ 4人で行うということで、非常に楽しくできました。自分の思っている以上にイメージが膨らみ、完成したものは感動的でした。(基礎工M、T.Y 男)
- ・ 土壇場の力、共同と協働、ワークショップのプロセス管理、時間を有効に使う大切さ、役割分担の大切さ(人科M、N.S 男)
- ・ 計算が早くできない弱点。意見をまとめるのに時間がかかり、作業時間が不足する。まとまるか心配したが、思ったより良い結果が出せた。しかし、自分でやってみて活用できるかな？(人科M、M.E 女)

表4 KJ法、旗揚げ法、ワールドカフェのふりかえり

|  |
|--|
| <p>2011年9月19日 (KJ法、旗あげ法、ワールドカフェ、まちづくりとWS)〔以下、匿名記録〕</p> <p>気づいたことは…ファシリテーターの人柄が反映されるのでは…、</p> <p>ファシリテーターの能力は時間配分</p> <p>GW成功の秘訣は、人員配分、時間配分、資源配分、お金の配分</p> <p>自分の頭に最初はなかったアイデアが生まれた (創発性)</p> <p>WSのプロセスが参加者の納得性を高めるのに有効</p> <p>まとめずにまとめる</p> <p>WSで有意義に話しができる、議論の収束が難しい、意見を集約し理解しまとめるWSの大切さ、難しさ</p> <p>KJ法について、みんなが納得いく結論を導く難しさ、KJ法の難しさ、様々な手法の興味深さ</p> <p>ファシリテーターの役割</p> <p>住民参加は全員ではない、気づく人が現れば地域が動き出す</p> <p>WSを利用したまちづくりが多いこと</p> <p>阪大の授業でWSを取り入れている授業もあったが珍しい</p> <p>嬉しかったことは…具体的な事例紹介は実践力upにつながる、WS事例を詳しく紹介してもらったこと</p> <p>WSの限界と可能性を知れた、WSの全体像と周辺を理解できた</p> <p>プロセスデザインとWS、GW、ファシリテーター、専門家の関係がわかったこと</p> <p>ワールドカフェは、自分が書いたもの他人が書いたものを説明してつなげていけば良いのでやりやすかった。</p> <p>自分の付箋が真ん中に置いてもらえた</p> <p>自分の意見にみんなが反応してくれたこと</p> <p>グループの人との交流が深められた、WSの価値を認める人が多くいた、意見を出し合う共同作業</p> <p>ワールドカフェでいろんな人と話し合えた、共同作業、気軽に発言できる、気楽にできた</p> <p>時間内に結果を出す、形にすること</p> <p>残念に思えたことは…時間の制約→議論が中途半端→拡散、スケジュールがきつい、時間についていけない</p> <p>まだまだファシグラなどの理解不足、スキル不足、言葉選びが難しい</p> <p>自分が多数派の意見になっている点</p> <p>(こんなに素晴らしいWSが) 阪大では活用できていないこと、WS活用場が少ない</p> <p>すぐイライラする、</p> <p>KJ法で構造化ができなかった。意見がまとまらない。</p> <p>WSといっても特定の人が発言力を有する</p> <p>学んだことは…やってみること</p> <p>簡単な仕組みづくりでも結果は大きく異なるのだということ、WSの可能性と意義、</p> <p>KJ法がグループの意見を集約させる</p> <p>時間配分の重要性</p> <p>人の意見を噛み砕いて (聞く重要性)、コミュニケーションの重要性、価値観の違いに気づく</p> <p>ファシ能力には、考え方、性格、トーク力が必要、伝える難しさ、共有化する難しさ</p> <p>WSが自分の視野を広げる。自分の発想の壁に気づいた。その壁を広げたい。</p> <p>KJ法、グループワーク、旗あげの大切さ、でもWSだけで完全を目指さない</p> <p>その他…参加者を尊重している、否定しない</p> <p>姿勢は伝わる→ファシリテーターのスキルupが重要</p> <p>ファシリテーターが議論に入るべきか否か</p> <p>時間を忘れて熱中した</p> <p>次の一步は…実践すること、研修での実践、生活の中での実践、サークル練習に取り入れる</p> <p>次のインターンに活用してみる、練習</p> <p>人を知る、常に自発的に動けるように</p> <p>ファシリテーションの本を読む</p> |
|--|

参考文献

石塚雅明 (2004) 『参加の「場」をデザインする』学芸出版

中野民夫 (2001) 『ワークショップ』岩波書店

## 非構成型演劇ワークショップの可能性について

運行（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）

### The Possibility of Non-configured Theatrical Workshop

Rengyou (Center for the Study of Communication-Design, Osaka University)

とある小学校で取り組んだ、非構成型（順位付けや啓発的な方法が含まれておらず、方向性を予め与えられていない）演劇ワークショップ（以下ワークショップはWSとする）実践の様子を、このたび実践ノートとしてまとめた。明言できない類いの恐ろしさを胸にしつつ当日を迎えたWSで、子ども達のもつ本質的な暴力性を目の当たりにした経験をもとに、『暴力性・差別性にいかに言葉を与え、それらといかにつき合っていくかを示す』という大人の重要な責任について、子ども向け非構成型演劇WSのもつ効用、危険性、また可能性と併せて述べる。

#### キーワード

演劇、ワークショップ、子ども  
theater arts, workshop, children

私がここ十年近く取り組んで来た演劇ワークショップ（以下、WSと表記）について、今年度は非常に挑戦的な取り組みをしたので、ここに記したいと思う。タイトルに「非構成型演劇ワークショップ」と掲げたそれである。WSはもともとが定型を持たない事が特徴なので（しかし、ある程度のデザインは必要である）、何をどこまでやったら「構成」したと言えるのかは意見が分かれるところであると思うが、あくまで比較として「構成型」か「非構成型」か、というぼんやりとした定義である。

これまでは「演劇『で』学ぼう」シリーズと称して、構成型の演劇WSに取り組んで来た。「演劇で『環境』を学ぼう」とか、「演劇で『食育』を学ぼう」というプログラムである。これらは、環境や食育、防災や防犯といったその時その時に設定されたテーマで、他者に見せる演劇作品を作るというWS型教育プログラムであり、子ども達は、グループに分かれて、それぞれのグループに配置されたコミュニケーションティーチャーと共に、創作に挑む。「第三者に、大切なテーマを持った作品を、上演する」という、方向性が与えられている「構成型演劇WS」の一つの典型であると言えるだろう。その「方向性」は、ほぼゼロからの集団創作という困難な作業に於いて、「ゴールを示す」、「観覧者を意識する」など、主に「モチベーションの喚起と維持」という機能を担ってきた。

2011年に、とある地方公共団体の運営する劇場との共同事業があり、演劇の上演と組み合わせ、小学校での演劇WSを実施した。この演劇WSの内容について、「順位を付けた

り、啓発的な内容にしたりしないやり方で、やりましょう」と強い要望があった。つまり、本稿で扱うところの「非構成型」WSをやりましょう、というリクエストである。

私は、実は何度もお断りした。理由は「恐ろしい」からである。実験室で行う類いの実験とは違い、私たちはいきなりライブの現場にプログラムを投入するので、失敗は許されない。「非構成型演劇WS」は、言わば、「恐ろしくて手を出せない」種類のものであった。

構成型演劇WSの特長である「モチベーションの喚起と維持」の機能が、期待できないので、まずは、「モチベーションが喚起できるのか？上演まで維持できるのか？」という難しさがあった。しかしそれ以上に、その打合せの際にも上手く言えない何とは無しの怖さ、があったのである。だが、結局引き受けることになった。

それから、実施するまで1ヶ月ほどの猶予があったが、WS教育は「現場性」が命であるため、事前に準備できることも限られている。結局、実施当日に現場で子ども達と相對したその時にも、まだはっきりとは言語化できない「怖い予感」があった。

当日。私は月桂樹をかぶって、ゼウスになっていた。同じく月桂樹をかぶったコミュニケーションティーチャー（プロの舞台俳優である）の2人は、アポロンとビーナスなのだが、この2人にゼウスが「新しい神話を作れ」と理不尽な指令を出す、という短い劇で、演劇WSはスタートする。アポロンとビーナスがゼウスから下された指令を、オリュポスの神々である子ども達が、代わりに遂行するという仕立てである。

誕生日の星占いの星座を、春夏秋冬で分けて、4つのグループを作った。例えば、天秤座と蠍座と射手座が秋の星座のチーム、という具合である。子ども達が創作のために与えられた時間は、わずか20分ほどである。この短い間に、何のあらすじも方向性も示されず、5分から10分くらいの上演をするというゴールだけが設定されている。小学5年生には、ハードルが高いだろうというのが、事前の私たちの見立てであった。

「どうしていいかわからん…。」と沈黙するグループや、男子がじゃれ合って話し合いが進まないグループなど、これらは構成型であっても起こる現象なのだが、手がかりが少ない分、初動が悪い。とはいえ、4グループあればだいたい1つのグループの進行は順調であり、この「順調チーム」が立って練習し始めたりすると、他のチームも「あれ？うちも頑張らなきゃ…。」という具合に良き伝播が起こる。

今回もそんな調子で、緩やかにではあるが、エンジンがかかっていった。しかし、何せもともと20分しか無いので、私もコミュニケーションティーチャーも、手を替え品を替えながら、子ども達の作業が進むように促していく（このファシリテーションの手練手管は、本稿の主題ではないので、割愛する）。

私は、各チームを巡回しながら、ようやく今回どのようなリスクがあったのかを理解した。あるチームでは、劇の冒頭でいきなり気に入らない相手を問答無用に剣で斬り殺していた。雷を落として街を焼き尽くすチームもあった。平たく言えば、どのチームも非常に短絡

的に、暴力を軸に話を作っていたのである。しかし、想定外の衝撃、という訳でもなかった。私の現場感覚では、「ああ、あの嫌な予感の正体はこういう事だったのか…。」と捉えられた。

創作の時間中、担任の先生の顔は少し青ざめていたが、彼女は子ども達に「そんなのダメ！」とは言わなかった。なぜなら、演劇WSの実施前に、「子ども達に『そんなのダメ!』は、言うてはいけませんよ。個人向けの差別的な振る舞いや言葉があった時だけです。」と私が何度も念を押していたからである。教育委員会などから、背広姿の担当者が見学に来ており、これが先生をさらに青ざめさせたという面はあるし、背広の方々も、少し青ざめた顔をしていた。もちろん、教育の現場では、暴力表現というのはなるべく避けようとするものである。

さて、私はというと、言い方は悪いが、教育委員会の背広組がどう思ってもものすごく困る訳でもないので、青ざめはしなかった。しかし、ここで周囲の大人たちが「これが、演劇WSか…。こんな野蛮なものは、ダメだ…」となってしまったのでは、演劇教育の社会実装から遠ざかってしまう。発表の開始時間が刻一刻と迫るなか、「さて、発表会の後、どうコメントしようか…？」と思いを巡らせながら、子どもたちと接していた。まあ、いつも「どうやって褒めるか？」を考えながら子ども達を見ているのである。そういう意味では、普段と変わらないとも言えた。

わずか20分である。すぐに発表の時間となった。とあるチームの1シーンは、こんな感じであった。

～以下は当日の上演台本より抜粋～

サソリ：「ある所にサソリがいました。サソリが散歩していると、道に人間が居ました。あ、人間だ。毒針で刺してやる。グサ！（と、いきなり毒針で刺してしまう）」

人間：「うわあ！（と、その場に倒れて死んでしまう。）サソリの毒で殺された人間は、生き返りました（生き返る事に特に根拠も理由も示されない）。よくもやったな。石で潰してやる。（と、石をサソリの頭上に振り下ろす）」

サソリ：「うわあ！」

～抜粋ここまで～

とまあ、準備の時と、当然大きな差はない。子どもらしい無邪気な表情や、一生懸命さはあるのだが、物語は極めて稚拙であり、やはり暴力表現に満ちている。観ている大人たちも、子ども達に気分よくやらしてもらおうとなるべく笑ったり、好意的な雰囲気を出そうとはするのだが、全般どうしても表情が固くなる。

私も、おそらく少し固い表情をしていたのではないかと思う。これだから、こんな非構成

型のWSはやりたくなかったんだ、と正直そうも思った。だが、子ども達の発表を観ながら、突然ピンと閃いた。子ども達が作った劇はむしろ、「神話」そのものなのではないか、と。そして、頭の中で、言葉を練った。

私は、全て終わった後、こうコメントした。

「皆さん、それぞれ短い時間で、劇を作るのは大変だったと思います。争いを起こして人をぶん殴ったり、殺したり、復活したり、復活した人がまた相手をぶっ殺したり、そんな作品が多かったですね。でもそれは、僕は悪いとは思いません。世界中で作られた神話は、みんなそんなお話ばかりです。皆さんは、本当に神話を作ってくれたのだと思います。どれも非常に素晴らしい作品でした。」

子ども達は、みんな神妙な顔つきだった。小学生には少し難しい表現だったと思うが、私はあまり小学生に歩み寄りすぎない言葉を選ぶようにしている。火を囲んだ大昔の人々の中で特に想像力豊かな者が、皆に語って聞かせた神話は、このような暴力と争い、死と再生に満ちていたのではないかと私は思ったのである。今、文献として私達が目にする「ギリシャ・ローマ神話」や「日本神話」といったものは、すべてが「暴力と争い、死と再生」に満ちているのではないかと。そして、さらにこうコメントした。

「でも、暴力や戦いだけでは、何も解決しないし、何も作り出せない、と昔の人も知っていたのだと思います。皆さんも、暴力による争いは、できるだけお話の中だけにして、現実の世界の中では、なるべく言葉で、話し合いをして、いろいろな問題を解決した方がいいと思います。」

この一連のコメントは、子どもは集中して聞いていたが、むしろ大人達から、言い知れぬ安堵感がにじみ出ていたことを記憶している。ああ、子ども達に好きに表現をさせた上で、日常へのソフトランディングに成功した、とでも言えば良いだろうか。実際、後の大人とのフィードバックの時間で、あのコメントは良かったと複数の方からお褒めにあずかった。

「ゲームやアニメの影響で、子どもが暴力的になる」という単純な言説には、違和感を覚える。人間には、本質的に暴力的な部分があると思う。非構成型WSの時間は、方向性が与えられないために、そういう「本質」が「道徳」などのバイアスを無しに現出しやすいようである。ゲームやアニメの暴力表現に子ども（大人も）が惹かれるのは、その本質に響くからであろう。

後から振り返ると、今回はいつもにも増して、薄氷を踏むような現場であった（WSは定型が無いので、毎回綱渡りである）。しかし、「世界各地の神話は、暴力と争いに満ちている」というまとめが、今回は上手くはまったものの、もし「神話」という題材でなかったら、どうなっていたのだろうか、と冷や汗が出る。例えば「何かお祭りを作ってみよう！」というようなプログラムで、「暴力殺戮祭り」のような作品が出来上がってしまったら、いかなる方法で子ども達の集団創作を前向きに総括できたのか、今落ち着いて考えてみても、

正直何も思いつかないのである。繰り返しになるが、私は子ども達が、暴力的な表現をしようが、差別的な表現をしようが、第一段階としては、それで構わないと思っている。だが、その表出してしまった暴力性・差別性にいかなる言葉を与え、「暴力性・差別性との付き合い方」を示唆するかが、子ども達の第二段階（単なる一方的表現からの離陸）への成長のための、関わった大人の非常に重大な使命だと感じている。

子ども向け非構成型演劇WSには、人間が本質的に持つ暴力性を抽出し、大人の眼前に顕示するという、残酷な効用があるらしい事は、今回明らかになった。正直なところ、しばらくは実施を封印して、この劇薬の扱いをどのようにするかじっくり考えたいと思っている。この「非構成型演劇WS」が社会実装されるのは、「構成型WS」が少なくとも教育界の中で、もう少し「常識」になってからではないか、と予感している。





## 笑う舞鶴

### －「シリーズとつとつ」実践報告－

西川 勝 (大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD)

豊平 豪 (一般社団法人 torindo / まいづるRBスタッフ)

森真理子 (一般社団法人 torindo 代表理事 / まいづるRBアート・ディレクター)

砂連尾 理 (ダンサー・振付家)

淡路由紀子 (特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」/ 施設長)

## Laughing Maizuru

-thinking in totsutsu action-

Masaru Nishikawa (Center for the Study of Communication-Design : CSCD, Osaka University)

Takeshi Toyohira (general incorporated association torindo / Maizuru RB)

Mariko Mori (Director of general incorporated association torindo / Artistic Director of Maizuru RB)

Osamu Jyareo (Dancer, Choreographer)

Yukiko Awaji (Special nursing home for the elderly Graceville Maizuru)

まいづるRBの企画によって、2009年から舞鶴市の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で取り組まれていたダンスワークショップは、ダンサーである砂連尾理と認知症高齢者の舞台公演「とつとつダンス」を、2010年3月に成功させた。公演後もダンスワークショップは継続されることになり、認知症ケアにおける身体コミュニケーションの可能性を探る一方で、人と人の間に息づくケアの経験をもっとありのままに記述するための勉強会や、多様な価値観や文化に関する理解を深めるために対話を中心とした文化人類学カフェ活動が統合されて「シリーズとつとつ」になっている。

「シリーズとつとつ」は施設介護の関係者のみならず、地域のさまざまな人たちの関心を呼び起こして2年間継続中である。高齢者施設の新しい方向性を示唆すると共に、地域における人々の協働のあり方のひとつとして、途上にある未完成の実践報告を行う。

'Totsu-totsu (in a halting or faltering way) Dance', a stage performance by dancer Osamu Jareo and a group of elderly people with dementia has been successfully presented in March, 2010. The performance was based on the series of dance workshop sessions initiated by Maizuru RB and conducted since 2009 at Grace Ville Maizuru, a special nursing home for the aged. Since the performance, dance workshop sessions have been continued as an ongoing search for possibilities of bodily communication in dementia care. Together with study sessions aiming to find ways to describe moments of truth in relationships between caregivers and caretakers, as well as the 'Cultural Anthropology Cafe', a project looking for ways to establish dialogs between people of different cultural backgrounds with different values, the three became integrated as the unified 'Totsu-totsu Project'.

The Totsu-totsu Project has been running for two years, attracting a growing interest not only among those related to the care institution, but also among various people in the community. This paper is a report of an ongoing practical attempt to structure cooperation in the community and suggest new ways for facilities for the elderly to evolve.

### キーワード

とつとつ、ダンス、特別養護老人ホーム

totsu-totsu, dance, Special nursing home for the elderly

## 「とつとつな音」(美術家・伊達伸明)

目標達成欲の強い人は、とつとつが許せない。  
それが発展途上に見えるから。  
仕切るのが好きな人は、とつとつが許せない。  
それが牛歩戦術に見えるから。  
オチがないと気がすまない人は、とつとつが許せない。  
それが阿吽の呼吸に依らぬから。  
若さの秘訣は?などという人は、とつとつが許せない。  
それが身体の限界に見えるから。

未整理の過去と手さぐりの未来との間に  
点描でしか描けない現在がある。  
それを描く音、とつとつ。

# 1. 舞鶴に集まったとつとつの重なり

## 1.1 それぞれのとつとつ

本稿では、京都府舞鶴市にある特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」を地域のなかで「文化の糸車」に変貌させつつある「シリーズとつとつ」の実践経過を、その参与者たちの共同執筆の形式で報告する。共著者であるわたしたちは、それぞれに背景を異にした活動を、それぞれの場所でとつとつと実践してきた者たちである。舞鶴という土地でダンスとケアが会う「とつとつダンス」を機縁として、わたしたちも出会いを重ねてきた。アートプロデュース、ダンス、文化人類学、臨床哲学、高齢者介護が、ゆっくり、じっくりとその手をつなぎ、足並みを合わせて歩み始めて「シリーズとつとつ」が、舞鶴の地に根付き、多くの人を誘う花を咲かせるように成長してきた。まずは執筆者の紹介を簡単に行う。

○森真理子は、「とつとつ」の仕掛け人。

1977年、愛知県生まれ。南山大学文学部人類学科卒業後、名古屋市内にある古川美術館の学芸員や愛知県文化情報センターでの仕事を経て、2003～2006年まで、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター制作スタッフとして数々の舞台作品の企画制作に携わる。その後、フリーランスで演劇・ダンス・音楽・美術など幅広いジャンルで企画制作を行う。2007年

よりシアターカンパニー「マレビトの会」プロデューサー。2009年より舞鶴市在住。舞鶴市でのアート・プロジェクト「まいづるRB（アール・ビー）」のディレクターとして活動。「まいづるRB」とは2009年度より、舞鶴市とNPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴が協働し、舞鶴赤れんが倉庫群を拠点に始まったアート・プロジェクト。赤れんが倉庫を使った芸術文化活動の提案等を行う。市民やアーティストがネットワークを結び、舞鶴の人や地域にある資源を再発見しながら毎日を楽しむプロジェクトを目指す。2010年度からは、市や同NPOと独立した企画も数々行い、活動の場を赤れんが倉庫に限らず、市内の老人ホームや学校、商店街などにも広げている。

2012年、非営利芸術活動団体「一般社団法人torindo」を立ち上げ、代表理事を務める。

○砂連尾理は、「とつとつダンス」の中心者。

1965年、大阪府生まれ。振付家・ダンサー。大学入学と同時にダンスを始める。1991年より寺田みさことダンスユニットを結成。93～94年、ニューヨークにダンス留学。また、近年はソロ活動を展開し、舞台作品だけでなく障がいを持つ人やホームレス、子ども達とのワークショップも手がけ、ダンスと社会の関わり、その可能性を模索している。

2002年7月「TOYOTA CHOREOGRAPHY AWARD 2002」にて、「次代を担う振付家賞」「オーディエンス賞」W受賞。2004年度京都市芸術文化特別奨励者。

2008年10月より、文化庁・新進芸術家海外留学制度の研修員としてドイツ・ベルリンに滞在中。この間、障がい者カンパニーであるTheater Thikwaの作品制作に振付家として参加する。近年の作品に、「Thikwa-循環プロジェクト」（ドラマトゥルク・中島奈那子）、舞鶴のお年寄り達との「とつとつダンス」、垣尾優、Hyslomとのゲリラ的な活動「The pursuit of new possibility」等。立命館大学、神戸女学院大学非常勤講師。

○豊平豪は、「とつとつ人類学カフェ」の中心者。

1977年、鹿児島市生まれ。南山大学文学部人類学科卒業後、同学大学院博士前期課程を終了後、大阪大学大学院人間科学研究所人間科学博士後期課程を単位取得退学。沖永良部島やフィジー諸島共和国で政治文化に関する論文を執筆。2008年より豊中看護専門学校にて文化人類学と社会学を教える。2009年秋より舞鶴に移住し、まいづるRBのスタッフとして活動。2010年7月より特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で文化人類学カフェを行う。2010年4月より一般財団法人地域公共人材開発機構北部オフィスの職員としても活動。

○淡路由紀子は、「シリーズとつとつ」の推進者。

1963年、京都府八幡市生まれ。2003年に社会福祉法人グレイスマいづるの設立メンバーと

なり、20年余り勤めた舞鶴市を退職。2005年4月、京都府北部初、全室個室ユニット型の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」（特養80人、ショートステイ20人、デイサービス30人）の施設長に就任。

○西川勝は、「とつとつ勉強会」の中心者。

1957年、大阪生まれ。関西大学2部哲学科在学中より精神病院に勤務をはじめ、看護の道に向かう。大学は中退して看護学校に進学し、働きながら看護師免許を取得。20数年間を精神病院・人工血液透析・高齢者介護の現場で過ごす。4代になって看護師として働きながら、大阪大学の臨床哲学活動に参画する。2005年より大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの特任准教授、2010年より特任教授として活動中。認知症ケアを中心に、コミュニティをベースとしたコミュニケーションデザインを試行する高齢社会プロジェクトを推進中。著書に、『ためらいの看護』（岩波書店）など。

## 1.2 「シリーズとつとつ」の概要

2009年11月：特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で、砂連尾理のダンスワークショップが始まる。

2010年3月7日：「とつとつダンス」発表公演。まいづる智恵蔵

2010年4月：砂連尾さんのダンスワークショップ継続。（2012年3月15日現在まで16回開催）

2010年7月22日：豊平豪「文化人類学カフェ」開始。（2012年3月15日現在まで15回開催）

2010年12月10日：西川勝「とつとつ勉強会」開始。（2012年3月15日現在まで11回開催）

「シリーズとつとつ」は「とつとつダンス」公演の後、2年間で計42回開催されており、参加者総数は約500～700名になる。参加者は多様な人々で構成されており、グレイスヴィルまいづるの入居者（要介護高齢者、認知症高齢者を含む）や看護・介護職員、事務職員、栄養科職員だけでなく、近隣の住民（小学校教師、中学校教師、主婦、学生、自衛隊員、府職員、団体職員、自営業者、会社員、フリーター）、遠方からの参加者（ダンサー、舞台芸術家、映像作家、写真家、歯科医師、理学療法士、NPO職員、大学教員、大学生、新聞記者、出版業者など）も多く参加している。年齢、性別、職業の異なる人たちが、身体ワークショップ・人類学カフェ・勉強会の複数に共通して参加していることも特徴的である。ケアとアートが出会い、そこに哲学や文化人類学といった知の活動が巻き込まれたのが特別養護老人ホームという場所だった。施設でくらす高齢者や、施設職員、地域の人たちや、遠来の客人まで、さまざまな人が、ともに身体を動かしながら交流して、自らの新たな感性に気づく。また、言葉を交わし合って、おたがいの考えを深めていくのが「シリーズとつとつ」の目的である。

## 2. 「とつとつダンス」公演の以前・以後

### 2.1 「とつとつダンス」公演レポート（豊平豪）

2010年3月7日曇り、砂連尾理（じゃれおおさむ）によるまいづるの企画『とつとつダンス』は舞鶴市のこじんまりとした赤れんが倉庫群で行われた。

2009年11月から4ヶ月に渡って、舞鶴の特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」で行われたワークショップの経過発表『とつとつダンス』は、まず鑑賞者を戸惑わせるところから始まる。

アクティング・エリアを縦二つに裂いて客席は中央二列に並ぶ。対角線上に設置された二つのスクリーンには、老人ホームでのワークショップの光景が映し出されている。どちら側を観るといふ指示もなく、開始の合図もなく放置されている以上、鑑賞者たちは所在無くスクリーンを眺めるしかない。ようやく砂連尾理が話しはじめ、パフォーマンスが開始されるのだが、彼の合図も鑑賞者である自分たちの頭上を通り越して、対角線の向こうに座る高齢の女性谷口さんに向けられている。砂連尾理と彼女のどちら側に向けばいいのだろうか。目の前の出来事をどうトレースすればいいのか、全体で何が起きているのか。戸惑うしかない。

このような〈戸惑い〉を鑑賞者たちに常にかみ締めさせながら、パフォーマンスは進む。



(写真1 「とつとつダンス」より)

そして、興味深いことに、〈戸惑い〉は出演者である高齢者たち、子供たち、砂連尾理とダンサーの間にも通奏低音のように響いている。

パフォーマンス中に、老人ホームの出演者の一人ミュキさんに話しかけても、言葉のキャッチボールにはならない。こちらが、どんなに言葉を費やしても、基本的に、彼女は抱いている赤ちゃんの人形に話しかけているか、窓の外の風景について話すだけだ。興味があるのに、いつも砂連尾理の動きをみているのに、ワークショップに参加してこなかった上述の谷口さんもいる。耳が不自由なために、この人との言葉でのコミュニケーションの多くも空振りに終わる。もう一人映像でのみの参加となった伊藤さんも機嫌よく踊っていたかと思うと、突然「こんな意味のないことをしてどうする!!」と怒り出したりする。

「ミュキさん、その赤ちゃんの人形の名前なんていうの？」

「(赤ちゃんの人形に向かって) ほくちゃんは名前なんていうの？まつげが長いねえ」

「ミュキさん、緊張しとる？お客さんいっぱいおるよ」

「そうやねえ」

これはパフォーマンス中にスクリーンにライブで映される出演者の陽生（はるき）とミュキさんの会話だが、まったくかみ合っていないようにみえる。だが、その現場を目撃すると、どこかで通じあっているようにもみえてくるのだ。二人の戸惑いながら切り結ぶ、身体をも含めた全的なコミュニケーションのなかに何かみえてくる気がする。

付け加えておくと、砂連尾理は観客たちに〈戸惑い〉を与えるだけではない。ダンサー砂連尾理の身体はもちろんのこと、高齢者でも子供でもない若いダンサーの身体もそうだ。美術家伊達伸明の弾くウクレレの音色、全体を引き立てる抑制の効いた音響、スクリーンに映し出されるライブ映像と記録映像。随所に工夫がこらされている。これらの要素が精緻に考え抜かれた舞台のフレキシブルな構造に組み込まれ、コミュニケーションの実験を支える。

そして、〈戸惑い〉をはらんだまま「とつとつダンス」は唐突に終わる。片隅で伊達伸明がウクレレを引き続け、子供たちは鑑賞者の間や周りをうごめき続ける。若いダンサーが窓際に座り、砂連尾理が黙って寄り添う傍らにミュキさんと谷口さんが出窓に座る。スクリーン上でもライブで流れている静止画のような風景が、遊んでいるような子供の動きにかき乱される。最後まで何が起こるかわからない緊張感をはらみつつも、なぜだか気持ちがゆったりしてくる。

砂連尾理の「終わります」という宣言がなければいつまでも見ていたい光景。僕は、今でも繰り返し、その光景をかみ締めながら、このとき感じたコミュニケーションの可能性について考えている。僕らは戸惑うかもしれない。でも、もしかたら、近代社会が前提にしてきた「個」が止め処もなく加速し、流暢なコミュニケーションが持てはやされ、そこからはずれるディスコミュニケーションたちがあまりにもないがしろにされている今、それこそが考えなければならないことかもしれない。

## 2.2 「とつとつダンス」公演レポート（西川勝）

赤れんが倉庫の2階で、静かに始まった「とつとつダンス」を観ているうちに、ぼくは次第に落ち着かなくなってきた。バックに流れるしんみりとしたウクレレの音に不似合いな自分の胸騒ぎか何なのか、よくわからなかった。

公演は、砂連尾さんと二人の男子小学生、一人の女学生とグレイスヴィルに暮らす二人の女性入居者の計6人が、さまざまに絡みながら進行していく。出演者のうち、ミュキさんだけは自分が舞台に登場するという明確な意思の有無を確認できない。

ダンスの終盤近く、ミュキさんが階下の控え室から舞台上がってきた。やせて細い顔には大きな瞳が見開かれている。周囲の観客を見渡して、不思議そうな視線をちらりと送る。彼女の横には砂連尾さんが一緒に歩調を合わせて付き添っている。砂連尾さんを頼るような、そうでもないような不安げな足取り。誰に向けるわけでもない小さな声でつぶやく姿。微笑んだかと思えば、考え込んだ表情に曇ってしまう。彼女がいまの自分の状況をうまく飲み込めていないのは、誰の目にも明らかであった。そのミュキさんの頬に、ゆっくりと砂連尾さんの細く長い指が伸びていく。戸惑いの気色を見せるミュキさんを、しっかりと見つめながら、砂連尾さんの身体がしなうように彼女に近づき続ける。

観ているぼくは、はらはらしてくる。きっと、この場面は崩れてしまう。そう思ったとき、砂連尾さんの両手がミュキさんの顔面を覆ってしまった。けれど、ミュキさんは何事も起きていないかのように、舞台に出てきたときから抱いていた赤ん坊の人形を撫でている。



(写真2 「とつとつダンス」より)



あり得ないことを見せつけられた気がした。ぼくだけではなく観客全体に緊迫感が張り詰めている。まだ、砂連尾さんの踊りはとまらない。自分が着ていたヨットパーカーをゆっくり脱ぎ、ミュキさんの頭の上からかぶせる。と、粉雪が降りかかったように、かすかにかぶりを振るミュキさん。

認知症の人とプロダンサーの踊りなどという枠ではとらえきれない不思議な交流が繰り広げられる。砂連尾さんの動きひとつひとつが、ミュキさんに引き寄せられ、彼女の想いをかたどるように線を描き、確かな厚みをつけてたどよう。ダンサーが認知症の世界に入っていくのではない。勝手に彼女の内面を代弁しているのではないのだ。彼女の見えない表現に誘われ魅せられて、思わず出してしまったダンサーの身体が、重なる二人のダンスになって観客に見えるようになっただけのこと。

どちらが能動でも受動でもない。生成の現場に二人の身体はあった。そして、ほどけるように、ミュキさんが砂連尾さんから離れていき、倉庫の窓際にふっと佇んだ。その姿に、ぼくは強い衝撃を受けた。単純に感動というには、どこか底深すぎるところから突き上げてくる熱いものがあった。ミュキさんは赤ん坊の人形を静かに静かにあやし続け、窓の外へと目をやっていた。美しい母子像そのものであった。はらはらし通しだったぼくの鼓動が平静な



(写真3 「とつとつダンス」より)

リズムに戻っているのに気づいたとき、公演の終わりが砂連尾さんの柔らかく響く声で告げられた。

### 2.3 とつとつダンスを振り返って（森真理子）

2009年11月から2010年3月にかけて、舞鶴市内の特別養護老人ホーム「グレイスヴィル まいづる」で、ダンサー・振付家の砂連尾理さんによる身体を動かすダンスワークショップを行った。最終的に舞鶴赤れんが倉庫（まいづる智恵蔵）での発表を目標に、約4ヶ月間、毎週1回を目安に砂連尾さんとともに老人ホームに通うことになった。

そもそもこの企画が始まった経緯には、私の赤れんが倉庫での活動がある。2009年度に舞鶴市内北吸にある赤れんが倉庫で行う芸術文化活動の提案をする、ということでこの年から舞鶴に住むことになり、「まいづるRB」という名前ですまざまな舞台公演や美術作品、ワークショップなどを企画した。その一連の中で、砂連尾さんのダンス公演を企画することになった。

単に出来上がったダンス作品を上演するのではなく、アーティストに舞鶴に滞在して（または通って）もらい、舞鶴の土地や人と関わりながら作っていく作品を目論んだ。

砂連尾さんを選んだのには、もちろん理由がある。彼の数年間のダンス作品を見たり、話をする中で、幅広い「ダンス」というジャンルにおいて、単に身体を動かしたり、美しさを追求したり、喜怒哀楽の感情表現を行うことではなく、「今の社会において、“ダンス”とはなにか」「同時代を生きる私たちにとって“ダンス”“踊る”とはなにか」ということを常に考えているように思えたし、自覚的にそれを意識して身体と思考に向かっているように思えたからだ。難しい言い方のようにも聞こえるが、自分のしていることに常に批評性を持ち、問い直しをしているアーティスト、とも言える。私が信頼しているアーティストはそのようなアーティストである。

実施のタイミングは、砂連尾さんがちょうど文化庁の在外研修制度で一年間のベルリン滞在を終えた直後ということになった。砂連尾さんが帰国後にどのような作品をつくるか、当時、関係者や周囲からの期待も大きかったように思う。そのため、帰国後一番始めの作品として、舞鶴での創作を依頼した。

砂連尾さんがはじめて舞鶴を訪れたのは2009年10月の下見のときだ。舞鶴を一緒に見て回り、当時、赤れんが倉庫で行っていた美術家・小山田徹さんの「浮遊博物館」を見たり、さまざまな人と会話をした。砂連尾さんからは、「舞鶴の高齢者と作品をつくりたい」という提案がかなり早い段階からあったように思う。

余談になるが、何人ものアーティストと舞鶴を一緒にまわると、特に興味をもつ視点というのがあって、それは面白いぐらいに人それぞれだ。その視点、最初にどのようなポイン

トに興味を持つか、というのは、そのアーティストとの作品創作に重要な影響力を持つことが多い。たとえばあるアーティストは舞鶴の自衛艦や造船所、工場などの「モノ」やその「サイズ感」に興味を持ち、あるアーティストは舞鶴の「地理的/地政学的」なことに興味を持ったり、「歴史」や「都市性/田舎性」に興味を持ったりする。砂連尾さんはそんな中、特に「人」に興味を持つ人だと思った。それも、その人がどのような土地で育って、どんなことを経験した人か、という内面的なことよりも、むしろ「人」そのもの。その人の今現在の佇まいだったり有り様に興味があるように思えた。おおくの「人」の種類との出会いを楽しんでいるように思えた。

そうして、市役所の方から紹介していただいた「グレイスヴィルまいづる」と出会い、高齢者とのワークショップが始まった。

まずはじめに、砂連尾さんの「ダンス」がどういうものかを知ってもらうため、デイサービスで働く職員の皆さんに向けての説明会とダンスワークショップを行った。「ダンス」に対するイメージは人によって千差万別だが、テレビなどでよく見るようなヒップホップやアイドルが踊るようなものでもなく、社交ダンスや民族舞踊でもない、砂連尾さんのダンスの説明にはどうしても時間がかかる。身体をほぐすようなストレッチはまだ効用としても伝わりやすいとしても、たとえば、手と手を合わせるとか、目と目を合わせるとか、ティッシュペーパーを落とさないように相手に渡すとか、それを「ダンス」というには一般的なイメージとギャップがあるのは仕方ないと言える。そこで行われる作業は、その場にいる相手に対してコミュニケーションを図ることである。そのコミュニケーションも単に伝われば良い、というものではなく、「どんなにやっても伝わらないことがある」ことを自覚したり、「思っていたことと違うことが伝わる」ことも含めたコミュニケーションの形だ。他者との距離を測る作業とも言えよう。

デイサービスで何回かワークショップを重ねたが、ちょうど年末の頃に、このやり方では作品発表につながらないのではないか、という話が、砂連尾さんや施設長の淡路さんたちとの間で出るようになった。デイサービスでは、人が入れ替わりやすいし、砂連尾さんも特定の曜日や日付に来ていた訳ではなかったので、毎回、さまざまな複数の利用者の方と身体を動かすだけであった。職員の皆さんも砂連尾さんの滞在を受け入れてくださっていたものの、どちらかという利用者にも職員にも「砂連尾さんはいつもと違う楽しいことをしてくれる先生」という印象が強かっただろうし、そうなると場の雰囲気も「セラピー」や「レクリエーション」のような意味合いが強まる。そこから作品を引き出すことも出来たかもしれないが、そのときには、それとは違う施設と砂連尾さんとの関係が必要だろうと思った。

そこで、誰からの提案だったか、関係者の中で「入居している利用者の方と固定メンバーでワークショップをしよう」ということになり、2010年の年明けから、オープンな場であ

一階ロビーで、数名の利用者の方との身体を動かす作業がはじまった。この頃から本格的に何人かのボランティアスタッフを募り、作品発表のためのスタッフも施設に通うようになった。砂連尾さんからの提案で、利用者だけでなく、美術作家でありウクレレ奏者である伊達伸明さん、地元舞鶴の小学生と市外からきている大学生も作品創作に加わるようになった。

デイサービスの利用者から入居している利用者になることで、認知症がより進行している方や、より重度の障害を持つ高齢者と出会う可能性が高くなる。そのため、予測不可能なワークショップの内容になったし、毎日が順調なワークショップというわけでもなかったし、ときおり関係者からは不安の声もあった。「これ（週1回のワークショップ）を繰り返して、人に見せられるダンス作品になるのか」「認知症の年寄りが本当に舞台に立てるのか」というのが、その不安の内容だったろうと思う。砂連尾さんは、毎回、参加者たちと会話をし、身体を一緒に動かしているだけなのだ。振付らしいものはないし、何かを強く指示することもない。私自身にも不安がなかったと言えば嘘になるが、一緒にやると決めたアーティストを信じ、なにが出来るか（なにが起るか）分からないことを楽しむ気持ちの方が強かったように思う。何かを性急に決めていくのではなく、ぎりぎりまでアーティストと参加者・スタッフとの関係の変化やそこで生まれてくるものを待つことが、今回の創作ではより重要に思えたし、いつまでも曖昧なままでいることに自信を持ってもらうことが私の役目だろうと思った。

そして公演一週間前には、砂連尾さんもスタッフもグレイスヴィルまいづるに籠りきって、最終作品に向けた調整を進めた。作品発表では、グレイスヴィルまいづるで積み重ねて来た約半年間のワークショップ作業をそのまま舞台にあげるようなイメージを共有した。しつらえこそ、赤れんが倉庫という舞台装置があるものの、内容はワークショップで重ねてきた動きやシーンをつなぎ合わせたものだった。そこから、普段のグレイスヴィルまいづるで流れている時間や人の有り様が、赤れんが倉庫という別の場所で立ち上がってきたのではないかと思う。観客は、その場ではない老人ホームで流れる時間と人と人との関係を共有していたのだろうと思う。

作品への反響は大きかった。「こんな面白い舞台は初めてだ」「本当に丁寧に作られている」「ここまでよくじっくり作品をつくった」「なんだか分からないけど感動した」「とにかく心地よかった」「よくわからなかった」「これがダンスなのか?」「なにが言いたいのか分からない」。観客はある1回の発表の様子を見るにすぎないし、その人がどのような価値基準や尺度を持っているか、ということが反映されるので、当然作品に対する評価や批評はさまざまである。さらに今回の場合、舞台作品に対する評価のあり方と、プロセスや事後の波

及効果も含めたプロジェクト、企画全体に対する評価のあり方の両方を見ることが重要であることも指摘しておきたいと思う。

作品発表だけでなく、それまで老人ホームで起っていたことも重要だったし、それを一度きりの発表で伝えるには不十分な部分もあるだろうと思い、終演後には座談会を企画した。さまざまな立場の人に作品を見て語ってもらおうと、砂連尾さんと施設長の淡路さんのほかに、3名の方をお招きした。ジェスチャーや会話分析などを行う細馬宏通さん、ダンス批評家の古後奈緒子さん、そして、そのあともグレイスヴィルまいづるや「シリーズとつとつ」と大きく関わることになる、看護師であり臨床哲学者の西川勝さんである。

「とつとつダンス」の発表までは、とにかく作品をつくることと参加者や周囲との関係を築くことに必死だったように思う。企画は単年度の助成金に頼るものだったし、一過性で終わることへの責任も感じていたが、私の中では、すぐに今後どうするという案もなく、「とつとつダンス」の発表を終えた。ところが、淡路さんから、発表後も砂連尾さんのダンスワークショップを施設として続けたい、という申し出があった。必死で積み重ねた半年間の作業が、そのように次につながったことは、大きな驚きであったし、とても嬉しかった。さらには、座談会にお越しいただいた西川さんと淡路さんの出会いによって、施設職員向けの哲学の勉強会と、まいづるRBスタッフでもある豊平豪さんの文化人類学カフェという企画も立ち上がった。それが「とつとつダンス」の後、約2年間も毎月1回ずつ続いているというのは、当初予想もしなかったことである。「とつとつダンス」の企画者としては、感謝の意に耐えない。

この「とつとつダンス」発表以降の2年間の活動について、なにかまた舞台発表に近い形でのアウトプットをすべきではないかと思いはじめている。施設職員の方をはじめ、数名の利用者、そして施設の外からの一般参加者による活動は、徐々にその参加者の幅を広げつつある。とはいえ、このことが、施設の活動全体においてどのような位置づけであるのか、日々の生活・活動の中でどのような効果をもたらしているのかなど、まだまだ踏み込めずに見えづらい部分もあると言えよう。

「とつとつダンス」以前と以後で分けて考えてみたときに、外からやってきてさまざまな地域での企画を行う私にとっては、「とつとつダンス」以降、信頼できる地域のあることの喜びと安心感をもたらされた。なにかことを起こすと、それが当然ながら、なにかの関係性を生み、それが気づけば、思いも寄らなかったあらゆる方向に広がっている。そのような実感を強く得ている。また私がアーティストたちとともにやっている活動が、単に喜怒哀楽を表現したり癒しや感動のための装置でなく、社会規範や既存のものや自明のものを問い直す作業だとすれば、たとえば、老人ホームのような介護の現場と結びつくことで、新しい

可能性を生み出すことができるのではないかと、確信している。

## 2.4 とつとつ日記（砂連尾理）

・2010年1月10日

グレイスヴィルまいづるの施設長の淡路さんと話す。老人達や淡路さんはダンスワークショップと聞いて、僕が思っている以上に激しく動くことを想像していたのだろうし、欲求もしているのだと感じる。淡路さん曰く、「老人達は砂連尾さんが思っている以上にはるかに動けますよ。」う～ん、確かに。老人だから、こんなには動けないだろうと、最初から決めつけていた自分がどこかしらあったのかと思う。ここはひとつ、激しく動いてみようか。そうやって動くことで彼等の中に、開かれていくこともあるだろうから。

それにしても踊るとは一体どういうことなのだろう？つくづく考えてしまう。

・2010年1月17日

舞鶴には毎週日曜に行っているのですが、その分休日はなくっているけれども、今の僕にとっては、そこへ向かうことがとても良い時間になっている。今回関わるプロジェクトメンバーが素敵だからというのはあるが、それと同じぐらい、舞鶴の土地が持つ優しく柔らかい雰囲気はとても心地良い。

・2010年1月24日

今日、舞鶴でリハを行う。そうした所、伊藤さんやミユキさんが先週とは全く違う反応で、僕がやろうとしたワークは全くやらせてもらえず、駄目だった。老人達は、たとえ認知症であっても、僕が思っている以上に周りの状況をきちんと把握しているし、当たり前のことだがその場その場での意志は、はっきりしている。伊藤さんには僕の舞踊観は都会の感覚だろうと指摘され、自分の傲慢さに気づかされた。たかだか今までの経験だけで老人や、その周りの状況を括ってしまおうとしていた自分が本当に情けなくなる。何をやっていたんだ今まで！今思っている以上に、その場やその人に対しての誠意と情熱を持って臨まない大変な事になるなと痛感する。

そんな中、ひとつの救いはワークの終盤に現れた谷口さんと筆談しながらダンスができたことだ。最後に自分を紹介するダンスを彼女の前で踊ったが、多分、ここに来て一番必死に踊った瞬間だったかもしれない。この気持ちが彼らと接する上での最低限の姿勢かなと思う。

・2010年2月4日

今日、本番当日ウクレレ演奏で参加してもらった美術家の伊達伸明さんと会って話す。彼と話していて確認し合えたことは、今回の公演に於ける我々の立ち位置である。それは通常のパフォーマンスが行っている、公演日に全ての準備を合わせて整えるやり方で作品を作っていく方法ではなく、その過程に於いて消去されたものに対する眼差しを告発する事、

そして、そこに重きを置くことへの挑戦かなと思う。ただ、それはもしかすると、つまらない事を延々とやり続ける事を行うという事にもなりかねず、そんなことを観客がみたいものなのか、どうなのかについては今のところ全く確信がない。しかし、そういったことが今の舞台芸術には最も必要なのではないかと、個人的には感じてはいる。

・2010年2月17日

僕が今回、舞鶴でやろうとしている事はダンスという枠を超えて、存在すること、生きるということ、また自分は何者であって、何処に向かおうとしているのかを問う作業であると思っている。ある枠を設定している段階で僕は、実はそれに囚われている訳であり不自由である。ある意味、ダンサーや振付家という名前が僕を縛っているとも言える。そういった事でいうと、健常と障害、老いや認知症という括りからくる世界の分け方も、世界を理解していく上では便利な事だけど、それは同時に不自由さと時に差別を生む。そういった事に縛られる事なく自由に生きることは可能か？そういったことを取っ払って人と向き合って生きていくにはどうしたらいいのか？まあ、そんな事を共に考え、感じられる舞台にしたいのかなと思う。

・2010年2月18日

戸惑う事に対して、どう肯定的にいることができるか？舞鶴での今度のダンスはまさにそこを問う作業でもある。その為、パフォーマーに限らず、観客を含め、戸惑う関係を受け入れ楽しむ環境をどう作っていく事ができるか？本番当日に向け、その辺りが大きな鍵になりそうだ。

・2010年2月27日

「他者はわからない」という想定を出発点として、他者といることを模索する技法。？「他者はわかるはず」と思うと「いっしょにいられる」領域は限定されるが、「わからない」のが当然と考えるならば、私たちはずっと多くの場合「いっしょにいること」ができるように思う。？（『他者といる技法？コミュニケーションの社会学』奥村隆著）

“他者と共にいるためには、完全な理解を求めることが適切な理解の仕方ではないことを認める必要がある。そうすれば理解が及ばないために生じる驚きやためらいが、かえってケアの出発点となりうる。？（『ためらいの看護？臨床日誌から』西川勝著）”

今回のダンスのスタンスは、まさにこれだなと思う。

・2010年2月28日

「とつとつ」を焦ったところで、それはただ自分が焦っているだけで、つまりは自分が焦っているという状況がそこにあるだけで、ただそれだけである。

であるならば、どうするか？どうしたいか？この舞台に関しては、しつらえた印象を与えることなく行いたい。演出的段取りをきっちり固めて、老人達や他の出演者が身動き取れなくなるような舞台にする事だけは避けよう。

・2010年3月2日

“あの人の不幸は、私からあの人を遠く運びさる。わたしにできることといえば、そんなあの人を息せき切って追いかけることしかできない。それでいて、あの人を捉えることも、合体することも、ついに望みえないのだ。それくらいなら、少しは身を隔てることにしよう。一定の距離を置くすべを学ぼうではないか。生きよう!他者の死のあとになお生き残る主体がすべて唇にのぼせる語、あの抑圧されし語よ、出現せよ。したがって、わたしはあの人とともに苦しむだろう。ただし、溺れきることなく、自分を見失うこともないのだ。かかる振舞は、非常に情動的であると同時に、非常に醒めたものであり、まことに愛情こまやかであると同時に冷静なものである。(『恋愛のディスクール・断章』ロラン・バルト著)”

ミュキさんというスタンス、彼女とのダンスは、こんな感じだろうな。

・2010年3月6日

今週1週間は、稽古中、ただただ通しをするという時間を重ねる。不安だらけではあるけど、明日の本番はそんな不安を含めて楽しみたいと思う。

・2010年3月11日

本番が終わり、今の僕は今回のような認知症の人と一緒にダンスをするといった通常の舞台ルールではやりにくいことを、どう成立させるかということに関心があるのだということが分かった。また、認知症の人と理解し合いたいというよりは、理解し合えないかもしれない関係性に立ち返ること、それを前提にすることが、これからの関係性を考える時に、他者への尊敬とクリエイトし合えるといった、関係に於ける何らかの希望は見出せるのではないかと今回の舞台を通して感じた。

・2010年3月14日

先週舞鶴が終わり、色々と振り返ってみると、グレイスでの作業は本当に楽しかった。また、自分のダンス活動に於いても今回の舞鶴での出来事は大きなターニングポイントになるだろう。自分の手法に於いてもこういうことしか出来ないのだろうし、それに対して開き直れたようにも思う。つまりそれは、僕にとっての踊りとは、あるイメージを動くことで表現することではなく、戸惑い、悩み、躊躇い揺れることで、どう存在し、また同時に関係をクリエイトしあうかにあるのだなということ。そういったことをはっきり自覚する公演だったように思う。

・2012年3月11日

2年ぶりに日記を見返し、振り返ってみた。改めて、その当時の僕はミュキさん等とのとつとつとした対話に戸惑い、悩みながらも、そんな時間を畏れまた楽しむようにして、とつとつダンスは生まれたのだとしみじみと実感する。舞鶴には2010年の4月以降もワークショップを行うため、通い続けている。当初、僕のワークに対して変なことするなど、戸惑いの表情しか見せなかった職員も最近では、その変なことを少しずつではあるが楽しんで取



り組んでいるように感じられるようになってきた。現場の職員が不可解なことに焦らず取り組む“とつとつ化”が進んでいるのは何より嬉しいことだ。また、僕個人のダンスに関して、2年前のとつとつ以降、植物や昆虫に動物、そしてゴミ、最近ではロボットとも踊ることに何ら躊躇が無くなってきた。むしろ、そんなディス・コミュニケーションから始まるダンスに今はとてもワクワクするようになっている。こんな風になったのも、ミユキさんや谷口さん、そして伊藤さんと関わったことが大きく、彼等と踊った経験が僕のダンスの可能性を上げたことは間違いない。さて、このとつとつと始まった営みは今後どのように展開していくのだろう。個人的には、2年前もそうだったように、あまりはっきりとした目標地点を設定することなく、とつとつとした関係をこつこつと続けていけたら良いなと、相も変わらずそんな風に今も思っている。

## 3. 「シリーズとつとつ」への継続・展開

### 3.1 とつとつダンスワークショップのメモ（砂連尾理）

・2011年5月27日

握手→直接、手で触れ合う。一緒に歩く、歩調を真似る。線香の煙で相手の身体をなぞる。→触れ合わずに2人の空間を意識する。線香の煙を踊らせるように動く、ダンスする。

・2011年6月5日

輪ゴムを人差し指に乗せてじっと眺めてみる。1人が床に横になって、他の4人が手足をそれぞれ揺らし、力を抜いてみることを体験してみる。手で触ったモノを擬音化してみる。例えば、床、マット、壁、カーテン、風etc。その時、出来るだけ今までにない擬音を作る。自分で探る、独自のオノマトペ。

・2011年7月27日

手相のダンス。手相を振付け譜として捉え、動いてみる。見ている方は動いている人の、それ迄の歴史を感じて言葉にしてみる。1人がポーズをする。見ている方は、そのポーズの物語を作ってみる。その時、出来るだけ日常的でない物語を考えてみる。→身体からイメージ、記憶を読み解く。

・2011年8月31日

手結びストレッチ。→「てむすび」の本に紹介されている、さまざまな手結びを行い、指と頭のストレッチ。参考図書：瀬戸けいた・なおよ（2010）『てむすび』主婦の友社。座って向き合い、お互いの指の動きに合わせて自分の指を動かす。更に、足の指、顔と続けて行う。－自己と他者の関係が揺れ合うところを味わい、楽しむ。横1列になって、目を開けると、つむつての両パターンで椅子に座ってからの起立～着席を行いながら気を合わせてみ

る。

・2011年9月30日

足で床を撫でる、搔く、くすぐる、つまむ、叩く、マッサージ等をしながら、足の指や裏側を意識して動かしてみる。妖怪ダンス→妖怪を動いて説明する。参考図書：水木しげる(2005)「水木しげる 妖怪百物語」小学館。→見えないモノに対する眼差しを意識してみる。

・2011年12月9日

呼吸をゆっくり行い、意識する。3分間で何回呼吸を行っているかを座った時と横になった時で数えてみる。マンボでマッサージ。1人が横になり、もう1人が寝ている人の手足をマラカスに見立てて動かす。ステイーブ・ライヒのドラミングの曲に合わせて座しているところから脱力し倒れては起き上がる、を繰り返す。ボレロの曲に合わせ、ロウソクの火と踊る。

・2012年1月30日

ファンヒーターと踊る。→外気が入るところにファンヒーターを設置し、身体をどうやって暖めるかを動いてみる。こっくりさんダンス→1枚の紙に、2人で気を合わせて鉛筆で線を描く。鉛筆ダンス→ドラムの音に合わせて、1枚の大きな紙に複数で線を描き合う。

### 3.2 文化人類学カフェ（豊平豪）

文化人類学カフェの様態を具体的に紹介する。2012年1月23日に「トリックスター」をテーマに開催された。参加者は20名程度であった。(写真は別の回)

#### ●イントロ

豊平：今回のテーマは「トリックスター」です。皆さんこの言葉をご存知ですか？

新聞社勤務：聞いた事もないな。

食品会社勤務：僕もわかんないっすね。聞いた事もない

豊平：そちらは？

NPO職員：なんとなくこうピエロみたいなイメージがあります。

豊平：なるほど。あなたはトリックスターといえば何を連想します？

建築事務所勤務：僕の勝手なイメージではうちのじいちゃんです

豊平：君のところのおじいさんは確かにおもしろいけど（笑）、どうしておじいさんがトリックスターだと思いましたか。

建築事務所勤務：前に話聞いた時に、他人の話聞きかずに自分のことを決める。でも、それでもやっぱりウチの会社を大きくしたっていうのが凄いなど。尊敬できる人です。

尊敬できる人であると言う事はトリックスターに近いかなと、僕は思います。

豊平：そちらはどうですか？



(写真4 文化人類学カフェ )

ホテル勤務：豊穡をもたらす存在。

フリーター：妖精さん。たとえばシェークスピア『夏の夜の夢』のパックとか。

小学校教師：コヨーテとか。

豊平：コヨーテは典型的ですね。動物はトリックスターとしてよく出てくるモチーフです。ウモリやウサギもそうですね。パターンとしては大体こんな感じになるようですね。では、もう少しトリックスターとはなんなのか踏み込んでみましょう。まず『トリックスター』（P・ラディン、C・ケレーニイ、C・G・ユング著、皆川宗一郎高橋英夫、河合隼雄訳、1974年、品文社）という本からはじめてみましょう。原著は1956年ですが、日本語訳は1974年です。この本の中で、人類学者のポール・ラディンが、アメリカインディアン、特にウィネバゴ族の神話について触れています。彼らの神話の中にワクジュンカガというキャラクターが出てきます。これをトリックスターとしました。ワクジュンカガは、無理矢理訳すと「手際が良い奴」だそうです。手際がよい奴ってというのは、要はいたずら者です。彼のいたずらの特徴は「無意味」。無意味な事をひたすらする。これは結果として、素晴らしい事を起こす場合もあるし、とんでもなく悲劇的な事を起こす場合もあるんだけど、彼自体には何の悪気もありません。ただやってしまう。そのせいで物事が良い方向に向かったり悪い方向に向かったりする。そういう目で眺めてみると、どんな神話でもトリックスターは出てくるんです。お、この雪の中を遅れて登場の方がいますね。いきなりですけど、トリックスターといえどどういうイメージですか。

大学准教授：そんなに中心人物じゃないけども、物語のキーになる存在ですかね。

豊平：確かにキーパーソンです。良いも悪いもなく大変両義的です。ユングはこれを心の一番奥底にある原初的なものであるとしました。だからこそウィネバゴ族の神話っていうのは生き活きとした物語として存在していた。少なくともユングが論文を執筆した当初1956年位にはかつてあった「神話」ではなくて現在の面白話として彼らの日常の中にあったわけです。

森：山口昌男もトリックスターの話をしていますよね。

豊平：『トリックスター』の日本語訳版で山口昌男は「今日のトリックスター論」という解説書いています。この論文はおそらく『道化の民俗学』結びついていきます。さきほどそちらの方がおっしゃられたように、トリックスターといえばピエロを連想するっていうのその意味で間違いではないわけです。例えばイタリアの、オペラに出てくる代表的な道化の1人アルレッキーノは召使いなんです、アルレッキーノっていうのは嘘をつきます。主人から、お前なんでこれやらんかってんって言われて、あ～〇〇さんが言ったから、みたいな言い訳をします。〇〇さんっていうのはとっさの嘘です。いないんです（笑）。架空の人物まで登場させます。そうこうしている内に、別の主人にも実は仕えている事が明らかになってきます。その主人からも何か怒られて、いやいや、向こうのあのアホが、みたいな事を簡単に言います。とにかく、AとBという主人の間を架空の人物までいれて掻き回すんです。他に、例えば日本だとスサノオノミコトがトリックスターとして有名ですね。

フリーター：スサノオノミコトは、結局、本来不可侵の領域にいきなり殴り込んだり、いろんな事して引っ掻き回します。破壊と再生の象徴のような気がしますね。

豊平：階級とか不可侵の領域とか神聖なものとかいうのを、トリックスター達は軽やかに飛び越えます。あたかもそんな境界など無かったかのように。その秩序の中で生活してた者はびっくりするわけです。えっ？なんで？って、おかしいやん、俺らこういう秩序で生きとったのに、となる。トリックスターに境界を壊す気はないんです。知らないだけなのか、そもそも興味がないのかは解らないですけど、トリックスターは境界を越えます。そこに良いも悪いもないんです。ただそういう存在なのです。このことはとても面白いです。僕らは理性として、ここに線があって、ここからは入っちゃいけないとか、ここは他人の家でちょっと気持ち悪く思うとかっていう、自分で境界を作ります。でもその線は実は想念の中にしか存在しない。僕らが勝手に想定しているだけなんです。特にあたりまえに想定している境界線はあたりまえ過ぎて僕らには見えなくなっています。それをトリックスターたちは眼前に突きつけてきます。

中学校教師：なるほど。

●物語の中のトリックスター

豊平：いろんな物語の中でトリックスターはなんなんだって考えるってのはなかなか面白いと思うんですけど。

建築事務所勤務：「不思議の国のアリス」の猫。チェシャ猫、あれはトリックスターやと思います。

豊平：どんな話だっけ？チェシャ猫は。

建築事務所勤務：チェシャ猫は、アリスっていう女の子が不思議の国に入って来て、そこで最初に会うのが、確かその猫で、猫ってのは何もしないんですよ。ここに行ったらこうかもしれないし、ああかもしれないし、みたいな事しか言わないんですよ。何も断言はしないんですよ。

豊平：なるほど。

建築事務所勤務：導く訳でもないし。でもアリスに出てくるキャラクターの中では一番人気があるんじゃないですかね。猫は喋ってくれるんですけど、会話にならない

豊平：確かに、そうですね。他になんかありますか。トリックスター的なもの。

淡路：『ゲゲゲの鬼太郎』のねずみ男みたいなイメージがちょっとありました。

豊平：ねずみ男は多分そうですね。ねずみ男に主義主張はないです。鬼太郎側にいるかと思ったら敵の妖怪側についたりとかして掻き回します。金儲けしたいとはいつもいっていますが、する気があるとは思えない行動をとります（笑）。ゲゲゲの鬼太郎では、ねずみ男が絡んでくる事によって、いつも話はドライブします。

グレイスヴィルまいづる職員（24歳）：ゲゲゲの鬼太郎はなぜか面白くないんです。漫画は好きなんですけど。

豊平：なるほど。『ゲゲゲの鬼太郎』を初めとして水木しげる作品はいわゆる最近のメジャー漫画の「お話」とは最近のものと少し違います。主人公の鬼太郎をはじめとしてキャラクターたちは成長しないし、話も整合性の水準では破綻していることが多い。伏線もあるようでない。でも『鬼太郎』はまだましな方です。「不思議の国のアリス」になると完全に目茶苦茶です。メッセージとしても何をいつているのかわからない。でもそのめっちゃくちゃさとは関係なく面白いわけです。その意味で、ユング的に言うと無意識に繋がってる原初的な、むしろ神話の、トリックスター神話に近い形になっているのかもしれない。

グレイヴィルまいづる職員：うーん。

豊平：あるいは、物語の構造には2つあるといってもいいのかもしれない。1つは表面的な整合性のレベル。映画で考えるんだったら、例えば本筋と全く関係ないようにみえる会話のシーンがある。そしたら当然、この物語に整合性の構造を見ている人達は、いつかその会話のシーンが生きてくるはずだと思うわけです。1回でもこっちにふつ

たんだから、これは物語にとって何かの意味がないといけないというのは、第1の構造的見方です。でも、それに対して1つ深い構造があります。「目新しいものもないし、よくわからないけどおもしろい」という物語のあり方だと思います。一見して意味不明な物語です。トリックスター的な物語、両義性の反復のような形ではないでしょうか。もちろん、これらの2つの構造は相反するものではなくて程度の差こそあれ同時にあるものだと思います。

食品会社勤務：よくわかりませんね。

豊平：表面的な整合性っていうのは、別の言い方をすれば、合理性とか経済性とか科学性のことだと思うんです。でも、物語の推進力というのは整合性だけじゃなくて、良いとか悪いとかなんて解らない両義的なもののなかにあるように思います。

### ●ふり幅のある答えへ

淡路：老人介護についても表面的な整合性はあるじゃないですか。お年寄りの世話する事は良いことで世の中に対して整合性があるって、ボランティア的かつ人権尊重だって感じ。でも、それに携わる人は非常にストレスを抱えている。家族にしたってそうですよね。それで施設に入居みたいな話になったりもしている。誰がどこで世話するのが一番良いのか、そして老人は本当に世話を求めているのかという部分ですね。

豊平：老人ホームに預けるのではなく生まれた育った家で死なせるのが良い事だっていう通念みたいなものがある。でも、それは現実問題として厳しいとか、そういう通念自体の存在がストレスになる。良い事だと暗黙にされている事でいっぱいありますもんね、強固な道徳的な基準みたいなものがないという状況下においても暗黙の道徳的な何かの基準は在る。でも、その基準が移ろうものだというこれまた暗黙の了解もあるからストレスになる。

西川：あのね。年老いた親の世話は家族がするのが当たり前っていう時代にそれなりにみんなやっていたわけです。ちょっと無理でも、分家とかいろいろやって、地域の中で親族やとかでもなんとかやっていた時代がある。それが自分たち個人の努力じゃなくって、いきなり国やとか、そういう所からポーンと養老院ができる。そして、年寄りはおうこっちに集めるわって言った時には、おそらくその今までの秩序をこうガラッと変えるようなやっぱりトリックスター的な何かが出てきたのだと思います。僕たちは普通、問題って固定してて、答えが出たらそれで解決すると思っている。でもトリックスターは、悪だと思っていたら善だったりとか変化する。要するに人間の問題解決っていうようなあり事をせせら笑うようなところがある。「問題⇒答え」だけでは、その社会の問題とか人間の問題に実は解決がつかない事を突き付けるような存在。人間の理性をせせら笑う。せせら笑われて何に気付くかって言ったら、人間の

ある意味での限界、自分達が今一生懸命やろうとしている事の限界みたいなものをきちとこう気付く。だからふり幅のある柔軟性のある対応が出来るようになる。でないと、理性だけだと本当にコンピューター的に入力したら答えは自動的に出てくるといふ、1つの流れでしか問題は解決できない。全然違った方向で、その幅の中で、モノ考えられるっていう事では、つまり合理的ではないという事は、実は無能になる訳ではなくって、合理から不合理までの、こう幅広い選択肢を、人間は選べるという事です。

豊平：日常的に善でも悪でもないものってのは多分常にあると思うんです。なんて言うのかな。「盗みは悪い事です」が、じゃあ盗みをやったから「その人は悪い人です」とは単純に結びつかないところで、多分僕らは日常的に生きているわけですよね。

西川：トリックスターのことを考えてみれば、基本迷惑かけて、たまにありがとうという感じでしょう。そういう風に対処しないとトリックスターはすぐに殺されてしまいますから（笑）。盗みをして、たまにその盗みがよきことにつながって感謝されて許されちゃう。

豊平：憎めない奴。

西川：トリックスターが1人で活躍してる間は別になんともない。ただその周りの人間が、それで何に気付くかという話です。それしかない。だから、盗みをやる奴がいるとして、でもそれと対立しちゃうと怒るだけになってしまう。それは盗られる前と、盗られて怒るっていうのは人間的に全然変わってない。ところが、あ、盗る奴もいるわ、って、こんなうまい事言う奴もいるわ、っていう形で、今までみたいに善人とは付き合うけど、悪人は徹底的にしてやっつけるっていうような生き方から、善人とはちゃんと付き合う、でも悪人とも付き合えるっていう風にこう「幅」が出来る。

豊平：その「幅」みたいな事なんかもしれないですね。トリックスターを使って気付くというのは。

西川：後は「偶然性」も大事ですよ。鷺田清一がよく引き合いに出す話があります。昼間眠くて仕方がない看護婦が、ものも言えないおじいさんの所に行って、おじいさんの上で居眠りしてしまう。その内にそのおじいさんが目を覚ましますが、その娘が婦長とかに怒られないように周りに気遣うようになったっていう話です。あれだって、いわゆる看護婦としてはしてはいけない事をするんだけど、それが、かえっておじいちゃんの、どうしようもない看護婦をかばうが為に、もの凄く自発的な動きが出てきたっていうイメージで語られます。1つの出来事があってもその出来事を偶然だから無意味っていう風にしてはいけない。あらかじめ計画していた事だけに意味があって、その中でも、成就したものだけが我々にとっての誇りとできるものってしてしまうと人間の人生って瘦せっぽちなものになってしまう。だから、そういうたまたま

の出来事の意味を、こうやっぱ神話的につて言うんかな、あの、認めていくっていう事が、社会の中でも人生についても凄い大事な事っていうのはあるでしょうね。

●ケアプラン

淡路：長寿は、ええ事なんか悪い事なんか。仕事しながら凄く悩めますね。

豊平：はい。

淡路：良い事やと思てるやん。最初は。

西川：そうそう。

淡路：ケアプラン。施設の中でどういうケアをしていくかって言うた時に、その人らしさ、みたいなんを、絶対出さなアカンみたいなプランを、書くんよな、あれ。

西川：でも、認知症の、って言ったら悪いですけど、そういう今までとまたちょっと様子が変わった人のその人らしさってというのは。

淡路：そやからな、今までの生活歴とかどんな人やったあとか、本来のこの人らしさはね、みたいなどきに、辿り着く最初のケアプランってというのは、初めて書いた時はもの凄いい良いお母さんで、子供が好きで、とかも、一生懸命やろうとしてきて、家庭生活をもう一回繰り返すような、こうなんか、例えば家事の手伝い出来るようなこうケアプランをやったげようとかいうような事を、最初は、一生懸命考えるけど、そんな成る訳ないねん。ほんで、成る訳ないところで、それでちょっと成就すると、今の、この人にとって何が幸せなん？っていうところに、次、第2段階みたいに。

豊平：でもそれ、一回、その第1段階を踏むのが大事なんですか？

淡路：大体そこ、素人がそこ、まず踏むねん。

豊平：ああ。

淡路：この人らしさみたいなん、前のお母さんのその生きがいみたいなんをもう一回取り戻してあげようみたいなどきに、最初こうもっていききたい。

豊平：その人が何か好きだったら、その好きなものをもう一回好きになれるように。

淡路：そうそう。好きなものを食べさせてあげよかみたいなん。

西川：まあそれはね、大体そういう人と付き合ってた、周りのもの都合なんですよ。

淡路：そうそう。

西川：しっかりしてたお母さんとはちゃんと上手くやっていけてた家族は、もういっぺんちゃんとしたお母さんになって欲しいん。でないと、困るから。周りの人間が。

豊平：ちゃんとしたくないかもしれないもんね、お母さん。

淡路：そうそう。

豊平：もういいやって。

西川：だから、それは家族の為というか、その人以外の、その人で困ってる人達のケアプラ



ンですね。

淡路：そうそう。だってケアプランで、本人の意見言う人ほとんどないからね。一応本人の意見が主にならないといけないけど、結局最終的に家族の意見とか、こう思ってんちゃうっていう事を、想像して書いていくねんけど、大体打ち砕かれんねん現場では。そんなん全然そんな通りにならへん訳よ、どんな事したって。そうするとある時こう、ミユキさんみたいに、ダンスしてると、この人こういう事で凄く幸せそうやなあっていう事で見ると、そこで、あ、ミユキさんの幸せはなんやろか？みたいな、今のミユキさんの幸せとか、今のミユキさんから発せられるコミュニケーションを受けとめて、こうプランを考えていこうと、でもプランで言うても、意図した通りにはいかないからね

フリーター：逆にプランでいうのは意図的にしてしまうと、それは多分制御になってしまうんではないかなあ。

淡路：でもそれは介護保険の中ではプランやねん。計画を立てろと。人の世話をする為に。

豊平：でもね、計画ってのは打ち砕かれるものですからね。

淡路：で、打ち砕かれたら3カ月毎にモニタリングしろって言われる。結局は、最後のダメが多い。ダメダメって手を変え品を変えやる訳よ。

豊平：でも、どうなんですか、あのこれ完全に興味本位ですけど。中には、どうしようもなく憎たらしいっていうおじいさんとかおばあさんとか…。

淡路：うわあ～、そんなここで言ったら怒られますよ。

豊平：でも逆に言うと、同じような事をしてるのに、うわあ～って言う人がいて、でも憎めないってパターンもある訳ですよ。

淡路：基本的にはみんな憎めない。全然誰もそんな悪意もって誰もやってないから、それこそトリックスターじゃないけど、もう奇想天外。思ってもみない反応があるから、へえ～ってなって、なんでああいう風な反応なのかなあっていつも思いますね。

### ●トリックスターの力

豊平：外国に行くと、僕はフィジーの村で調査をしていましたが、僕はその村の事を何も知らない訳ですよ。言葉も知らないし、習慣も知らないし。まあ、ある程度は本で勉強はして行きましたけど、そんなの知ってるうちに入らない。やってはいけない事を簡単にやってしまう。本来はここには入っちゃいけない所に入って「これなんですかあ」とか言うし、食べてはいけないものを僕が食べたり、みたいなことがあるわけですよ。だからその、外側にいるっていうのはね、なんかそういうトリックスター的な要素もあります。

淡路：ストレンジャー。

豊平：そうですね。ストレンジャー。

西川：中心と周縁っていう言い方があるけど、周縁なんですよ。

豊平：でも、その周縁みたいなものが、グローバル化が進みインターネットが繋がり…ってなった時に、周縁どこやねん？みたいな話になってんのかなって気が今しました。つまり、この広がっていく、まあ経済性とか合理性とかで代表されるようなこの感覚ってものを相対化できるような、もう一回見直す事ができるような部外者の視点、みたいなものがなかなか見えにくくなっているのかもしれない。実は日常生活で部外者の視点でいくらでも対処してるし、実践の中で生きているんだけど、それを経済性・合理性の論理にぶつけるような論理として鍛えてはいないから見えにくくなっている。ある村が「村」でいる為には常によそからの人が必要だったし、変な人が必要だった訳ですよ、変なおじさんも必要だったし変なおばさんも必要なわけです。でもそういうのが無くなって無味乾燥というか、綺麗なものとして、おかしな人は病院へ、おじいちゃんは老人ホームへ、ここは全うな人達のコミュニティーみたいな分け方がされていった。

中学校教師：例えば、僕は特別支援教室で教えてるんですけど、子供らの話には整合性がなく、教えても学力つかないし、手も不器用だし、コミュニケーション能力が低いし、多分周縁の子ども達でしたね。

西川：でも基本コミュニケーション能力とかってね、人が身につけるべき能力だと思われている。でも例えば、大阪大学で、コミュニケーションデザイン科目を教える際に、学生たちに「君達できるだけこの授業の中で自由にやってくれたまえ」といっても何もできない。絶対にこう自発的にと言っても、きちっと良い子でしかいられない。

西川：うん。半年かけても難しいの。

豊平：半年くらいだったら全然ダメだって事なんですよ

西川：全然変わらない。理屈は言うんですよ。言ったらみんなその通り言うんですよ。オウム返しだけじゃなくて、パラフレーズして、こういう事ですねって、この授業の価値はこういう事ですねって。だから、喧嘩せえやいっぺん、とかって思うんですけど、罵ったりとか絶対しない。やっぱり基本的なディベートなり、対話の形になんとか納めていこうという。こう、なんか、教員が言わないのに、言わない事を教員の意図というか、授業の目的というか、勝手に先取りして、あまり他の人から文句言われないようにする。だからトリックスターのなとこ全然ないんですよ。良い事しかできない。

ホテル勤務：今の若い子ってすごく協調性を求めますよね。

フリーター：やっぱりね、1つはどっちかですよ。あのう、凄くそこから外れる事が正しいのか。

ホテル勤務：嫌われる事がこわい、っていう事も、なんて言うんだらう、自分の中には抱え込んで。

西川：そうそう。だからそういう意味ではもの凄い病理性持ってるんですよ。できる人達は。例えばその講義で「ディスコミュニケーション」というテーマで話をしますけれど、そんな時に理解できない、解らない、知らない、納得できない。ここら辺にそもそもディスコミュニケーション起きますよね。でももう1つ、歪んだコミュニケーションっていうのがあって、例えば教員が、教室っていう側で、さあみんな自分の事を家電製品で喩えて自己紹介しなさい、って言ったら、みんな真面目にすんだよ。ほいで、真面目にしない学校も多分あると思う。多分、しないと思います、特別支援学級の子供達にね、自分の事を電化製品で自己紹介しなさいって言ったって、「わからねえよー!」とか「嫌!」とか、必ずそういう風に、教員の言ってる事をひっくり返すような発言をしたり、気に入らなかつたら出て行ったりするかもしれない。で、そういう意味では、授業の内容そのものを大きく変えるくらいの力を持って、教員と同じ位の力を持って、教室の場に登場できるんですよ。ところが、出来の良い人達は、別に、これせえへんかったら単位やらへんぞとかね、別に脅しをかけてる訳でもないのに、教員の規範を自分のそっくりそのままにして、自分が無理じいされているという自覚すらない。自分が今、不自由なコミュニケーションに巻き込まれてて、他の可能性を失ってるっていう自覚もない。だから、あのう、そういう意味ではね、誰も気づいていない社会の変さ加減を、ポンッとこう気付かすっていうのがトリックスターなんですよ。

豊平：トリックスターの行動によって、また周りが気付くっていうのはそうですね。

西川：うん。でもそれは、そういう変なままとはいえ安定してる社会にとっては非常に危険な訳ですよ。

豊平：危険ですね。だから、トリックスター的っていうと、それこそフィジーで、何度も言ってますけど、フィジーの超自然的な力として「マナ」っていうのがあって、マナっていうのは、良いものでも悪いものでもなくて、ただ力ですよ。良い事をするし悪い事をするし、ただの力です。で、それを持ってる、マナが強ければ強い程、首長になれる訳ですよ。で、その強い首長ってのはよそから来る訳です、外来王、外来から来る。で、フィジーを最初に統一した王様はザコンパウっていいます。パウの悪っていう意味なんです。それが王様になる訳です。なぜなれるかといえば「怖い」からです。「理解不能」だからです。怖い部分がある反面、もしかした豊穡ももたらしてくれるだろうというわけです。彼が豊穡ももたらさなかつた時は排斥されてしまう。そういう両義的な力があるとされてる。

西川：例えば人工だとか人為だとかっていう言葉の反対語って言ったら自然と思うじゃない

ですか。人工の反対は自然と言う。でもこれは、要するに近代以降の考え方で、人間と自然との間に線を引いたわけですけど、多分トリックスターだとか、そういうフィジーなんかの世界観ていうのは、その人間の反対は？って言った時は超自然なんだよね。だから、あのう、世界観としては昔の方がもっと広い訳ですよ。人間を含む自然と、それを超える超自然っていうもの。でも今僕達は、超自然だとか、そういう非合理的なものは、世界観から排除して、人間が理解できる範囲内の、自然と人間っていう、ここでこう二項対立を作っている訳で、世界観としてはもの凄いもっとギョウっと、人間にしか見えない、世界がちいさくなってしまっている。

### ●おわりに

豊平：ここまで話してきましたが、とはいえトリックスターだらけだったら、これは困った事になりますね。というより、そうなるそれはもはやトリックスターではない、

西川：そうそう。秩序の傍にいるからトリックスターになれる。

ホテル勤務：秩序があって、トリックスターがいるから、そこで新たなこう、気付いたりが起こると。

豊平：多分、だからさっきも言いましたけど「泥棒」が傍にいるみたいなことだと思います。「アイツいつつもライター盗ってる」とかはよくある話です。トリックスター的な本当にいたらおかしい事になるけど、日常にも、気付きさえすればトリックスター的な両義性の要素はあります。ユング的にみれば、自分の中にこそトリックスターは存在する。だからそれにもう一回目を向けて、その価値を考えてみるっていうのが大事なのかもしれません。まとまった雰囲気が出たので誰かが話し出す前に一回やめましょう（笑）。

## 3.3 とつとつ勉強会（西川勝）

### 3.3.1 何のために勉強会は始まったのか

「とつとつダンス」の公演後も、砂連尾さんのダンスワークショップが続いていることを知ったばかりは、「グレイスヴィルまいづる」の施設長である淡路由紀子さんをお願いして、それに加わることにした。月に1回、定期的に開かれているワークショップは、施設職員の研究会という位置づけとともに、地域の住民にも開かれた活動になっていた。入所している高齢者も参加している。簡単なストレッチ体操からはじまり、いろんな工夫で身体コミュニケーションのあり方を探るワークショップは、障がいの有無や立場の違い、年齢や身体能力の差を軽々と超えて参加者みんなが楽しみながらも、不思議な経験をしてしまう内容であった。ただ、その経験をうまく言葉で伝えられないもどかしさを淡路さんは感じていた。施設介護は24時間休みなく行われる。せつかくのワークショップも参加できない人にとっては、



(写真5 「とつとつ勉強会」)

何をしているか、何のためにしているかがわからない。研修の意味や成果を伝えるためには、それに見合った言葉が必要になってくる。

この悩みに対して、ほくは「ケアの記録からケアの記述へ」という勉強会をダンスワークショップと並行して行うことを提案した。実際の介護現場で要求されるのは、介護実践の客観的な記録であり、介護者が感じた言葉になりきらない気持ちや戸惑いは消去されてしまう。ある時、ある場面で、自分にだけ向けられた利用者の言葉や表情に自分がどのように揺さぶられて感動したのか。それを共に働く仲間や、利用者の家族に伝えたいのに、うまく言葉が見つからない。書き上がった介護記録は間違っていないけれども、大切なことが零れてしまっている。同じ不満が、ダンスワークショップの参加者にも当てはまると考えたからだ。「自分にだけ書けることを誰にでもわかるように書く」「ありのままを伝えたい」ということを目標にして、「ケアの記述」を身につけていくための勉強会をすればよいのではないか。簡単にいくことではないが、不思議なダンスワークショップと同じ日に、それと関連したケアの記述の勉強会をする。この提案は受け入れられた。ここでは、その詳細を伝える余裕はないが、勉強会のタイトルだけを紹介してみる。「レトリックについて」「からだ言葉」「オノマトペ」「遊びについて」「書くこと (1)～(4)」「貝原益軒」など。この勉強会にも施設職員だけでなく、一般の人たちが参加している。

### 3.3.2 第1回とつとつ勉強会「介護は感情労働!?(2010年12月10日実施)

どんなふうに勉強会が行われているのかを伝えるために、第1回目の勉強会の模様を具体

的に紹介する。

はじめまして。大阪から来ました西川と申します。今日は呼んでいただいてありがとうございます。さて、今日は感情労働の話をしようと思います。介護・看護——いわゆるケアの仕事——が感情労働と言われだしたのはすいぶん前のことです。とはいえ、そのことの意味というのがみんなに伝わっていないと思いますし、そして何より学問畑から言われっぱなしというのもどうかناと思っているわけです。だから、感情労働という言葉について介護の現場の人間が考え直してみたらどうか。そういう気持ちでタイトルを「介護は感情労働!？」にしてみました。

お渡ししている「考える本のはなし2」(Neonatal Care. vol.15-2,pp82-83.2002)というプリントは、メディカ出版から発行されているNeonatal Careという新生児医療などを対象にした医療雑誌に僕が連載していたものです。そこで僕は本を読んでその感想を書くコラムをやっていました。そして、これが僕の感情労働について書いた文章の最初のものです。

まず、僕のプロフィールをみてもらいましょうか。「1957年生まれ。看護師。介護老人保健施設ニューライフガラシアに勤務。現在、社会人として大阪大学大学院文学研究科(臨床哲学研究室)博士前期2年に在学中。『ためらいの看護』が修士論文のテーマ」って書いてありますけど、これ嘘です(笑)。このテーマでは修士論文は書きませんでした。「『ためらいの看護』(2007、岩波書店)は、この後、僕が出版した本のタイトルになりました。

「精神科看護、血液透析看護、痴呆老人介護の経験から、『看護の語り』をめざしている。本とお酒と、語り合える友がいれば上機嫌」とプロフィールは続きます。というわけで、今日も本当ならお酒でも飲みながらお話できればいいんですが、そういうわけにもいかないんで(笑)、ちょっとお勉強、いやお勉強というよりはみんなでいろいろと考えてみましょう。

### ●労働って何やねん？

まず、はじめに、この勉強会があるまで「感情労働」という言葉をきいたことなかった方、手をあげてもらえますか？なるほど、ほとんどの方がご存じないですね。肉体労働はどうでしょう？これはもちろんありますね。頭脳労働はどうですか？それももちろんありますね。これまでなかったということは、感情労働は肉体労働とも頭脳労働とも違う新しいタイプの労働として言われだしたということなんです。それと、労働という言葉はちょっとかたいですねえ。みなさんは労働で何をイメージしますか？はい、そちらから次々どうぞ(笑)。重労働。労働基準法。労働組合。労働者。どんどん出ますね。

重労働って言葉でもわかるように、労働にはしんどいというイメージがあります。労働のことを英語ではレイバー(labor)といいます。どちらかといえば苦役です。苦しい役割。

だから労働者としての権利を回復しなければならないと言った感じで使われることが多いです。一方で「仕事」という言葉を考えてみましょう。仕事組合って言葉ないですよね。重仕事もきいたことがない。仕事というのは労働とは少し意味が違うようです。「それは私の仕事ですから」という言い方はありますね。このとき苦役のイメージはない。誇りをもっているように思えますね。「それは私の仕事です」と言ったとき、そこにはプライドと結びつくような印象があります。

似た言葉で「仕合せ」という言葉があります。普通の「幸せ」はハッピー、ラッキーということですよね。こちらの「仕合せ」は、自分がすることを人ときちっと合わせる、調整する、みんながうまくいくという意味の言葉なんです。人との関係をうまくするということが、昔はこちらの「仕合せ」という文字を使っていました。でも、最近はこちらのラッキー、幸運という意味の「幸せ」が使われます。でも、これは単に運がよかったということですよね。「しあわせ」の概念から、人との関係を深く配慮するということが抜けているんです。自分がハッピーだったらいい、自分だけがラッキーだったらいい、という感じになってきている。もともと日本人の「しあわせ」観の中には「仕」という字が入っていて、それが「仕事」ということに結びついていました。働くことに関して、「労働」を使うときと「仕事」を使うときでずいぶんイメージが違うということを、皆さんにまず理解してほしいと思います。

感情労働というのは、もちろん「労働」の方を使っていますから、どちらかという批判的なんです。労働組合とか労働運動というとき、どんなことがいわれたでしょうか？工場で一生懸命働く。でも、自分が作ったものが自分のものにはならない。給料もらって働いているわけです。つまり、賃労働です。賃労働というのは、資本家から労働者へお金が支払われる形ですね。

昔はどのようにしていたのでしょうか？賃労働でなかった時代は、魚を獲りにいくと、獲れた魚は自分のものでした。畑を耕すと、作物は自分のものです。家を建てるとそこに住んでいい。働くことはそもそも自分のために、自分の家族のためにする。働くことと自分とか離れていない。働くことが自分のしあわせと直結していたわけです。

ところが、近代資本主義になってから賃金が支払われるようになります。働いて得た何かと労働者が分離されてしまうわけです。自動車を考えてみてください。自動車を全部1人の人が作るわけじゃないですよね。何年自動車会社に勤めたとしても、1台の自動車そのものを作る能力は身につかない。昔の人は一からはじめるから、自分の労働が自分の技術になり、自分の元に返ってくるわけです。でも、「労働」といわれたとき、成果はすべて資本家、雇い主にとられてしまう。返ってくるのはお金だけです。お金のために働くようになった社会ですね。そこで働くことと働いている人が分離されてしまうことになりました。これを

「労働の自己疎外」といいます。疎外というのは仲間はずれにされているということです。自己疎外というのは、自分が一生懸命働いても、働いた成果が自分のものにはならないということを示しています。「これはおかしい」ということで、共産主義の運動だとか、労働運動といったことが登場してくるようになります。今は「給料をあげろ」といいます。もちろん、給料をあげたところで作ったものが自分のものになるわけではありませんが、現在のようにお金がすべてを支配している社会では簡単に自給自足には戻りませんので、こういう言い方になるわけです。ともあれ、「労働」という言葉が登場してきたとき、実はこういう考えが背後にあったわけです。

ですから、感情労働という言葉を使うときも背景にこういった批判があります。そもそも感情というのは、うれしかったり、悲しかったり、と人生のなかで湧き上がってくるもので、それが自分を豊かにしてくれる。でも、その感情が自分のために使われなくなっているのではないかという批判がひとつにはあるわけです。

先に述べたとおり、「労働」と「仕事」は違います。人々が「労働」という言葉を使うときには、苦しいこと——自分との関係がギスギスしてきた——を指しています。そのように使われてきました。介護を、「労働」と思うのか、「労働」という言葉では言い切ることにはできないものと思うのか。僕はそこらへんも考えてもらいたいのです。そういう形で考えないと、感情労働といわれたときにおかしなことになってしまいます。

評論家の長崎浩さんという方が「介護労働覚書」（『Bricolage』2010年11月号pp11-23）のなかで、「介護は社会的労働だ」とおっしゃっておられます。介護が賃金をもらってはたらく専門職である以上労働であるといわざるを得ないが、それは社会が必要とする社会的労働なんだと。でも、どんな形であれ労働という言い方をしてしまえば、常に「仕事」の部分は切り捨てられてしまう。だから、皆さんの日々の介護を「労働」だけで語るのではなく、そうでない「仕事」の部分、たとえば良い「仕事」がしたいと思うのかという部分についても考えておいた方がよいと思います。

### ●感情労働って何やねん？

というわけで、あらためて感情労働について考えてみましょう。肉体労働は、肉体の労働。重い物をあちからこちへ運ぶとか、トンカチを使うとか。筋力を使って行う労働ですね。頭脳労働は、書類作ったり、計算したり、頭がいい人しかできない労働ですね。なので、感情労働は心を使います。一番わかりやすいのは、マクドナルドのスマイル0円です。だいたい物を買うと、にっこり笑って「ありがとうございます」といってくれる。日本では当たり前ですが、中国とか旧ソ連とか社会主義の国では全然笑いません。にこりともしない。金もらって、物渡して終わりです。だって笑顔は別に必要ない。物を売っているだけ



で、サービスを売っているわけではない。でも、マクドナルドだったら、笑顔も商品なわけです。客を気持ちよくするためにですね。気持ちよくさせれば、次回も店にきてくれます。資本主義社会、自由主義社会は、競争社会ですからお客さんにたくさん来てもらうためにそうする。顧客の気持ちをつかむために笑顔をつくる。そしてそのことに関しては「我々はお代はいらない」といっている。でもそのために、従業員はうれしくなくても笑わなければならないわけです。

従業員のなかには、「今日亭主と喧嘩してきたし、財布は落とすし、ほんとおもしろいわ」という人もいるかもしれません。かといって、客がきたら、にっこり笑わなければいけない。ということは、自分の笑顔と素直な気持ちが分離することになります。労働で作ったものと労働者が切り離されているような形で、感情が疎外されている。このような批判がまずあったわけです。そして、このような感情労働を強いられるのが、顧客と顔を合わす対人サービスです。そのことを最初に言いはじめたのが、僕が「考える本のはなし2」の中で取り上げたホックシールドの『管理される心』（A.R.ホックシールド著 石川准・室伏亜希訳 世界思想社、2000.）です。

ちょっと横道にそれますが、神戸のファッション美術館に行ったときのことです。美術館にいくと、お土産がおいてありますよね。この美術館の場合は、りかちゃん人形がいろんな服を着たポストカードがたくさん販売されています。それをじいっと見ていると——みている僕も僕ですが（笑）——、そのなかに2人組のりかちゃん人形がナースとスチュワーデスの格好をしているカードがありました。ちょうど『管理される心』を読んでいたときだったので、これが非常に印象に残りました。

というのも、ホックシールドの本のなかで、まず話題にされているのが、スチュワーデス（客室乗務員）なんです。日本の航空会社のスチュワーデスさんでにこにこしてない人いますか？ 感じ悪い人いますか？ いないですよ。すごくやさしい良い感じの人ばかりです。でも、あの人たちがみんな良い人なのかといえばそんなことないでしょう。仕事だからですね。酔っ払い客に「おいっ」って言われて、「誰が『おい』やねん」と言い返すスチュワーデスはいません。笑顔で対応しなければならないわけです。僕は昔レストランで働いていたことありますが、客の1人に「おい」って言われて、「700円くらいでおいっていわれてたまるかい」って言いつつ、3日で首になったことがあります。感情労働できなかった（笑）。

それはともかく、この笑顔は演技なんです。演技にも「表層演技」と「深層演技」があります。要するに、上っ面の演技と深いところからの演技ということです。上っ面の演技をやりなさいといわれたら、給料高いからしょうがないなあ、と思えるかもしれません。たとえば、水商売は、にっこり笑う分給料が高い。めちゃくちゃ高い（笑）。それは笑顔でいい気持ちにさせてくれるからです。このとき、「この笑顔はうわべだから」と理屈では思えるか

もしれない。でも、「ひょっとしてオレに気があるんじゃないか、今度また来よう」と思わせるくらいの演技力の店じゃないとはやらない。だから店側は、「うわべだけの笑顔じゃ駄目だよ。心からの笑顔をみせなさい」と教育する。

さて、飛行機のスチュワーデスは、元々看護婦でした。空なんか飛んだこともなかった人間にとって飛行機は恐ろしいものです。体調も悪くなります。それに適切に対処できる人間としてナースが選ばれた。人をケアする職業として一番古いのは売春婦なのかもしれませんが、近代以降で考えると助産婦、看護婦でしょう。

スチュワーデス兼看護師は客にどのように対処するのでしょうか？たとえば、酒を飲んでごねている人がいるとします。それをみたときに彼女らは「この人は本当は怖いはずだ。その怖さを酒でまぎらわしている。だから子供みたいに駄々をこねているんだ」と思うわけです。だから「私はわかっている。だからやさしくしてあげる。だって、私は怖がっている人を助けてあげる役なんだから」となる。「しんどい」という人に、「うるさい」という看護師はいません。「あーしんどいですか」とわかってあげる。そういう教育を徹底的に受けてきているわけです。「この人はお酒で恐怖を紛らわしている。私を母のように思っただけで甘えている」という理屈をひとつ入れることによって、しばらく恐怖を受け止めて安心させてあげることがその人に対する一番のケアになると読むわけです。それで心からやさしくする。これが深層演技です。

### ●感情に規則があるんかい？

看護や介護に携わる人はそういう教育を受けています。「上っ面でやさしくしてあげる」のでは駄目なのです。「痛い、痛い」と訴えている人に、「早く死ねばいいのに」とはいえませんが。そんなことを思っただけではいけないということになっている。要するにケアする相手に対してマイナスの感情を持つてはいけないわけです。こういうのを「感情規則」といいます。

看護・介護に限った話ではありません。職場に来て上司に挨拶するときに、仮に上司のチャックが開いていたとしても大笑いしてはいけません。仕事に来たらまじめな顔をしないではいけません。葬式に行ったときでも同じです。まじめな顔をする。これらも感情規則です。人との関係をうまくやるために生み出してきた文化なんです。だから、感情のコントロールは日常生活の中でも行われています。それは人との関係を円滑にするために、育ってきた社会において小さいときから身についたものです。もっと身近な話をすれば、入った学校や会社において身につけていくことです。

でも、労働といったときには違います。そこには賃金があります。賃金のために感情のコントロールをすることになります。思い込んでしまえる人間はいいです。演技していることも忘れてそれ自体が理念になる。そうやれたらいいですが、どうしても我慢できない人はど

うなるか。そういう人は「私にはケアをする資格のない人間だ」と自分を責めるんです。そう教育されているのですから、それができなかつたときに「悪いのは私だ」となってしまう。悪くないんですけどね。でも、そうなってしまいがちです。

たとえば、認知症の患者にぼろくそにいわれる。物を投げられる。ぬれているオムツを替えようとしてたたかれる。腹が立つ。でも「この人は認知症だ。怒ってはいけない」と必死に思うわけです。そして、悔しくて涙がでる。限界がくる。そうなったら、「私には無理です」となってしまう。自分を責めてしまう。

感情をコントロールするより、きちんとオムツを替えてあげた方がいいのではないかといいるところにはなかなかいけない。徹底的に深層演技までするように教育されていますから。でも、この感情のコントロールは賃金に含まれていません。感情は無料だと思われるわけです。感情のコントロールも労働の内だっていってところで、感情には対価は払われません。社会学者ホックシールドが指摘したのはまさにこのことです。こういう形で労働者に対する搾取がはじまっていると述べたわけです。

#### ●介護は感情労働かいな？

看護・介護がしんどいのはそういうことかあって思いませんか？だから、はやったわけです。実は、ホックシールドはもともとスチュワーデスと借金取りについて言及しています。借金取りは、相手が気の毒だなあと思っても、仕事ですから相手に恐怖心を起こさせるために怒ったふりをしなければならない。今お話ししてきたのとは逆ですね。怒っていないのに怒る。ともかく、彼はいろんなタイプの感情労働があると述べた。そこから様々な研究者が刺激を受けて、たとえば看護学者パム・スミスが『感情労働としての看護』（ゆみる出版、2000）のなかで「看護・介護も感情労働なのではないか」と発表したわけです。

感情労働としての看護・介護というときに言われるのは、「怒っているのに笑顔をつくる」だけではありません。たとえば、担当の患者さんが亡くなる。悲しい。仕事が手につかない。そんなときは先輩に「泣くのは家族、あなたは看護師」と怒られるわけです。次の患者さんのところにいくときには笑顔じゃなければいけないといわれる。悲しいのに笑顔をつくらなくてはならないわけです。

こんな感じで、看護・介護を感情労働として分析するやり方が広がっていきました。日本では、日本赤十字看護大学の教授で精神看護の武井麻子さんが『感情と看護：人とかかわりを職業とすることの意味』（医学書院、2001）という本を書かれています。僕はこの人にもお会いしたことがあります。彼女が2006年に出した『ひと相手の仕事はなぜ疲れるのか：感情労働の時代』（大和書房、2006）あたりからちょっとついていけないような気がしています。それは僕が介護という仕事は労働という側面からだけでは語れないと思っている

からです。冒頭でも述べたように、「仕事」の側面があると思っているからです。それからもうひとつ思うことは、肉体労働、社会労働、感情労働とかいう言葉でキレイに分けようとするのは、学者がやりたがっているだけじゃないのかということです。

どんな仕事にだって、すべての労働の側面があります。工事現場の肉体労働者だって、もちろん穴だけを掘っているわけではありません。単純肉体労働というものをするときにとりだけの感情のコントロールが必要か想像に難くありません。頭脳労働だって同じです。体だって感情だって使わないとやっていけません。

わかりやすくするために、論理ですべてを切りわけるのが学問のやり方です。でも、このやり方では実際の現場で働いている人たちを無残に切り捨てているところがあるように僕は思います。だから現場から言い返さなければならない。

ちょっとお勉強して、「ほー、介護は感情労働だったんか」というところで終わっては駄目です。自分たちに対して言われていることに、自分たちが現場で考えている言葉で言い返していく。そのことが大事です。

感情労働は確かに介護のつらさを理屈にはしてくれた。それは確かにあります。でも、それを現場の人間が聞いたからといってどうなるのでしょうか。現在は頭脳労働に価値が置かれているところがありますから、たとえば、肉体労働がつらいから頭脳労働を目指すっていうのと同じように、感情労働がつらいから頭脳労働を目指すということになりかねない。感情労働って名づけられたとたんに、自分の仕事に対して喜びや誇りがもちにくくなります。

### ●身体（からだ）で考えてみたらどないやねん？

感情労働といわないとすれば、どのように考えればいいのでしょうか？僕は、グレイスヴィルでの砂連尾理さんのワークショップをみて、あらためて労働は頭脳だけでやっているのではなく、筋肉だけでやっているのではなく、「身体（からだ）」でやっているということを感じました。「身体（からだ）」というと「肉体」と混乱しやすいから、これを「身体（しんたい）」と読む人もいます。頭脳でも、肉体でも、感情でもわけられないものです。

西洋から入ってきた学問の一番根本にあるものは「心と体は違う」（心身二元論）ということです。だからこそ、肉体労働と頭脳労働とがわかることができるようになります。でも、「身体」（※以降「身体」を「からだ」と読みましょう!!）というときの「身」は、心だけでなく肉体だけでもなく、そのどちらも兼ね備えたものです。そういう豊かな意味をもった言葉です。介護では必ず身体と身体が出会います。触れ合うわけです。ちゃんと相手の顔をみて、自分の顔をみせてやらなければならない。そういう身体の関係でやる仕事なんです。僕は肉体ではなく身体という関係について考えてみようと思っているのです。我が身であったり、人の身であったりになってみようというわけです。

そもそも感情とは何か？相手の気持ち、自分の気持ちを考えないで介護はできません。身体や頭脳は寝ればある程度回復するかもしれない。でも気持ちの問題は回復しません。今、鬱の時代といわれていて、年間3万人自殺しています。その理由にはもちろんいろいろありますが、多くの方は感情の処理ができず、他人に対する攻撃性、自分に対する攻撃性をコントロールできなくなっています。

実は感情というものは人から補給するしかありません。自己回復しないのです。アフリカのブッシュマンの研究をされている人類学者の菅原和孝さんが『感情の猿=人』（弘文堂、2002）の中で、感情を個人の中にあるものと考えたらいけないと述べています。感情は人と人との間でやり取りする、贈与しあうものだというわけです。これを子供の発達心理で考えてみましょう。

赤ちゃんがぐずっているとします。お母さんは「いないいないばあ」とかやったりしますよね。「どうしたんですか？」とはいわないですよ（笑）。要するに表情で感情を表すわけです。では、表情はどうやって身につけるのでしょうか？自分の顔って自分では直接みることができない。にもかかわらず、たとえば自分の笑い顔は他人のそれとそんなに変わらないとおもっていますよね。自分の顔を確認してもないのに、ちゃんと笑っているつもりでいる。

人は実は確認のしようもない自分の顔をさらけ出して生きているわけです。だから、写真とかに撮られると他人の顔はいつもどおりにみえるのに、自分の顔だけ変にみえたりする。「こんな顔じゃないわあ」ってな感じになります。鏡でみるときは顔を作っていますから、一番いい顔なわけです（笑）。油断した顔はなかなかみることができません。

表情というのは、母子関係のなかから探ります。お母さんは赤ちゃんがうれしそうだなという時に「あらーうれしいねえ」とうれしい表情をします。お母さんは赤ちゃんの表情をよりおおげさにして返す。うれしいときにはこんな顔するのよと教えている。子供は母の表情からだんだん学んでいくわけです。お母さんから返された表情が赤ちゃんの顔に住みつくんです。このように、表情、そして感情というものは人から与えられたものなのです。

感情労働論で問題なのは、感情というものが自分の中にしかないという考え方です。確かに心は名刺のようにみせることはできません。心はみえないし、みせることができないというのが当たり前になっています。でも、僕の師匠の鷺田清一さんは「心はみえる」とおっしゃっています。どこにみえるのでしょうか？

### ●心はみえるもんかいな？

実は心はふるまいや表情の中にみえるのです。先ほどの母子関係のように表情はみえるものとして与えられます。泣いている人をみたら、「なぜ泣いているんだ」とすぐ思う。悲し

い感情を伝えるために、相手が顔の筋肉やら涙腺を使って泣き顔を作っているとは思いません。私たちはふるまいのなかに人の心を読み取っているわけです。自分の心もみせられないと思っていますが、実は自分のふるまいの中に全部出ている。だからこそ礼儀作法というのがあります。ふるまいが形を決めるわけです。それによって、みえないと思われている心が他人と交換できるようになる。これは人間の社会関係なんていう大仰なものではなく、母子関係がある哺乳類の中に普通にみられるものです。人との関係のなかで自分を作り上げていくのであって、自分だけでは自分を作り上げることはできません。感情労働論のなかでも「ほんとうの『私』がなくなる」という言い方をしますが、この「私」は自己完結したものではない。「私」というのは、まだ自分というものがなかったときに母子関係において喜び方、悲しみ方といった心を与えられてできたものです。生まれたときには「私」でも、「私でないもの」でもないんです。様々なものを与えられて、徐々に「私」の個性がでてきて年老いていく。「私」は「私」として生まれて「私」として死ぬわけではないのです。「私」になって、「私」をほどいていくわけです。そういう意味で心はみえるといえます。この「みえる」が私が先ほどいった「身体（からだ）」なのです。

感情を自分の所有物のように扱うのではなく、もう一度自分の身体として認識しなおす。僕たちはなかなかこれできません。僕は今立って話しているときに、立っている足の裏の感覚ってありません。あるけどない。幽霊みたいなものです。たまにイライラして貧乏ゆすりしたりします。そのとき、僕の感情はそのときの足の動きにあります。でもそのことへの自覚はありません。自分の身体を自分でしっかり理解するというのは難しいのです。いくら話し合ってみたとしてもなかなか気づけない。だから砂連尾さんのワークショップみたいに五感をはたらかして、感情だとか介護について考えてみるのが極めて大事なんだと思います。

先ほど、介護の現場では必ず身体と身体がふれあうといいましたが、これだっているいろいろ考えられます。おそらくまず声をかけるわけですが、声だって身体です。声帯を震わせて空気を振動させて相手の鼓膜を震わせます。指一本触れなくても、身体のふれあいなんです。そういう「身体（からだ）性」にもっともっと敏感になっていったときに、感情労働なんて言葉で表現する以上に、介護がどれだけの可能性を持った世界であるか気づくことになります。もっとも身体と身体とが向き合う仕事のひとつが介護です。そんなすばらしい介護という仕事を感情労働なんて言葉で語らせない気構えで、身体に対する感性を高めて、表現する言葉を身につけるともっともっとおもしろくなってくのではないのでしょうか。というわけで、今日はこの辺にしておきましょう。

## 4. 笑う舞鶴

### 4.1 とまどいに向き合う ～その先にあるもの～ (淡路由紀子)

#### 4.1.1 初めのとまどい / ダンサーの発するメッセージ

2009年11月7日「踊りに行くぜ!」という公演会に来ませんか、と誘われた。舞鶴にある赤れんが倉庫群の中で、コンテンポラリーダンスの公演があるという。NPO法人赤煉瓦倶楽部舞鶴のメンバーである友人の話聞きながら「ふーん」「へえー」と曖昧な返事をしつつ(あんなね、福祉の現場、高齢者介護の現状がわかっていますか?アートとかコンテンポラリーとか、よくは知りませんが、今はね、そんな悠長な話をしていられるご時世じゃないかもね!)と思いつつ、それほど言うならと会場に行ってみた。

1000円という激安の入場料を払って薄暗い赤れんが倉庫に足を踏み入れ、プログラムを読んで分かったことは、〈危険ですので、暗転中は動かないください。〉という一文だけで、これだからゼンエイゲイジュツには付いていけそうもなく、途中で退屈したらどうしようか考えながら観客席のないガランとした倉庫の端に立っているうちに、パッと明りが消え、それは始まった。

倉庫の闇としまの中にいるうちに、全身の感覚が鋭くなったような気がした。やがて、ぼんやりと照明が灯りはじめた中に見えたものは、ダンサーではなく、強烈なメッセージを発する何か巨大な塊のようなものだった。メッセージの内容は全く理解できなかったが、そのパワーはとにかく圧倒的で、半ば強制的にコミュニケーションを求められている感じだったので「ちょっと、覗いてやるか。」と呑気に構えていた私は、明らかに不意を突かれ慌てた。

「何だ、この人達は? これがダンス? ダンスって何???」ゲイジュツと言ったって岡本太郎みたいに作品を残すわけでもなく有名でもない。要するにアーティストと名乗ってはいるが、自己満足を押しつけているだけじゃないのか、と不意を突かれた悔しさで一瞬、あきれた感で片付けようとしたが、あっという間にそのダンスらしきものに引き込まれてしまった。

何故こんなに一生懸命になれるのか?もしかしたら、今の世の中に必要なのはこういう力なのではないか。目の前で起きていることはいつしか驚きを通り超え、どこかでパッと希望の光が射した様なこれまでにない可能性のようなものを感じ、全てのダンスが終わる頃には、ものすごく興奮している自分に気が付いた。

#### 4.1.2 2つ目のとまどい/アーティストとの出会い、出会いの方法

公演からほどなく、縁あってまいづるRBの森 真理子さん、そしてコンテンポラリーダンスの砂連尾 理さんを紹介された。「舞鶴の子供やお年寄りと一緒に作品を創り、発表することができないか。」ということで市内を巡り、最後に特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるに来られた。ジャレオ？それって本名？名前を聞いた時は、いかにもそれっぽい特別の名前だと思ったが、会ってみると礼儀正しい穏やかな普通の人だった。

ところでお年寄りに会いたいと言われても「もしも企画に協力できるような人がおられるとしたら…」と、要支援、要介護1、2という比較的要介護度の軽いご利用者が多い2階フロアにあるデイサービスに案内することにした。

ご利用者がどんな反応かなと思っていたら、背が高くハンサム、その上好青年の砂連尾さんは思った通りみんなに歓迎され、そのままデイサービスでダンスワークショップがはじまった。

砂連尾さんがどんなワークショップをされるのか気になって毎回見ていたが、デイルームで輪になって集まってくれたお年寄りの中で、砂連尾さんは「レクリエーションの先生」になっていた。デイサービスのスタッフにとって、施設長が突然デイルームに招いたダンサーと自分たちがどういってお付き合いをするべきか考えた末「レクリエーションの専門家」にしてしまうのが一番楽なお付き合いのようだった。

ワークショップが実際どういうものか私もよく知らなかったが、いつもお年寄りの輪の中心にいないといけない砂連尾さんご利用者の距離はなかなか縮まりそうになく、これはちょっとイメージから外れ出したのではないかと言う気がしていた。

「このままで何か作品ができそうですか？」何度目かのワークショップが終わった時、余計なお世話と思いつつ、ディレクターの森さん、アーティストの砂連尾さんの立場が心配になってきた。ところが森さんは、企画・制作の責任者でありながら、それほど焦っている様子が見えないのが不思議だった。アート系の人は大らかなのか、もしかするといい加減なのか、ますます「この人達、大丈夫かしら。」と心配になったが、あれこれ喋っているうちに、では、次のワークショップは、まだ出会っていない特養のお年寄りに紹介なしで会ってみようか、ということになり、次回は1階フロアでワークショップを試みることになった。

特養は平均介護度4以上、障害高齢者の自立度、認知症高齢者自立度も非常に重度の方が多く、デイサービスのように砂連尾さんが歓迎されるかどうかはわからなかったが、砂連尾さんは、出会ったお年寄りと挨拶を交わした。そして、言葉を交わしながら徐々に、身振り、手振り…ダンスでのコミュニケーションを試み始め、そうしているうちに伊藤さんとミユキさん、そして谷口さんと出会った。

伊藤さんはサービス精神にあふれる男性で、自ら進んで得意の社交ダンスのステップを披



露したりしながら、砂連尾さんと相当親しくなっているように見えた。ミユキさんは砂連尾さんが来るたび「どうしたん?」「あらあら・・・。」と、少々困惑しながらも、まるでかわいい孫か息子か、もしかしたら恋人と付き合うように、とても穏やかに砂連尾さんと過ごしていた。谷口さんは、やがて砂連尾さんを先生と呼ぶようになり、私たちが持ち込んだ「ダンスを発表する計画」に一生懸命お付き合いしてくれるようになった。ワークショップは4人で揃って始まることもあれば、砂連尾さんと1対1の時もあり、また、時折別の入居者が加わることもあったが、砂連尾さんと伊藤さん、ミユキさん、谷口さんが出会いを重ねる様子をワークショップと呼んでいいんだな、と思えるようになった。

砂連尾さんが手ごたえを感じ始め、ワークショップも順調に進んでいるように思えたある日のことだった。伊藤さんが自分の目の前で黙ったまま妙な動きを始めた砂連尾さんを見て「アンタ、アンタは何をするために来とるんや!」「何?ダンス?ダンスを教えるに来とるんか?それやったら、時間はいつ、これをします!とか、やり方があるだろ!」「アンタのやっていることは、ダンスじゃない!」と激怒したことがあった。

伊藤さんは砂連尾さんが謝るのも、私がとりなすのも聞かずに、くると背を向けてスタスタと自分の部屋に帰ってしまった。「今日はどうしたことか、機嫌が悪かったですね。」という私に、砂連尾さんは「身体で伝えようとするあまり、言葉をおろそかにしていました」と反省していた。伊藤さんは、あんなに楽しそうだったのに以後、ワークショップに加わろうとされなくなった。

#### 4.1.3 3つ目のとまどい / とまどいの宝庫「とつとつダンス」

2010年3月7日、とうとうその日が来た。そもそもワークショップはグレイスの中だったので、何の心配もいらなかったが、公演会は全く環境の違う赤れんが倉庫で行われる。リハーサルはまいづるRBのメンバーやグレイスのスタッフなど今では身内とよべるような人だけだったので、いつものワークショップを見ているようだったけれど、本番は当たり前がお客さんが入る。そんな中で普段通りに事が運ぶのだろうか、伊藤さんはあの日までのワークショップの記録、映像での出演になったので心配なかったけれど、もし、谷口さん、ミユキさんが少しでも落ち着かなくなったら、みんなには申し訳ないけれど、公演などキャンセルしてグレイスに戻るつもりだった。

けれど、それは取り越し苦労に終わった。谷口さんとミユキさんは、私が衝撃を受けたあのコンテンポラリーダンサーと同じパフォーマーに変貌されていた。

砂連尾さん、他の出演者とともに舞台にいるお二人も明らかに何かを伝え始めた、いや何かが伝わり始めたという方が正しいのかもしれないが、いとも簡単にパフォーマーになってしまったお二人の様子を見て言葉ではうまく言えないが、とにかく胸が熱くなった。

そう言えば、取り越し苦労だったことがもう1つ。公演会が終わり、お二人にいつもの日々が戻ってきた時、「舞台に立つ」と言う自覚はそれぞれ違ったかもしれないけれど、それでも、いつもと違う所で1日を過ごしたことで、お二人が相当疲れているのではないか、もしかしたら、後になってドッと疲れが出て、いわゆる「体調不良」になられるのではないかと心配したが、公演会の翌日も、その翌日も、結局その後ずっと何事もなかったかのように、いつもの谷口さんとミュキさんだった。あんなにオーラを放っていたお二人だったが、どちらも全く消費されていなかった。

#### 4.1.4 4つ目のとまどい / 理由を説明するのは難しい。

ワークショップから公演会まで1つの事業が無事に終了してホッとしたが、はじめから終わりまで「とまどい」だらけで、数々の謎を残したこの数カ月間の出来事をこのままほったらかして去って行かれるのは困ると思い、本当は半分以上、自分のためだったが「お年寄りのために続けてもらえますか」と砂連尾さんに持ちかけた。

ありがたいことに、砂連尾さんの方もグレイスのお年寄りと「また、会いましょう。」と、あてのない別れをするのは寂しいと感じてくれていたようで、そのままダンスワークショップを続けてもらう話がすぐにまとまった。

2010年6月、砂連尾さんが再び来てくれるようになり、そのうちまいづるRBのスタッフだった文化人類学の研究者である豊平 豪さんが「文化人類学カフェ」を開いてくれることになった。そして「とつとつダンス」のアフタートークのパネリストだった西川 勝先生にも「とつとつ勉強会」を開いていただけることになった。

砂連尾さん、豊平さん、西川先生といろんな人に来てもらえることになったので、せっかくだからお年寄りや職員はもちろん、そのほか誰でも自由に参加してもらえたらいいと思ってはいたが「いったい何のためにやっているのですか？」と聞かれたら「楽しいから」としか言いようがなかった。

本当は目的もあるし、理由もあるのだけれど、モンモンとした状態に変わりはないので、例えば職員に「日々の仕事に何か役に立つのですか？」と言われようものなら、かなりあせったと思うが、幸いなるかな、そういう質問はなく、「シリーズとつとつ」と名付けたこのダンスワークショップやカフェ、勉強会を楽しみにしてくれる職員が数名いてくれた。

#### 4.1.5 最後に 特別養護老人ホームというところ

特別養護老人ホームグレイスヴィルまいづるは2005年4月に開設した。特別養護老人ホームと言うくらいだから、誰にでもわかる高齢者介護のための施設なのだが、名前にあるグレイスヴィルはグレイス村と言う意味で、グレイスには私たちが理想とする特養、例えば優し

い場所、温かい場所、素敵なお場所でありたいといった様々な思いを込めており、そこにわざわざ付け加えた「村」には、人の暮らし・営みとともに、人との出会いがある場所でありたい、業界的に言うと「地域に開かれた福祉施設」「地域ケアの拠点施設」みたいな思いを込めていた。いつでも誰でも気軽に来てもらえるように、そう言う思いもあって正面エントランスの看板には、「特別養護老人ホーム」という表示はなく、ただ「グレイスヴィルまいづる」としか記していない。

グレイスは、いつしかお年寄りやご家族だけでなく、地域の子供たちやボランティアさんにもたくさん来ていただける場所になり、思い描いた交流や出会いのある活気あふれる賑やかな「ぐれいす村」としてどんどん楽しくなりそうだった。

けれど、現場では、その盛り上がりとは別に、特養として一定のレベルに達した感が漂いはじめ、それは開設以後のバタバタが落ち着いて来たという見方もできたが、どこかで何か失われつつあるのではないか、という危なげな感覚が振り払えずにいた。

「踊りに行くぜ!」を見たのは開設からちょうど5年になろうとするそんな頃であり、その頃の私は、介護に関わる人の「感性」はどうやって育まれるのか、どうすれば磨かれるのか、と言う事について、何の手掛かりも得られずかなり行き詰った気分になっていた。

この業界は技術や知識を磨く場所はたくさんあるのだけれど、どうも「感性」を磨く場所が見当たらない。介護の現場で働く人は、そもそも志がある、介護や福祉に情熱を持った特別な人達ばかりなので、そう言う部分は今まで必要とされなかったのかもしれないが、一方で、最近では、そんな熱い人たちの離職に歯止めがかからない、あるいは、介護現場を目指す人が極端に少なくなっているという現実があった。

特養は間違いなく高齢者介護の専門施設だが、乱暴な言い方をすれば、そこで働く私たちは、自身がまだ一度も体験したことのない、しかし、いつかは必ず体験するはずの「老い」と、そして体験するかもしれない「老いにとまなう様々な事」例えば「認知症」について、想像をめぐらしながら働いていた。

想像をめぐらすためには、各自の「感性」がとても大切なはずで、それは時に仕事の「やりがい」を大きく左右するにもかかわらず、その大事な部分は、志や思いやりと言った適当な言葉で簡単に片付けられている様な気がしてならなかった。

このまま「感性」が育まれなければ、磨かれなければ、どんなに志を持った人でも、いつか感情労働に陥り、身を擦り減らし、疲れ果て、ヘタをすると現場を去っていくのではないかと思いつつも、「感性」はそもそも持って生まれた資質か才能が影響しており、育むとか磨くとかいうものではないのかもしれない、どうすればいいのか頭の中で堂々巡りするばかり

だった。

そんな時、縁あって「とつとつダンス」が生まれ、「とまどい」に出会い、その後「とつとつダンス」で出会った方々と「シリーズとつとつ」を始めることが出来て「とまどい」について考える機会ができた。初めて会う人、初めての体験は「とまどい」を意識しやすかったのかもしれない。

けれど、よくよく考えてみると、「とつとつダンス」は、紛れもなくこのグレイスでの出来事であり、実は「とまどい」のいくつかは、ずっと目の前にあったはずだった。

そこで、もうちょっとじっくり振り返ってみると、開設したばかりの頃、私も職員も、何かがある度に、もっといちいち驚いていたし、慌てている感があったような気がしたが、いつの間にか、専門施設、専門職という名前があるがゆえに、そう言う事がだんだん失われていったような、特養の中には「とまどい」など、もともと存在しないかのようにどんどん「とまどい」を遠ざけていたのかもしれない。

「とつとつダンス」のおかげで、「とまどい」に再び出会う事ができ、「とつとつシリーズ」によって、「とまどい」は遠ざけるものではなく、むしろ大事にしなければならないものだと思えた。

そして、これから、この「とまどい」に向き合っていくことができれば、もしかすると言葉によらないコミュニケーションがどんな力を持っているのか、そんな事がわかる日が来るかもしれないし、ひょっとするとそれが「感性」を磨く手がかりになるかもしれない。

いつか、そんな日が来るまで、グレイスヴィルまいづるの「シリーズとつとつ」は終わらない、と言うより終わりたくないし、さらに出会いを重ねて変貌するかもしれない、と思うと、どこまでもいつまでも終わりはないかもしれない、と思い始めている。

## 4.2 笑う舞鶴 (西川勝)

本稿の共著者が集まって、いろんなアイデアを出し合ったときに、実践報告として投稿することはすぐに決まった。そして、副題である「シリーズとつとつ」実践報告という案も全員が一致できた。しかし、肝心の本テーマに関するアイデアが、なかなか出てこなかった。あれこれ考えても、すっかりした提案ができそうにないと、みな表情が告白していた。そのうえで、誰が言うともなく「笑う舞鶴」ということばに落ち着いた。なぜ、こんなテーマが出てきたのか不思議だが、なにしろ「笑う舞鶴」ということばを口にするだけで、その場にいたみんなの気分が軽くなり、明るい笑い声さえ出てくるのだから、これで決まりということになった。悩んだ末にしては、あっけない結論だった。

「笑う舞鶴」を説明することは難しい。ここには理屈やことばで共有できる明確な考えは

ない。しかし、「シリーズとつとつ」に関わった全員が一緒に笑えたということが大切なのだ。

まいづるRBが企画した「とつとつダンス」に共著者たちは、それぞれの興味関心とそれぞれの目的や意図をもって関わりはじめた。あるひとつの目的に対して、あらかじめ綿密に計画されたアイデアに基づき、それぞれの役割を分担して組織だった実践を行ったわけではない。

まいづるRBは、舞鶴という地域の資源を活かし「地域の文化力」を育むために、市民がネットワークを結びながら豊かな地域社会の実現を目指すアートプロジェクトを展開している。その活動のひとつとして砂連尾さんの「とつとつダンス」が企画された。砂連尾さんはダンサー・振付家として、舞台作品だけでなく近年はソロ活動を展開し、障がいを持つ人や老人との作品制作やワークショップを手がける等、ジャンルの越境、文脈を横断する活動を行っている。ダンスの可能性をさらに追求するために、ダンスと社会の新しい関係を模索する過程で「とつとつダンス」に取り組むことになった。特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」は、「共に暮らし、共に考え、共に感動し、共に働く」をモットーに、施設関係者以外の人が気軽に立ち寄れる場所としての施設運営を目指している。施設長の淡路さんは長く舞鶴市に勤めた経験から「まちづくり」の観点を、高齢者介護の背景に取り入れることに意欲的であった。介護を「地域で共に生きる」という意味で豊かにしようとする理念から「シリーズとつとつ」の強力な推進者の役割を引き受けている。豊平豪は、まいづるRBの活動に関与しながら、舞鶴在住の人類学者として異文化理解の具体例を紹介しながら参加者と対話を楽しむカフェ活動を始めた。大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの西川は、コミュニティにおける新しいコミュニケーション回路を構想する「高齢社会プロジェクト」の一環として調査研究を舞鶴で開始した。特に「シリーズとつとつ」は、ケアとアートの協働が認知症ケアに身体コミュニケーションという新しい領域を切り拓きつつあること、さらに特別養護老人ホームが拠点となって地域の住民を多様な活動に巻き込んでいる点に注目した。

それぞれに異なる出発点を持つ活動が「シリーズとつとつ」へと統合されていく過程を支えたエネルギーは何であったのか、まだ十分に明らかにすることはできない。

はじめから笑いがあったわけではない。まだ何が起きるのかもわからないまま、舞鶴の片隅でとつとつとした動きが生まれていただけであった。とつ、とつ、とつとつ。不連続のような連続のような、しばらく耳をすましていないと聞こえてこない音のつながりが、やがて小さな笑いを誘い出し、その笑いの輪が静かに広がり、うねりはじめて賑やかさを増していく。気がつけば、とつとつは素敵なりズムでみんなを笑いの世界に連れ出していた。見知らぬ者同士でさえも共に笑いを交歓できる状況が切り拓かれてきた。

特別養護老人ホームとダンサーを結びつけた舞鶴での活動は、アートの糸とケアの糸に地

域の糸を撚り合わせてカタンコットンと廻る糸車のようになって、身体と言葉があやなす不思議な色の糸を紡ぎ続けている。

●まいづる RB ホームページ

<http://maizuru-RB.jp/index.html>

●砂連尾理ホームページ

<http://www.osamujareo.com/>

●特別養護老人ホーム「グレイスヴィルまいづる」ホームページ

<http://gracemaizuru.com/default.aspx>



## 「現場力」ノオト（2012年・春）

西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部）

大村佳代子（大阪大学大学院医学系研究科・博士後期課程）

中原京子（大阪大学大学院言語文化研究科・博士後期課程）

河合 翔（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

野島那津子（大阪大学大学院人間科学研究科・博士後期課程）

山森裕毅（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD、招へい研究員）

本間直樹（大阪大学CSCD / 大阪大学大学院文学研究科）

岡野彩子（大阪大学CSCD、招へい研究員）

宮本友介（大阪大学CSCD / 大阪大学大学院人間科学研究科）

安田伸行（介護職）

上條美代子（看護師）

西川勝（大阪大学CSCD）

### “Genba-Ryoku” Note (Spring 2012)

Yumi Nishimura (Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University)

Kayoko Omura (Graduate School of Medicine, Osaka University)

Kyoko Nakahara (Graduate School of Language and Culture, Osaka University)

Sho Kawai (Graduate school of Human sciences, Osaka University)

Natsuko Nojima (Graduate school of Human sciences, Osaka University)

Yuki Yamamori (Visiting Researcher, Center for the Study of Communication-Design: CSCD, Osaka University)

Naoki Homma (CSCD / Graduate School of Letters, Osaka University)

Ayako Okano (Visiting Researcher, CSCD, Osaka University)

Yusuke Miyamoto (CSCD/ Graduate school of Human sciences, Osaka University)

Nobuyuki Yasuda (Caregiver)

Miyoko Kamijo (Nurse)

Masaru Nishikawa (CSCD, Osaka University)

「現場力研究会」は、2012年2月末までの約6年間に、128回開催された。「『現場力』ノオト（2012年・春）」は、2011年度の後半に開催した研究会での議論、及びこの研究会と接続しているコミュニケーションデザイン科目「現場力と実践知」での議論をもとに、参加者一人ひとりが関与している多様な「現場」、そこでの出来事や経験、その場の特徴、テーマなどを理解するための「ことば」を取り上げたものである。本稿では、16編の気になる現場の事象やその論点を紹介する。

#### キーワード

現場力、参加、経験

Genba-Ryoku (Empowerment faculty and sensibility in practice), participants, experiences



## まえがき

私たちは自身の身体を通して、ある場に参加をしてそこを現場とし、またその現場を形作りつつ変容させ、自らもそれに支えられて変化している。この営みの多くは、既に習慣化されており、自覚したり注意を向けたりすることが難しい。しかし、その習慣の中には、私たちの様々な実践を成り立たせている「知」が埋め込まれている。

「現場力研究会」では、私たちが現場と名づける場での出来事や、その現場に参加する者たちが自明視していることを、参加者たちとの議論を通して捉え直し、これまでとは違った理解や意味づけを試みている。また、この研究会の議論の延長線上には、コミュニケーションデザイン科目「現場力と実践知」が置かれている。この科目では、ダンサーによる身体ワークショップなども試みられ、参加者たちは自らの身体を通して経験したことを言語化し、そこで起こっていることを多様な角度から議論して、習慣化された営みの開示を目指している。いずれの場においても参加者たちのコメントは新鮮であり、それに驚き、楽しむことが、私たちが現場の「知」の発掘へと促している。

こうした試みである「現場力研究会」は、2012年2月末で128回を数える。「『現場力』ノオト」は、この研究会での議論をもとに、私たちが暮らす多種多様な現場の営みや概念を、一人ひとりの参加者がじっくり考えて綴った「ノオト」である。既に、「『現場力』研究術語集」として『Communication-Design』の0～2号（西村他 [2007] [2008] [2009]）に26の術語を、4、5、6号の「『現場力』ノオト」（西村 [2011a] [2011b] [2012]）には22のことばを紹介してきた。

本稿では、2011年度後半の研究会における議論や、これらの議論に関連して参加者が関心をもった現場の営みから編み出された、16編の気になる現場の事象やことば、その論点を紹介する。この半年間、幾人もの新メンバーが加わり、彼らによる新たな論文から多くの「知」を発掘してきた。同時に、この研究会を主宰するコミュニケーションデザイン・センターを去る者もいる。彼らの「残していく」言葉が波紋のように研究会の議論を包んでもいた。こうした出来事も、この「ノオト」の下地となっている。ここで紹介した「ことば」が、現場において使用されつつ吟味され、同時に現場に組み込まれていくことを期待したい。

## 引用文献

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・鳥海直美・池田光穂・伊藤京子・工藤直志・西川勝・仲谷美江・渥美公秀（2007）「『現場力』研究術語集」『Communication-Design 2006』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：215-229.

西村ユミ・本間直樹・志賀玲子・池田光穂・工藤直志・高橋綾・仲谷美江・山崎吾郎・西川勝（2008）「『現場力』研究術語集（第2報）」『Communication-Design 1』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：203-216.

西村ユミ・志賀玲子・池田光穂・山崎吾郎・仲谷美江・本間直樹・高橋綾・菅磨志穂・西川勝・松本篤（2009）「『現場力』研究術語集（第3報）」『Communication-Design 2』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：189-201.

西村ユミ・西川勝・池田光穂・高橋綾・榎本直樹・本間直樹・安田伸行・小林恭（2011a）「『現場力』ノオト（2010年・秋）」『Communication-Design 4』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：87-100.

西村ユミ・小林恭・安田伸行・岡野彩子・池田光穂・榎本直樹・本間直樹・西川勝・上條美代子・高橋綾（2011b）「『現場力』ノオト（2011・春）」『Communication-Design 5』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：81-93.

西村ユミ・小林恭・中原京子・池田光穂・榎本直樹・本間直樹・上條美代子・西川勝・岡野彩子・高橋綾（2012）「『現場力』ノオト（2011・秋）」『Communication-Design 6』大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：103-117.

（西村ユミ）

# 1. 「私」への気付きと恐怖心

「現場力と実践知」という授業で参加したワークショップで、「我々の動きは言葉に縛られている」というコメントから、コンテキストと呼ばれる非言語的なメッセージに比べ、言語化できる範囲の小ささを感じた。確かに言葉があると、言葉通りに行動したり考えたり見たり聞いたりする。私の脳は言葉通りではないものを言葉通りに当てはめたり、言葉通りではない部分に「重要でない」というレッテルを勝手に貼り、消去したりしてしまう。それに気付いたとき、看護師として知識を詰め込んだ分だけ、見えなくなるものも増えているのではないかという恐怖心が私を襲った。看護の質を左右するのは科学的根拠だけでなく、その使い手である「私」が負う責任も大きい。知識でカバー出来ない無知が存在するのだ。

「現場力と実践知」の授業は毎回自由な雰囲気で行われる。議論の目的も、様々な意見が出るように開かれた目的であることが多い。反面、受講している側は授業のねらいが自分たちに計り知れないことを悟ると、その自由さはたちまち不安となり、どの方向に進めば良いのか、何が答えなのか分からなくなって苦痛さえ感じる場合もある。しかし、私はそれがリアルな「現場」でもあると思う。

医療現場においては、疾病予防・早期発見のためにスクリーニングや検診システムが整っている。現代医療は統計データをもとに未来の疾患発生を先取りし、健康なうちから健康管理をする。これは現代社会が「リスク社会」(樫田 [2011])として変化してきたことの、医療の現場における一様相と言える。またHIV感染症など、従来は長期生存が望めなかった疾患に有効な治療法が開発されるなかで、病いの意味も急速に変化してきている。

このように日々変化する臨床現場では、諸科学に基づきながら、現行の科学の枠では説明できない現象にも、果敢に知的探究心を向けていく力が必要とされている。私の場合、「現場力と実践知」の授業という答えのない不安や苦痛の中で得た、私自身への気付きや自分の無知への恐怖心が、そうした現場力を考える上でのヒントになっている。従ってこの諸問題の新たな解決法としての可能性を秘めた、「現場力と実践知」の授業の意義は大きい。来年もまた新たな「現場力」に出会い続けたい。

## 引用文献

樫田美雄 (2011) 「医療の社会学」 藤村正之 (編) 『いのちとライフコースの社会学』 弘文堂 : 12-27.

(大村佳代子)

## 2.

テキスト イメージ  
本文と挿絵

オスカー・ワイルドは1893年に『サロメ』を著し、19世紀末の退廃を具現する代表的な作家とされる。『サロメ』は聖書を題材にした戯曲であるが、彼の独創的着想とはいえない。当時はキリスト教的道德観の束縛を離れ、新しい文芸を興そうという機運から聖書や伝説、ギリシャ神話に題材をとった作品が多く生まれた時代だった。

彼の作品に童話『幸福な王子』（1888）がある。銅像の王子が一羽のツバメに頼み、貧しい民に自分を装飾する金箔や宝石をすべて分け与え、最後にはボロボロの姿になり果てる—キリスト教的自己犠牲を行う主人公の話である。ワイルドの作品の根底にキリスト教の教義が重奏低音のように流れていることは、これをみる限り否定はできない。

彼が「退廃した世紀末の作家」という冠を頂いた理由の1つは、本国イギリスでのサロンに出入りした時の奇抜な服装と奇行と弁舌に加え、年下の青年と男色関係にあることを暴露され投獄されたことにある。

出所後フランスに渡った彼は、創作活動の場をそこに求め、戯曲『サロメ』を発表したが、終生冠を頂くもう1つの理由になる大きな事件が起こる。

『サロメ』の挿絵を当時新進気鋭の挿絵画家オーブリー・ビアズリーが担当したが、ビアズリーは本筋を全く無視した独特の退廃した挿絵を描く。ワイルドは激怒して出版元に撤回させようとするも叶わず、ビアズリーと険悪な仲となる。この本が後世に残り、ビアズリーの挿絵がワイルドの本文の評価を凌駕するほどの強いイメージを人々の脳裏に焼き付けた。

オスカー・ワイルドは、奇行と奇抜な服装の作家が男色スキャンダルで投獄されたことからくる往時の人々のイメージと、戯曲『サロメ』に付されたビアズリーの挿絵から、往時から現在までの人々が受けたイメージと、この2つのイメージにより「退廃した世紀末の代表作家」と評価される、作品自体に真の価値を見出されない悲劇の作家といっても過言でない。

このようにエピソードの「細部」を注意深くみていくと、真実に目を開かせる何かが潜んでいることがある。現場での観察力・洞察力もまた、絶え間ないエピソードの細部との交信から培われるものであろう。本文と挿絵がもともと違っていたということは、現実において得ることだから。

## 参考文献

玉井暉（1999）『『サロメ』とヴィクトリア朝』、『ヴィクトリア朝：文学・文化・歴史』、英宝社

（中原京子）

## 3. 車イスと思わぬトラブル

真夜中、日々の役割や束縛から解放されて、ベッドにだらりと横たわるとき、あなたとの時空を超えた想像界での交流はもはや行き着くあてもなくなってしまう。ふんわりとした布団の感触が私の身体を包み込み、その温もりを身体へ浸みこませる。そのとたんに、あなたが発する言葉から否応なく膨張したイマージュに引き込まれ、それがあなたの身から発せられる“温もり”という虚構を作り出し、その“温もり”を今度は私の全身に浴びせられる気がしてならないのである。

一方、あなたと私との間が〈机〉という境界線で仕切られつつじかに向き合い、材質や角度という設計そのものが“正しい姿勢”を暗に求めている車イスに私の身体を馴染ませている状況では、かえって車イスによって身体から発せられる緊張の度合いや手の握り具合、腰の曲がり具合が制約されながらあなたと対面している。

反面、車イスによって普段から緊張した姿勢のおかげで、あなたの前では照れくささもなんとか抑えることができている。しかも、机の向こう側に座るあなたのしぐさの一つ一つが私の鼓動を調律し、私の笑いや澄ました表情にテンポをつけ、腰の曲がり具合や肩の突っ張り具合もまるでメロディーにのせて踊るがごとく一定の調和を醸し出していく。

そうした調和が保たれたあなたと私の中に、適量の白いごはんを盛ったスプーンがあなたの手から私の口へ運ばれていく。私はそのスプーンにがっつこうとしたり、早く話したいがために慌てて食べようとしたり、口周りが緊張しているせいか咀嚼が上手くいかず舌を嚙んでしまったりすれば、その反動で口の中に入った白いお米が糸に垂れ下がる蜘蛛のようにだ液にコーティングされながら口の外へ、私たちが思わず口をつぐんでしまうところ（…）へポロッとこぼれてしまう。

舞台の幕が下りるよりもすばやくあなたの手がサッと私から引っ込んでいく。私にはその機敏な動作によってまるで何事もなかったかのように別々の日常へ舞い戻ってしまうような気がしてならなかった。それゆえ、あなたとの触れ合いも夢の彼方の出来事のように生々しさがしだいに薄らいでいくのである。

今日も一日が目まぐるしく過ぎていく。みなが寝静まった真夜中、闇が充満した空間に包まれて、私はベッドに横たわりながら天井をポカンと見つめている。闇の重みとそれに反して何事も柔軟に受けとめてくれる布団の柔らかさのコントラストに押されて、車イスで凝り固められた肉体がしだいにしなやかに、不安やこだわりとともにしっとり、温もりのある闇の奥底へと溶け込んでいった。

(河合翔)

## 4. 常に新たに現れる場

今年度は「現場力と実践知」をはじめ、いくつかの授業に関わらせていただいた。それまで「現場力」というものに全く無知であったが、授業を通して少しずつその外形が見えてきたように思う。ここでは、「現場力」なるものの一端を拙論の事例から照射し、「現場」ならびに「現場力」の遍在性を指摘したい。

筆者は過去に、女子校の生徒が、ヒエラルキーに基づいた日常生活をいかにサバイバルしながら楽しく過ごしているかについて考察した。女子校には、教室内のプレゼンスに関わるヒエラルキーが存在する。それは暗黙の不文律であり、生徒たちは常に自分の位置を確認しながら、適切な行動を選択し実行している。「ハブ（仲間外れ。「村八分」「省く」が語源）にされたら終わり」の切迫した日常は、グループになって相互に「存在論的安心」を手に入れたり、「みんな」と同じモノを持つことで中間層以上の成員資格を得たりするなど、他者との共同（というよりも共犯）によって乗り越えられる。しかし、このような日常も卒業すれば「終わり」である。この有限性ゆえに、生徒たちは他者との共同を一層加速させ、日常は戯れの様相を呈する。苛烈でありながらも終わりの見えるサバイバルは、最早日常（ケ）ではなく、人生のハレの時間として大局的に生きられる。独特の「女子校ノリ」や、モノによる差異化と同一化のゲームなど、生徒たちは戯れることで己に与えられた時間と空間を「適切に」生き抜く。

以上で重要なのは、生徒たちは上記のことを意識的には行っていないということである。もちろん、「ハブにされない」ために、各局面に応じて戦略的なテクニックを用いることもあるだろう。しかし、それらはあくまでも状況に応じた瞬間的な対応であって、彼女たちは教室内の全ての関係を把握しているわけでも、卒業まで安寧に過ごすための絶対的な方法を身に着けているわけでもない。なぜなら教室は、確実に毎日を過ごすという意味では常に同じであるものの、何が起ころかは分からないという意味で不確定性を免れ得ない、常に新しく現れる場だからである。このように、常に新しく立ち現れる場において、自らの経験と他者との共同を駆使して生き抜かんとする女子校の生徒たちの日常に、「現場力」なるものの一端が垣間見られると考えられる。そしてそのような日常は、「常に新たに現れる場」という「現場」である限り、何人にも訪れるという意味で、私たちは、常に既に「現場力」を生きていると言えるのである。

（野島那津子）

## 5. 「制度」と「現場」

毎日がそこで過ごされるものの、教室とは、出来事の不確定性から決して逃れることのできない「常に新たに現れる場」という「現場」であり、その同じでありつつも同じでない毎日を生き抜く術を「現場力」の一端と解することができる。ここでは、かような「現場力」なるものを可能にするものとして「制度」に着目し、「現場力」が「現場」にもたらず帰結を指摘したい。

考えるに、「現場力」を可能にする第一義的条件は、「制度」である。「現場」は、私たちが毎日を生きる存在である限り何人にも訪れるが、「制度」は、「現場」が訪れる以前から存在する。学校での学習には「教育」という「制度」が、看護の実践では「医療」という「制度」が、日常一般の場面においては「社会」という「制度」が存在する（そもそも、「社会」のなかに存在するものはすべて制度である）（今村 1988: 366）。それらは、私たちが入っていく以前からこの世界に在る。私たちの生は、徹頭徹尾「制度」によって貫かれており、詰まるところ「制度」とは、「現場」が現れ出るための必要十分条件であると言える。

ところで、このような「制度」は、個別の具体的で特異な「実践」を阻害するものと捉えられがちである。しかし、そもそも「制度」なき「現場」の出来はあり得ないため、そこで生起する「実践」や「現場力」もまた「制度」の所産である。それゆえ、「生き生き」「具体的」「経験」「他者」「協働（共同）」など、どこかポジティブに響く言葉を用いて表現される場所の「実践」や「現場力」は、一方で、現存の「制度」を間接的に肯定し再生産を容易にする効果を持つ。たとえば、先述の女子校の例では、ヒエラルキーに彩られた息苦しい日常は、再帰的な自己の位置確認や他者との戯れの共同によって乗り越えられていた。そこでは、「現場力」なるものがポジティブな帰結を生んでいる一方、他方で、教室の閉鎖性や権力関係は不問にされ、既存の「制度」の中でいかに生き抜くかという現状維持的な「実践」が帰結される。無論、「現場力」の帰結のあり様はこの限りではない。しかし、「実践」や「現場力」の効果が少なからず（あるいは根こそぎ）「制度」に回収されうることは、常に自覚しておかなければならないだろう。

### 参考文献

今村仁司（1988）「制度」今村仁司編『現代思想を読む事典』講談社：366-367.

（野島那津子）

# 6.

## 笑っているときに起きていること（一）——自分のなかの制御できない部分が露出する

「笑う」、こんな日常的な動作なのに考え始めると、実際そのことで何をやっているのかを説明することは難しい。「笑う」と能動態で表記するのが一般的なのに、往々にして人は自発的には笑わない。人が笑うのは、何か面白いことが起こったのを見たり、聞いたり、体感したときだ。つまり、何らかの事柄を受けとって、そのことで「笑わされる」のが笑いの基本作動だといえる。笑いとは受動的な行為なのである。

そして笑い始めると抑えるのが難しい。爆笑なんてしてしまえば、身体が激しく痙攣し、呼吸が乱れ、涙で目がかすみ、筋肉に痛みまで走る。それなのにとてつもない快樂が得られる。そんな奇妙な状態を意志の力で抑えることは困難だ。さらにいえば、笑い続けるということもほとんど不可能である。ずっと笑っていられば気持ちいいのかもしれないが、勝手に治まってしまう。すると笑いとは受動的な行為であるだけでなく、自分の意志では制御できない行為ということにもなる。

笑っている経験を掘り下げて見えてくるのは、こうした自発的でもなく意志的でもないのに働いてしまう自分の身体や精神の在り方である。いったいこんな働きは何のためにあるのだろうか。

受動的であるという点にもう少し踏み込んでみよう。私たちはたいてい何か「笑わされる」。その経験は、自分の外側から何かはこちらに触れてくることともいえるし、場合によっては暴力的に侵入されることともいえる。すると受動的であるとは、自分と世界や他人、出来事とが接触し、自分がそれらを受け止める働きといえるだろう。

自分に備わる受動性が私と世界をつなげている。そう考えると、受動性とは生きていくうえで非常に重要な働きであるといえる。

以上のことを踏まえて、日常的な場面に戻ってみると、私たちは会話のなかで相手を「笑わそう」とするが、これは相手の意識に上らない受動的で非意志的な部分に働きかけるという非常に高度なコミュニケーションをしていることになるのではないかと。すると私たちは、会話のなかでただ意志や内容を伝達しているだけでなく、それぞれの制御しきれない受動性を刺激し合っているという奇妙な行為をしていることになる。しかし、このことに何の意味や効果があるのか。「笑う」という現象の奥はまだまだ深い。

（山森裕毅）



# 7.

## 笑っているときに起きていること（二）——理解の非対称性が生む「暴力性」

笑いは主に声と表情によって表現される。そのため非常に強い表示機能を持っている。では、笑いは何を表示しているのかと考えると、それは「○○を理解した」ということではないだろうか。

それを確かめる例はいくらでも経験しているだろう。例えば複数の対話者が同じ話題を共有して笑い合うという場面であり、理解の共有による共感の場面といえる。しかし嫌な気分になる場面も多い。数人で話していて、自分以外の全員が笑っているが、何を笑っているのかわからず不安になることがある。ひどいものでは、道である集団にすれ違った後にその集団に笑いが起こると、まるで自分が笑われているのではないかと思うこともある。

こういったネガティブな例によって、「理解」を示す笑いの表示機能は、そこで笑っていない者に対して「無知」を印すことになるといえる。こうして理解が非対称な場合、笑っている側は笑っていない側に対して何らかの優位性や権力を帯びることになる。笑っていない側からは、その優位性は一種の暴力のように感じることもある。

ベルクソンの『笑い』は、こういった理解の非対称性に基づく笑いの暴力性を描き出している。彼によれば、笑いは本来「しなやか」であるものが「こわばり」を示す場面で生じる。ぎこちない動きや、状況の変化に対応できない機械的な反復を示す対象が笑われるのである。このとき笑う者は「しなやかさ」の観点から笑うのであり、その笑いは自分の「こわばり」に気づけていない笑われる対象に対して懲罰的なものとなるという。いわば社会的制裁としての笑いである。

とはいえ、実際の身分や肩書が上の者（権力を持つ者）が笑い、下の者が笑われるということばかりではない。例えば、しばしば私たちは上司や目上の者の「こわばり」を指摘して笑う。理解の非対称性に基づく笑いの暴力性は、こうした反権力的な使用方法もあるといえるだろう。

理解という観点から、共感的、懲罰的、反権力的といった、笑いの使用方法を区別できる。笑いはコミュニケーションのなかで副次的なものではなく、その質を規定する様々な意味や効果を担った指標となっているといえるだろう。

### 参考文献

Bergson, Henri (1900 [1985]), *Le rire*, Quadrige/PUF (アンリ・ベルクソン (1938) 林達夫 (訳)、『笑い』、岩波文庫)

(山森裕毅)

## 8. ダイアログ 1 相槌の音

誰かと話しあうための、ほとんど唯一と言ってよい約束事は、同時に話さないことだろう。当然のことながら、相手と自分が同時に話すと自分の声も相手の声も聴くことができなくなる。話すということは、話している自分の声を聴くことだから、相手の声と自分の声とが重なって不明瞭な音響が生ずると、私たちの思考は混濁してしまい、何が言いたいかわからなくなる。互いに指で耳に栓をして自分の声だけに集中しようとするのは、あまりに不幸な状況といえる。じっさい、それは相手の話を聴きたくないときの最終手段でもある。アッバス・キアロスタミの『TEN』の第一話で、車を運転する母親の話を聴きたくない助手席のこどもがするのは、まさにそれだ。

二人以上の者が同じ場所で同時に話しているところに居合わせ、どちらかの話を選択的に聴くことは、耳が慣れればさほど難しいことではない。それはむしろ日常的になされており、文字通り、何かを聴き分けるということにほかならないだろう。興味深いのは、誰が話していようと聴こうとすると自分が黙ってしまう、という事実だ。この、黙る、とはどういうことなのか。

もちろんそれは、聴いているあいだ、まったく声を出さないということではない。相槌を打つ、という表現が示すように、ふんふん、あー、いやーと、相手の声に合わせて、必ずといってよいほど表情と身振りをとめないながら、声漏れるだろう。このような声は、話すことを促したり、遮ったり、盛り上げたりする伴奏のパートを演じている。このような伴奏する声は、反響や反発、協和と不協和、先取りと反復という、音楽的な機能を果たしている。しかも、その声は伴奏に終始するのではなく、いつでも主旋律に変容する可能性のある、潜在的な話者なのだ。

そう考えてみると、話し合うという舞台では、単純に、聴くと話すの二つの役割が交代で演じられる、というのではなさそうだ。それは抽象化の産物といわなければならない。正確には、役割の交代が生じているのではなく、顕在的な声と潜在的な声のあいだでの音楽的な移行や変容が問題となっているというべきだろう。聴くということは、声を出さないのではなく、むしろ黙って話していることであり、話すということは聴くという音空間を創造することなのだ。

（本間直樹）

# 9.

## ホッチキスは左 45 度？

会社員をしていたころ、「ホッチキスは左45度よ」と先輩に教わった。つまり一カ所でホッチキスをとめるとき、用紙の左肩に右上がり斜め45度の角度で針を綴じるということである。それ以来、私はこの教えをなにか普遍的法則のように思い込み、ひたすら疑いを抱くことなく「左45度」にとめていた。またそれで特に問題も起こらなかったのである。

しかし後に学問の世界（文系）に来てみると、しばしば右肩で綴じた文書と出会った。縦書き文書である。書道という伝統文化を持つ国に育ちながら、いつの間にか無意識に横書きを標準としていたのか、ちょっとしたカルチャーショックのようなものを感じた。先輩に伝授された「左45度」の教えは、ある一定の条件—左から右方向に流れる横書き文書を右利きの人が読む—を「想定」した世界内でのみ通用するものだったのである。このような想定 of 枠をはずして世の中を見回してみると、ホッチキスの位置はたいてい製本に準じ、日本語なら縦書きでは文頭が右上に来るため綴じるのは右肩、横書きでは文頭が左上に来るため左肩、となっていることに気づく。それゆえに横書きでもアラビア語ならば右肩で綴じることになる。いずれにせよ、右利きの読み手が想定されているようである。

したがって常にこの法則の通りだとはかぎらない。左利きや両手が使えない場合や、さらにはメモを取りつつ他方の手で頁をめくるといった読み手の個性やその都度の身体の動きに即してホッチキスのとめ方が決定されたりする。またファイリングまで考慮して、一カ所で綴じた文書を重ねるとそこだけ厚く盛り上がるのを避けるため、綴じる辺の上下から等位置で二カ所をとめるルールが設けられた職場もある。さらに「45度」の神話も崩れ、今や自動ステーブル機能がついたコピー機が登場し、針の向きさえ選択可能である。45度の斜め綴じを見慣れた私は水平や垂直にとどまる針の凛とした姿に思わずはっとしたが、意外とめくり難く破れやすいことに気づき、あらためて斜め綴じを見直したのだった。

今では、文書との新たな出会いの度ごとにどのようにホッチキスをとめるべきか自分で考えてみるようになった。私の書棚に並ぶテーマ別のファイルには、外国語の文書も含めて不揃いなサイズと様式の文書が混在し、会社のそれのように整然としていない。少数派の右綴じ文書などは裏向きにファイルされている。統一性のなさやそれゆえの非効率さは確かにあるけれど、さまざまな個性が一つ屋根の下にいると思えば、何だか楽しい。

(岡野彩子)

# 10. 「責任」を問う — 無責任のすすめ —

歌に曰く、「人生で大事なことは、タイミングにC調に無責任」(青島, 1962)と。無責任とは、なんともけしからぬことだ。しかし、この言葉にわずかながらの後ろめたさを感じながらも、どこか溜飲が下がる思いもするのはなぜだろうか。単に不道徳としての「無責任」ではない何かが含まれているように思えてくる。考えてみれば、「責任」という用語は実に多相的であり、文脈に応じて様々な側面を見せる。道義的責任、法的責任、社会的責任、等々だ。私たちが「責任」について言及するとき、それは実践の場において重要な概念であるにもかかわらず、果たしてどれほどその側面を共有できているのだろうか。

日本語の「責任」は、字義的には「責めを受ける立場に置くこと」であり、他から与えられる義務・罰・負担としての側面が強く、行為者の主体性は希薄な印象を受ける。この語は英語の“responsibility”の訳語として当てられたものだが、もともとは国家の国民に対する「応答すべきこと」としての政治的責任を表すものとして用いられており、個人の自由意志に基づく責任については、近現代まであまり議論されてこなかった(Williams, 2006)。つまり、個人の自由意志にともない「責任」の多相性が生み出されたのだろう。

では、個人的責任とは何に対する応答だろうか。他者の期待であったり律法や社会規範であったり。多くの場合において、「責任」とは、他者とのつながりにおける「呼・応」を指しているだろう。だが、これらの責任を果たしたり、果たせなかったりしたときに騰落するのは「相対的自我」への他者の評価だ。そして、その騰落に一喜一憂するうちに、私たちは次第に「責任」を果たせないことを恐れるようになってしまい、ひいては不当な責任の回避＝「無責任」を犯すことになりかねない。私たちが目指すべきは、「相対的自我」としての責任から離れ、「絶対的的自己」としての責任 — たとえば「主の招き (calling, vocation)」への応答としての責任 — へ至ることなのだ。冒頭の「無責任」とは、実は「相対的自我」の責任から一歩踏み出すことなのかもしれない。

## 参考作品・文献

青島幸男 (1962) 「無責任一代男」[歌詞] 東京：東芝音楽工業。

Williams, G. (2006) “Responsibility,” Internet Encyclopedia of Philosophy,

ISSN:2161-0002, Retrieved Feb 29, 2012, from <http://www.iep.utm.edu/responsi/>

(宮本友介)

# 11. ごはん

ぼくは今日もいつものようにごはんを食べる。箸で白米を一つまみし口へ運ぶ。早喰いのぼくは奥歯で少し噛み砕いたらすぐに飲み込んでしまう。そのせいかよくお腹をこわすが、でも自分ではよく味わって食べていると思っており、何の問題もない。一方、「ごはん」という概念が仮に「口から食べる」という前提によって規定されるものであるならば、それが叶わない人がある。つまり、「口から食べることのできない人」だ。

ぼくはその日、職場で夕食の準備をしていた。食堂に運ばれてきた料理を用意された器に盛り付け、利用者さんに「ごはんをお持ちしました。」と配膳をする。9名の方に食事を配り終えたあと、一人の寝たきり女性の利用者さんの部屋へ向かった。目的は胃ろうを流すためだ。ノックをすると「はい。」という男性の声が聞こえる。「失礼します。」と言って部屋に入ると女性の息子さんとその子どもであろう小さな男の子が面会にみえていた。「こんばんは。」とあいさつをすると、男の子が恥ずかしそうに「こんばんは。」と返してくれた。「お食事のお時間なので、流してもよろしいですか？」と息子さんに伺う。すると、お父さんの足にしがみついていた男の子が、ぼくが持っていた胃ろうの用意を見て、「あっ、パパ、ごはんだ。」と少し嬉しそうな声で言った。

そう、「ごはん」なのだ。口から食べる／食べないとは関係なく、その男の子とその女性にとって、口から食べられなくともそこにあるのは「ごはん」なのだ。「口から食べられる人」からみた価値基準ではない。それを超えている。ごはんが生きることと切り離せないものであるならば、そのどれもがきっと「ごはん」であり、かたちは問われないはずだ。「そうでなかったかもしれないのに、そうでしかなかった」ということを受け止める男の子のまぶしさは、女性の生きるすがたをやさしく照らしているようだった。

男の子の帰り際、ぼくは冷蔵庫にあったチョコレートを数個あげた。「溶けないうちに食べてね。」と言って渡すと、さっきと同じように恥ずかしがりながら「ありがとう。」と返してくれた。その言葉にぼくも思わず「ありがとう。」と口からこぼれた。会話としておかしいやりとりのはずなのに、何故ぼくはそのとき「ありがとう。」と言ってしまったのか。振り返って考えても理由が見つからない。

(安田伸行)

# 12. 日常の些細な事柄

鬱蒼と茂る深緑の木々、その間に開けた庭を一人の男性が黙々と歩いている。庭の隅にはベンチが置かれ、そこで一人の男性が物思いにふけている。彼らは互いに視線を合わせず、自分の作業に没頭する。フランスのプロワにあるラ・ボルドという森の中の城、これを精神科クリニックにしたのは、フェリックス・ガダリとそのカウンセラー。冒頭は、ここの住人たちを撮影したドキュメンタリー映画『すべての些細な事柄』（監督：ニコラ・フィリベール）の一場面だ。ゆったりした日々の暮らしを彩るのは、年に一度、入所者や職員が総出で出演するオペレッタの練習と、その当日の様子である。

彼らは毎年、家族や近隣の人たちを招いてオペレッタの公演を行う。その準備は、案内状を作ったり、皆で演奏をしながら歌をうたったり、台詞を覚えたり、衣装を選んだりしながら進められていく。この映像を見ていると、クリニックでの営みであることを忘れてしまう。誰が入所者で、誰がスタッフなのかを区別することも難しい。またその準備は、治療やリハビリのプログラムにも見えない。が、皆がともに緊張し、楽しみ、充実するという営みは、そうした機能をも合わせ持っているように思われる。

しかし、「ハレ」ともいえる練習や準備、本番までの期間を終えると、その映像には再び、庭を歩く人の姿やベンチに座る人の姿が現われる。それは一方で、ハレの日が終わると、何事もなかったように元に戻ってしまう、そうした施設の日常を映し出しているようにも見える。しかし、そもそも長期に施設で暮らしている彼らにとってその公演は、年に一度やって来る毎年の行事であり、ラ・ボルドの暮らしのリズムでもある。ハレの日とそれ以外の日に分けるのは、彼らの暮らしぶりを外側から捉えようとする我々の方である。

木立の間に庭が広がっているからそこを歩き、ベンチが置かれているから、そこに腰を下ろして考え事をする。オペレッタの季節になったのでその練習を始める。そのつど、その状況に応じているのだ。その応答自体が暮らしを形作っていると言ってもいいだろう。現場力が私たちの営みを支える知恵であるならば、それは、その現場の外側にあるのではなく、日常の些細な出来事への応答、その応答がつくるリズムそのものとしてあるのだ。

（西村ユミ）

# 13. 現場力と知識力——スキンシップ的コミュニケーションの欠如のケースより

早朝に見たドキュメンタリー、強迫性障害の男の子の話。小学校で、東京から関西に引っ越し、イジメにあい、4年間引きこもり、今15歳。原因は引っ越しでも、イジメでもなく、夫婦の不和、父親の不在と無関心。そして自分の感情を理屈で言って、苦しむ子供にぶつける母親。一番いけない場面を見た…。

2012年2月12日 - 6:43

那須高原にある精神科病院を退院する日、不安で赤ちゃん返りして母親におんぶをせがむ息子に、踵をサッと返し、防御の体制になって一言、「先生に抱いてもらい」。母親とは、「平和」、「長生き」、「無病」と言葉を交わす。が、スキンシップがない。インタビューで息子の心理を知的に分析する母親…。

2012年2月12日 - 6:49

家族に、しかも一番身近にいて、不安や恐怖が起こったら頼りたい母親に、専門家みたいな分析、絶対にしてほしくないよ。医者でさえ、悩みに悩んで、治療の決め手がないというのに。医者「母親と離れるべき」の診断は正解。働いていてセレブの親は、「知」が勝ちすぎ、悩みベタ。15歳も子供だよ！

2012年2月12日 - 6:57

「言葉で幸せになれる対人コミュニケーションは、まず人を幸せにする」。そういう意味で、言葉の研究をしているものの、スキンシップの大事さには及ばない。スキンシップ的コミュニケーションは、一朝一夕で身につくものではない。悩んで苦勞して、時間をかけて身につけるもの。これって日本的？

2012年2月12日 - 7:14

- \* 子供が必要としたのは、第三者には呪文のように思える、母親の「平和」「長生き」「無病」の短い言葉。
- \* 母親が必要としたのは、距離を置くことのできる、子供を客観的にみるための知識力とそれを表示する言葉。
- \* 現場力とは、知識力と別のものではないかと問題提起してくれる例が、ここにひとつある。

(中原京子)

# 14. ひとすくい

「看護師さんは（人に触れるのに）ためらいがないですね」と言われる。ないわけではないが、「触れてなんぼ」と育った。「今のひとはどうだろう」と首を傾げる。口では大事と言うが手が出ていない現実が見える。患者に電子体温計を渡し「脈は（とらないんですか？）」と訊ねられると経皮酸素飽和度計の画面を示し、プラスチック手袋のままで検脈したそうだ。マスクをつけ手袋をつけ、機械や専門用語で防御する。私の職場でも顔まで覆うようなマスク姿が横行する。それは患者や家族から見ると拒絶の姿勢に感じる。医師も看護師も患者に距離をおくのが普通になったのだろうか。CTも撮った。胃カメラも施行した。問診も受けた。丁寧な説明もしてくれた。しかし、主治医が触れてくれたと感じたのは入院して抗がん剤治療のルート確保（静脈注射）の時が初めてだった、といった話も聞く。

病室を巡り、「充電！」とか「お手当て！」とか言いながらこすり合わせた両手を患者さんの背中に当てたり掌を包み込むと、温もり以上のものが伝わる。手は黙して雄弁だ。手指や足趾をゆっくり経絡に沿ってマッサージしていると、部分から全体へ柔らかくほどけ次第に弾性を帯びてくる。相互交流を身体全体がきっと喜んでいるのだ。身体に触れることは気もちにふれることになる。医療や介護の「障（生）老病死」の場ではふとこぼれ落ちてしまう「ことば」や「おもい」に出会う。息をのむ、小さくため息をつく。長い夜、近づく終わりの日が明日なのか、明後日なのか、将来はあるのか。「不」や「無」のつく思いがうごめく。そんな時、「ひとすくいでんなあ」と76歳の男性。私には「一掬い」と聞こえたが「人救い」だったらいい。ひとは大切に思うものを大切にしたいと下から上へとすくう。温かい確かな手でひとすくいしたいものだ。

まど・みちおの『臨終』の詩をふわりと思い出した。 神さま／私という耳かきに／海を  
／一どだけ掬（すく）わせてくださいまして／ありがとうございました／海／きれいでした  
／この一滴の／夕焼を／だいじにだいじに／お届けにまいります

また研究会での小林恭先生は多くを語らず「鶴の一声」ならぬ「恭のひとすくい」をくださる。私は未熟さゆえ気づかぬこともあったが光をあて色をつけ、生かそうと返して下さる中で私も救われた一人だった。

## 引用文献

まど・みちお・集英社編集部（2005）「いわずにおれない」集英社be文庫：183

（上條美代子）



# 15. 「とつとつダンス」ワークショップ

## ■ 「足を見つめる」

いつものように軽いストレッチ体操の後、砂連尾さんの不思議なワークショップが始まります。今日はどんなことになるのか、からだの奥からいろんな蕾が花咲きそうです。

「ふだん手ですることを、今日は足でやってみましょう。自分や他の人の足の表情をしっかりと見つめるんですよ」と、砂連尾さん。

きょとんとしながら、自分が立っている床を、足でゆっくりと撫でてみる。それから、引っ搔いてみたり、つねってみたり、マッサージしたり…。もちろん、手をするようにはできません。だから、みんな考えながら自分の足を動かそうと工夫しています。でも、頭で考えても駄目なんですね。足が床に触れるところで、足に考えてもらわないと、納得できる動きにならない。いつも、頭でからだを動かしていると思っていたのに、そうじゃなかった。人の声や表情がそれぞれ違うように、足にもその人の表情が生まれています。面白いことは足下にあるんですね。

## ■ 「鉛筆ダンス」

子ども時代、鉛筆で紙にくるくる線を描いて遊んだ覚えがあるでしょう。1月30日のダンスワークショップで、この鉛筆が主役になりました。

一枚の紙を間にして、二人が鉛筆を持って向かい合います。どちらかが鉛筆で紙に線を描きます。それに合わせて、もう一本の鉛筆が追いかけます。ゆっくり動く曲線、素早く滑る直線、ジグザグや点線、円や三角、塗りつぶしもあります。鉛筆に姿を借りた追跡劇、大人も夢中になってしまいます。

紙と鉛筆の間からは、いろんな音が生まれ、リズムカルに点を打てば、鉛筆の演奏です。線の形に音も合わせると楽しさは倍増です。まるで鉛筆のダンス・ミュージカル！

二人から三人四人と参加者が増えると、鉛筆が群れをなして踊って歌って大騒ぎ。みんなの瞳が輝きます。もう誰かの真似をする必要はありません。

終わったあと、紙の上に残ったたくさんの線と点は、一緒に過ごした楽しい時間の痕跡、不思議な魅力がありました。

(西川勝)

# 16. ダイアログ2 表現

私たちをとりまくすべてのもの、世界は、豊かな表現で満ち溢れている。光や重力はそれだけですでに表現であり、ときに優しく、ときに厳しく、私たちに直接に語りかけてくる。私たちの肉体も、つねに表現の内側に属している。表現に促されて運動し、その運動によってあらたに表現に加わっていく。私たちの意志が肉体に命ずるずっと手前で、肉体は震え、動き、表現を先取りしている。私たちの意志は、そうした肉体の表現に運ばれるだけだ。

表現の背後にそれを表現するものを探そうとすると、私たちはかえって表現を見失ってしまう。表現されたものは、直に、そこに、そのように、現れている。それに触れるためには、ただ折り返し表現してみるほかない。見る、聴く、感じることは、それ自体で表現の始まりであり、表現の内側に身を滑らせることなのだ。表現するものと表現されたものは、感じるという一回の出来事のなかで、切り離すことのできない表裏の関係を結んでいる。目や耳は受容の器官ではなく表現の器官なのだ。

感じることのなかで始まる表現は、その変形や発展へと自らを押し開いていく。私たちはなぜ目にしたことを描き、耳にしたことを書き、夢中になって世界にカメラを向けるのか。なぜ熱心に話したいと思うのか。なぜ怒りや悲しみは単なる心の動きや感情ではなく、それ自体で表現へと向かうのか。なぜ私たちは歌うのか。さらに、なぜ私たちは表現された声、顔、文章、映像にときに魅了され、ときに反発するのか。つまり、表現はなぜ表現を醸成し、繁殖させるのか。

そうした表現の連なりを支えているのは特定の能力でも物質でもない。どれほど複雑で高度な精神性に昇華されたものであれ、表現は肉体をもつことの呻きや喜びに根をもち、新たな土壌へと移植される。文章であれ、ダンスであれ、絵画であれ、音楽であれ、表現は肉体と肉体のあいだに成立する一つの出来事であり、逆に、肉体は表現が表現へと折り返される結節点となる。表現から身を逸らし、沈黙することもまた、新たに到来するべき表現の核になるだろう。沿ったり、離れたたり、飛び込んだり、抜け出したり、有でもなく無でもなく、遊戯のように。

（本間直樹）

## Communication-Design (コミュニケーションデザイン・センター紀要)

### 投稿規程

#### 1. 投稿者の資格

- 投稿者のうち少なくとも1名は、大阪大学の教員・研究員、および学生を含むこととする。
- ただし、Communication-Design 編集担当（以下、編集担当）が承認または原稿執筆を依頼したものについてはこの限りではない。

#### 2. 投稿内容・種類

##### 2.1 投稿内容

- 投稿原稿の内容は自由であるが、広義のコミュニケーションデザインの概念・実践・教育方法の開発に寄与するものを対象とする。
- 原稿の対象は、論文、実践報告、研究ノートとする。

##### 2.2 種類

###### 2.2.1 論文（査読あり）

- 当該分野における新しい研究・開発の成果の記述で、研究の対象、方法、あるいは結果に独創性、創造性があり、かつ明確で価値のある結果や事実を含む。

###### 2.2.2 実践報告（査読なし<sup>1)</sup>）

- 実践報告には下記のような内容を含む。
  - 教育、および社会学連携等の実践報告
  - 技術報告（設備・装置・ソフトウェアなどの設計・試験・運用・評価などの新しい経験やその結果の報告で、実用的価値のあるもの）
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

###### 2.2.3 研究ノート（査読なし<sup>1)</sup>）

- 上記のカテゴリに当てはまらない原稿（下記の例示を参照）。
  - 短報（速報）：今後論文にまとめる予定の試論、又は速報的なもの。
  - 資料：論文のスタイルに収まりにくいもの。委員会・研究会が集約した意見・報告書など。
  - 編集者への手紙（letter to editor）：論文に対する意見、編集に対する意見など。
  - 書評：書物に対する評。
  - その他
- なお、実践報告については、テキスト以外（画像・音声・映像等）を中心とした形式の投稿も可能とする。ただしその場合であっても、その背景や著者の意図に関する記述（1000文字以上）を含むこととする。

#### 3. 投稿原稿の作成及び提出

##### 3.1 原稿の様式

- 原稿の様式は、別紙執筆要綱<sup>ii)</sup>による。なお、編集担当において表記等をあらためることがある。

##### 3.2 受理日

- 投稿原稿が編集担当に到着した日付をもって原稿の受理日とする。

##### 3.3 内容

- 投稿原稿の内容は、原則として他の書籍・雑誌において未発表でかつ査読中でないものとする。

## 4. 査読手続き

### 4.1 査読の対象となる原稿

- 論文とする。
- 実践報告および研究ノートについては、編集の観点から修正を依頼する場合がある。

### 4.2 査読者の選出等

- 投稿された原稿について、編集担当が2名の査読者を選出し、別紙の査読要領にしたがって査読を行う。

### 4.3 投稿原稿の採否

- 査読の結果に基づいて編集担当が決定し、投稿者に通知する。

### 4.4 原稿の修正

- 査読照会事項について原稿の修正を行う場合は、旧原稿と査読所見に対する回答書を添えて、編集担当が指定した期間内に書類一式を再提出する。
- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。

## 5. 著者校正

- 著者校正は1回とし、再校以降は編集担当が担当する。
- なお、マルチメディアの投稿原稿等については、配信上の加工が必要とされる場合、編集担当と著者との間で事前に協議することがある。

## 6. 媒体

- Communication-Design は、大阪大学学術情報庫（OUKA）を利用したオンラインジャーナルの形態で公開することを原則とする。

## 7. 著作権

- 本誌に掲載された内容については、投稿者に著作権があるものとする。
- また本誌は電子版も発行し、原稿は原則として大阪大学学術情報庫 OUKA に PDF ファイル又はその他の形式で掲載するため、著者はこれについての著作権上の複製権及び公衆送信権をコミュニケーションデザイン・センターに対して許諾することとする（これに掲載することを許諾しない場合は投稿時に申請するものとする）。
- また投稿において著作権者の存在する写真、図版、資料を引用する場合には、投稿者が責任をもって許可を得ておくこと。

## 8. 7号の投稿期限及び投稿先

- Communication-Design は、年2回の刊行とする。
- 原稿の投稿申し込みは、氏名、投稿原稿タイトル（仮題）を記し、2012年2月15日までに編集担当にメールで送付する。編集担当アドレスは、以下の通りである。
- [cscd-hensyu11@cscd.osaka-u.ac.jp](mailto:cscd-hensyu11@cscd.osaka-u.ac.jp)
- 原稿の投稿期限は2012年3月15日17時とする。封筒に「投稿原稿在中」と朱記し、コミュニケーションデザイン・センター事務局庶務担当に提出する。

## 附則

- この規程の改正は、2011年9月から施行する。

i 査読なしの場合でも、編集の観点から、原稿の改訂等を編集担当より依頼する場合がある。

ii 執筆要綱及びその他の書類は次の URL を参照のこと。 <http://cscd.osaka-u.ac.jp/data/orangebook/>

# Communication-Design 7

異なる分野・文化・フィールド——人と人のつながりをデザインする

企画 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター

編集・制作 三成賢次  
本間直樹  
内野 花  
山内保典

表紙デザイン 清水良介

2012年7月31日 発行

発行 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター (CSCD)  
〒560-0043 大阪府豊中市待兼山町1-16  
Tel. 06-6850-6111 Fax. 06-4865-0121  
<http://www.cscd.osaka-u.ac.jp/>

印刷所 能登印刷株式会社

© Center for the Study of Communication-Design and Authors. All Rights Reserved.

2012 Printed in Japan

本書における全ての著作権は、大阪大学コミュニケーションデザイン・センターとその著者に帰属します。無断転載を禁ず。

㊞〈日本複写権センター委託出版物〉

本書を無断で複写複製（コピー）することは、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

本書をコピーされる場合は、事前に日本複写権センター（JRRC）の許諾を受けてください。

JRRC [http://www.jrrc.or.jp eメール：info@jrrc.or.jp 電話：03-3401-2382]

ISSN 1881-8234